高松市埋蔵文化財調査報告　第79集

高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

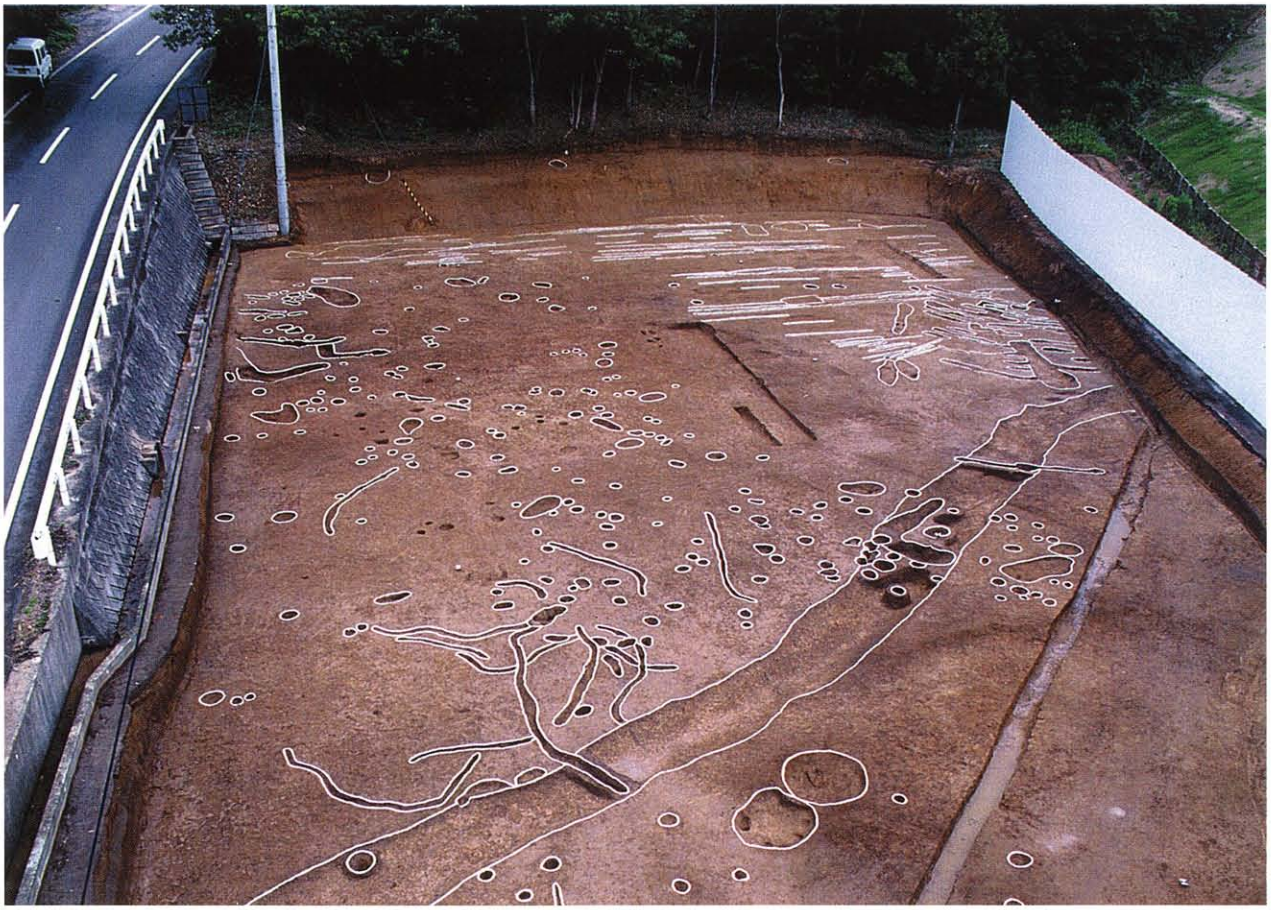
第3冊

奥の坊遺跡群Ⅲ

（大空北遺跡・奥の坊奥池西遺跡）

2004年12月

高 松 市 教 育 委 員 会



大空北遺跡I区全景

奥の坊奥池西遺跡検出縄文時代落とし穴状遺構

例　言

1．本報告書は，高松市東部運動公園（仮称）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第３冊で，高松市高松町に所在する大空北遺跡（おおそらきたいせき）と奥の坊奥池西遺跡（おくのぼうおくいけにしいせき）の報告を収録した。また，附編として香川大学が所蔵する大空遺跡(おおそらいせき)の土器の実測図を掲載した。

2．発掘調査地ならびに調査期間は次の通りである。

大空北遺跡　　調 査 地：高松市高松町大空
　　発掘調査：平成 11 年４月 16 日～６月４日
　　整理作業：平成 12 年４月１日～平成 16 年 12 月 28 日

奥の坊奥池西遺跡　調 査 地：高松市高松町奥ノ坊
　　発掘調査：平成 12 年４月 17 日～７月 25 日
　　整理作業：平成 13 年４月１日～平成 16 年 12 月 28 日

3．発掘調査から整理作業及び報告書編集まで高松市教育委員会文化部文化振興課文化財専門員大嶋和則が担当した。

4．発掘調査から整理作業，報告書執筆を実施するにあたって，下記の関係諸機関ならびに方々からご教示を得た。記して厚く謝意を表すものである。(五十音順，敬称略)
香川県教育委員会，(財)香川県埋蔵文化財調査センター，香川大学，古高松土地改良区，
地元自治会，地元水利組合
片桐孝浩，佐藤亜聖，丹羽佑一，松田重治

5．発掘調査から整理作業，報告書執筆まで下記の方々の協力を得た。記して厚く謝意を表すものである。
(敬称略)
信吉純恵，大野宏和，川部浩司，増田ゆず（当時，徳島文理大学大学院）
林田真典，水田貴士（当時，徳島文理大学）

6．本調査に関連して，以下の業務を業務委託発注により実施した。
航空写真測量　　アジア航測（株）
遺物写真撮影　　西大寺フォト

7．挿図として，国土地理院発行１／25,000 地形図「高松北部」「高松南部」「五剣山」「志度」を一部改変して使用した。

8．本報告の高度値は海抜高を表し，方位は国土座標第Ⅳ系（日本測地系）の北を示す。

9．本書で用いる遺構の略号は次の通りである。
SA：柱穴列　SB：掘立柱建物　SD：溝　SH：竪穴住居　SK：土坑　SO：落ち込み
SP：柱穴　NR：旧河道

10. 調査は複数年度・複数調査区・複数遺構面になることが想定されたため，遺構番号は調査区番号，遺構面番号，遺構番号の順に５桁の数字で記載した。(例　Ⅳ区・第２遺構面・土坑 109 ＝ SK42109)

11. 発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。
（なお，大空遺跡の土器については香川大学の所蔵である。）

本文目次

巻頭図版

第１章　調査の経緯と経過
　第１節　事業全体の経緯と経過…… 1
　第２節　大空北遺跡及び奥の坊奥池西遺跡の発掘調査の経緯と経過…… 2
　第３節　整理作業の経過 …… 3

第２章　地理的・歴史的環境
　第１節　地理的環境…… 4
　第２節　歴史的環境…… 4

第３章　大空北遺跡の調査成果
　第１節　Ⅰ区の調査…… 7
　第２節　Ⅱ区の調査…… 21
　第３節　まとめ…… 26

第４章　奥の坊奥池西遺跡の調査成果
　第１節　調査成果…… 31
　第２節　まとめ…… 57

附編　香川大学所蔵大空遺跡出土弥生土器の概要…… 63

観察表…… 67

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第 1 図　高松市東部運動公園(仮称)整備事業発掘調査地‥2
第 2 図　大空北遺跡・奥の坊奥池西遺跡調査区割図……3
第 3 図　周辺遺跡分布図（S=1/25,000）……6
第 4 図　Ⅰ区南壁土層断面図①……8
第 5 図　Ⅰ区南壁土層断面図②……9
第 6 図　Ⅰ区北壁土層断面図……10
第 7 図　Ⅰ区第 1 遺構面平面図……11
第 8 図　Ⅰ区第 2 遺構面平面図……13
第 9 図　SH12001 平・断面図……15
第 10 図　SH12002 平・断面図……15
第 11 図　SH12003 平・断面図……16
第 12 図　SH12004 平・断面図……16
第 13 図　SH12005 平・断面図……17
第 14 図　SH12006 平・断面図……18
第 15 図　SH11001 平・断面図……19
第 16 図　SD12017 断面図及び出土遺物実測図……20
第 17 図　SK12001 平・断面図及び出土遺物実測図……20
第 18 図　SK11001 平・断面図及び出土遺物実測図……21
第 19 図　Ⅱ区南壁土層断面図……22
第 20 図　Ⅱ区平面図……23
第 21 図　SB21001 平・断面図……24
第 22 図　SD21001 断面図及び出土遺物実測図……24
第 23 図　SD21002 断面図及び出土遺物実測図……24
第 24 図　Ⅱ区検出溝断面図……25
第 25 図　SK21001 平・断面図……25
第 26 図　SK21002 平・断面図……25
第 27 図　弥生中期の主要遺構……27
第 28 図　中世の主要遺構……28
第 29 図　近世の主要遺構……29
第 30 図　遺構面直上検出遺物実測図……31
第 31 図　Ⅰ区西壁土層断面図……32
第 32 図　Ⅰ区北壁土層断面図……33
第 33 図　Ⅱ区西壁土層断面図……34
第 34 図　奥の坊奥池西遺跡平面図……35
第 35 図　SH21001 平・断面図……37
第 36 図　SB21001 平・断面図……38
第 37 図　SB21002 平・断面図……39
第 38 図　SB21003 平・断面図及び出土遺物実測図…… 40
第 39 図　SB21004 平・断面図…… 41
第 40 図　SD11006 断面図及び出土遺物実測図…… 43
第 41 図　SD11013 断面図及び出土遺物実測図…… 43
第 42 図　Ⅰ区検出溝断面図…… 43
第 43 図　SD21001 断面図及び出土遺物実測図…… 44
第 44 図　SD21002 断面図及び出土遺物実測図…… 45
第 45 図　SD21006 断面図及び出土遺物実測図…… 45
第 46 図　SD21008 断面図…… 46
第 47 図　SD21008 出土遺物実測図①…… 46
第 48 図　SD21008 出土遺物実測図②…… 47
第 49 図　SD21010 断面図及び出土遺物実測図…… 48
第 50 図　SD21013 断面図及び出土遺物実測図…… 48
第 51 図　SD21015 断面図及び出土遺物実測図…… 49
第 52 図　SD21017 断面図及び出土遺物実測図…… 49
第 53 図　Ⅱ区検出溝断面図…… 50
第 54 図　SE11001 平・断面図…… 50
第 55 図　SK11004 平・断面図…… 51
第 56 図　SK11005 平・断面図…… 51
第 57 図　SK11011 平・断面図…… 51
第 58 図　SK11013 平・断面図及び出土遺物実測図…… 52
第 59 図　SK11017 平・断面図及び出土遺物実測図…… 52
第 60 図　SK11022 平・断面図…… 53
第 61 図　SK11024 平・断面図及び出土遺物実測図…… 53
第 62 図　SK11026 平・断面図及び出土遺物実測図…… 53
第 63 図　SK11034 平・断面図…… 54
第 64 図　SK21010 平・断面図及び出土遺物実測図…… 54
第 65 図　SK21017 平・断面図…… 55
第 66 図　SK21031 平・断面図及び出土遺物実測図…… 55
第 67 図　SK21061 平・断面図…… 56
第 68 図　SK21079 平・断面図及び出土遺物実測図…… 56
第 69 図　縄文時代後期の主要遺構…… 58
第 70 図　弥生時代後期の主要遺構…… 59
第 71 図　13 世紀の主要遺構…… 60
第 72 図　近世以降の主要遺構…… 61
第 73 図　香川大学所蔵大空遺跡出土遺物実測図①…… 64
第 74 図　香川大学所蔵大空遺跡出土遺物実測図②…… 65

挿表目次

表 1　東部運動公園（仮称）整備事業に伴う発掘調査経過‥ 1
表 2　大空北遺跡整理作業工程表…… 3
表 3　奥の坊奥池西遺跡整理作業工程表…… 3

写真図版目次

写真 1　大空北遺跡全景（南から）
写真 2　Ⅰ区完掘状況（西から）
写真 3　Ⅱ区完掘状況（南から）
写真 4　Ⅰ区北壁土層（南東から）
写真 5　Ⅱ区南壁土層（北東から）
写真 6　SD21017 完掘状況（南東から）
写真 7　竪穴住居群（西から）
写真 8　近世鋤溝群（南東から）
写真 9　SK11001 完掘状況（南から）
写真 10　SK21001 断面（南から）
写真 11　SK21001 完掘状況（南から）
写真 12　SD21001 完掘状況（西から）
写真 13　作業風景
写真 14　大空北遺跡出土遺物
写真 15　奥の坊奥池西遺跡全景（南から）
写真 16　機械掘削状況
写真 17　Ⅰ区遺構検出状況（南から）
写真 18　Ⅱ区遺構検出状況（南西から）
写真 19　遺構検出作業風景
写真 20　遺構掘削作業風景
写真 21　Ⅰ区西壁土層（北東から）
写真 22　Ⅰ区西壁土層（東から）
写真 23　Ⅰ区完掘状況（南から）
写真 24　Ⅰ区完掘状況（南東から）
写真 25　Ⅱ区完掘状況（南西から）
写真 26　Ⅱ区完掘状況（西から）
写真 27　遺跡全景（東から）
写真 28　遺跡全景（西から）
写真 29　SB21001 完掘状況（南から）
写真 30　SB21001 礎石（東から）
写真 31　SE11001 水溜め検出状況（北から）
写真 32　SE11001 完掘状況（北から）
写真 33　SK11013 断面（西から）
写真 34　SK11013 完掘状況（西から）
写真 35　SK11022 断面（北から）
写真 36　SK11034 断面（南東から）
写真 37　SK21010 完掘状況（南から）
写真 38　SK21017 断面（北から）
写真 39　SK21031 土器出土状況（南から）
写真 40　SK21031 断面（南から）
写真 41　SK21061 断面（南西から）
写真 42　SK21061 完掘状況（南から）
写真 43　SD21001 断面（東から）
写真 44　SD21008 断面（東から）
写真 45　SD21008 断面（西から）
写真 46　SD21010 断面（北東から）
写真 47　SD21017 完掘状況（西から）
写真 48　職場体験学習風景（遺構掘削）
写真 49　職場体験学習（遺構掘削）
写真 50　職場体験学習（接合）
写真 51　職場体験学習（土器洗浄）
写真 52　奥の坊奥池西遺跡出土遺物①
写真 53　奥の坊奥池西遺跡出土遺物②
写真 54　奥の坊奥池西遺跡出土遺物③
写真 55　香川大学所蔵大空遺跡出土弥生土器①
写真 56　香川大学所蔵大空遺跡出土弥生土器②
写真 57　香川大学所蔵大空遺跡出土弥生土器③

第１章　調査の経緯と経過

第１節　事業全体の経緯と経過

高松市では全市的なレベルでまとまった総合的なスポーツレクリエーション活動拠点として高松市東部運動公園（仮称）の整備が計画され，その基本構想･基本計画が平成５年度に作成された。運動公園整備予定地となったのは高松市の東端の丘陵地帯で，高松町の奥ノ坊・大空・金川渕地区で，総事業面積は 47.2ha に及ぶ広大なものであった。整備予定地内には香川県の弥生後期を代表する大空遺跡をはじめ，奥ノ坊古墳及びスベリ古墳の存在が知られており，この他にも未周知の埋蔵文化財が所在する可能性は高いと考えられた。このため工事に先立ち整備予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて都市開発部公園緑地課と協議を行い，事前に試掘調査を実施し，埋蔵文化財の包蔵状況を明らかにすることで合意した。

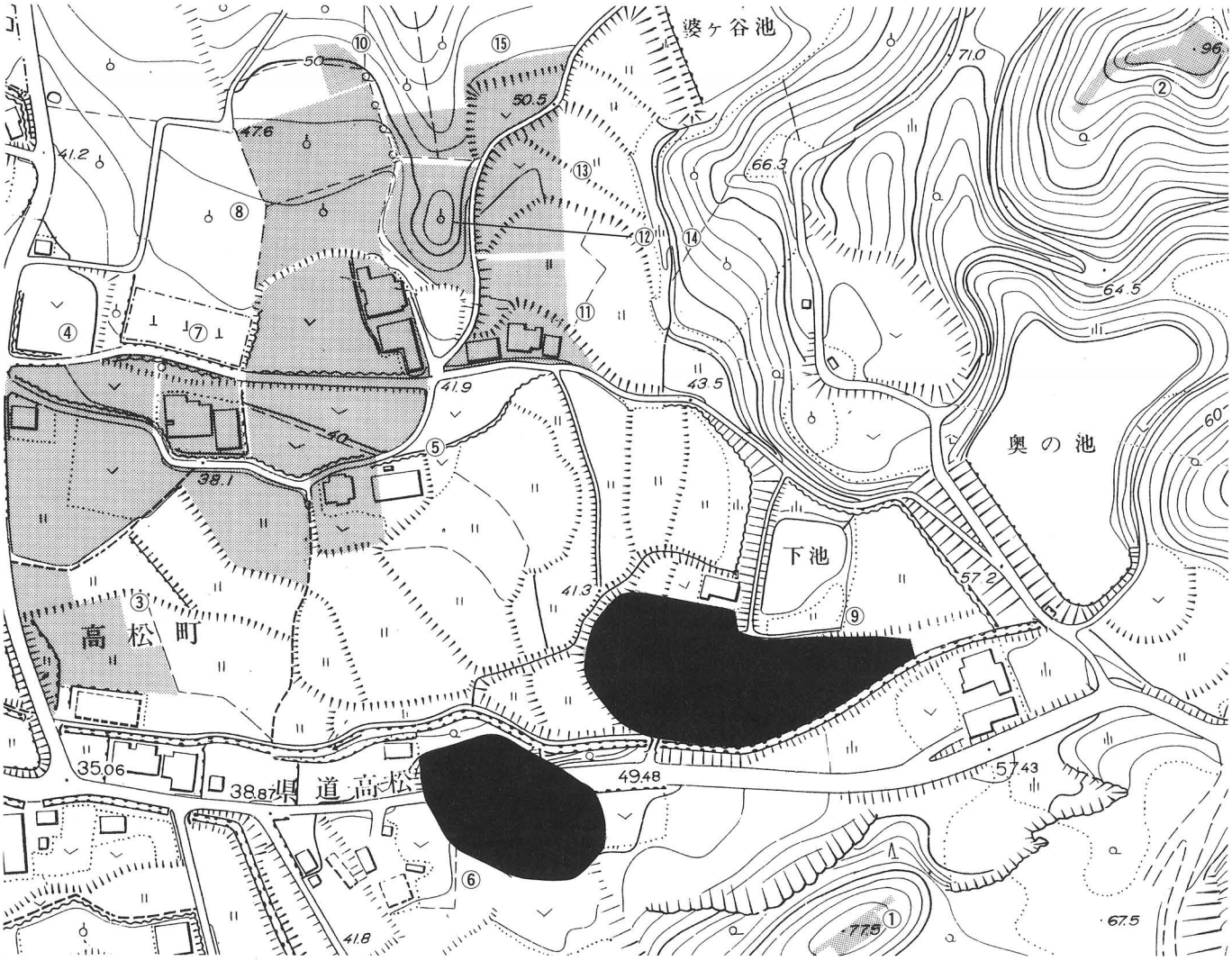
高松市教育委員会では，平成７年度から用地買収の完了した土地について試掘調査を実施した。平成７年度では大空古墳，金川渕古墳，奥ノ坊２号墳（その後の本調査で３・４号墳も発見）を発見した。これを受け，再度都市開発部公園緑地課と埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い，工事の事前に記録保存を行うことで合意した。試掘調査はその後も継続して行い，平成９年度までに整備予定地内に 203 箇所のトレンチを掘削した。この試掘調査により，周知の埋蔵文化財包蔵地であった大空遺跡，奥ノ坊古墳，スベリ古墳の３遺跡については，既にほとんど消滅しており事前の保護措置の必要がないことが判明した。一方，新たに奥の坊権現前遺跡，奥の坊遺跡，奥の坊奥池西遺跡，大空北遺跡の４集落遺跡が発見された。新たに発見された遺跡の総面積は約 30,000m^2 である。これらの遺跡についても順次都市開発部公園緑地課と協議を行い，工事前に記録保存を行うことで合意した。

一方，運動公園整備工事は平成９年度から洪水調整池の工事を行い，平成 12 年度後半から全体の造成工事を行うことが予定されていた。このため洪水調整池部分の発掘調査を早期に着手し，平成 12 年度前半までに全調査を終えることとした。調査対象地は遺跡総面積 30,000m^2 のうち現道及び現水路を除く約 26,910m^2 とした。その後，工事計画が変更になり，平成 14 年度後半から全体造成工事が開始されることになり，発掘調査についても平成 14 年度前半まで期間を延長できることとなった。このため，当初は掘削深度が深く，調査面積も広大で，調査期間も短いことから，掘削業務を委託発注して調査を実施していたが，平成 11 年度より比較的掘削深度の浅い部分については直営で調査を行った。

また，平成 15 年１月には運動公園整備工事に使用する粘土を新田町久米池から採取することとなり，同地に所在する久米池遺跡について工事立会により調査を実施した。

表１ 東部運動公園（仮称）整備事業に伴う発掘調査経過

番号	遺跡名	調査区	調査期間	調査面積(m^2)	調査方法	報告書
	試掘調査	全域	1995.8.4～1997.10.8	2,997	直営	Ⅰ（1999.3 刊）
①	大空古墳	全域	1996.2.14～1996.2.23	150	直営	
②	金川渕古墳	全域	1996.2.23～1996.3.8	300	直営	
③	奥の坊権現前遺跡	Ⅰ～Ⅲ	1997.2.10～1997.3.24	1,560	委託	Ⅱ（2004.3 刊）
④	奥の坊権現前遺跡	Ⅳ～Ⅵ	1997.10.7～1998.3.13	5,200	委託	
⑤	奥の坊遺跡	Ⅰ～Ⅳ	1998.9.14～1999.2.19	4,900	委託	未刊
⑥	大空北遺跡	全域	1999.4.16～1999.6.4	2,200	直営	Ⅲ（本報告書）
⑦	奥の坊遺跡	Ⅴ	1999.5.28～1999.7.13	700	直営	未刊
⑧	奥の坊遺跡	Ⅵ・Ⅶ	1999.11.10～2000.3.3	2,300	委託	未刊
⑨	奥の坊奥池西遺跡	全域	2000.4.17～2000.7.25	3,600	直営	Ⅲ（本報告書）
⑩	奥の坊遺跡	Ⅷ	2000.10.2～2000.12.28	300	直営	未刊
⑪	奥の坊遺跡	Ⅸ	2000.10.5～2001.1.12	1,180	委託	未刊
⑫	奥ノ坊古墳群（測量）	全域	2001.6.5～2001.6.27	－	直営	未刊
⑬	奥の坊遺跡	Ⅹ	2001.8.27～2002.1.18	1,320	委託	未刊
⑭	奥ノ坊古墳群	全域	2001.9.4～2001.11.28	1,020	直営	未刊
⑮	奥の坊遺跡	ⅩⅠ	2002.4.2～2002.7.5	1,180	直営	未刊
	久米池遺跡	全域	2003.1.8～2003.1.21	200	立会	未刊



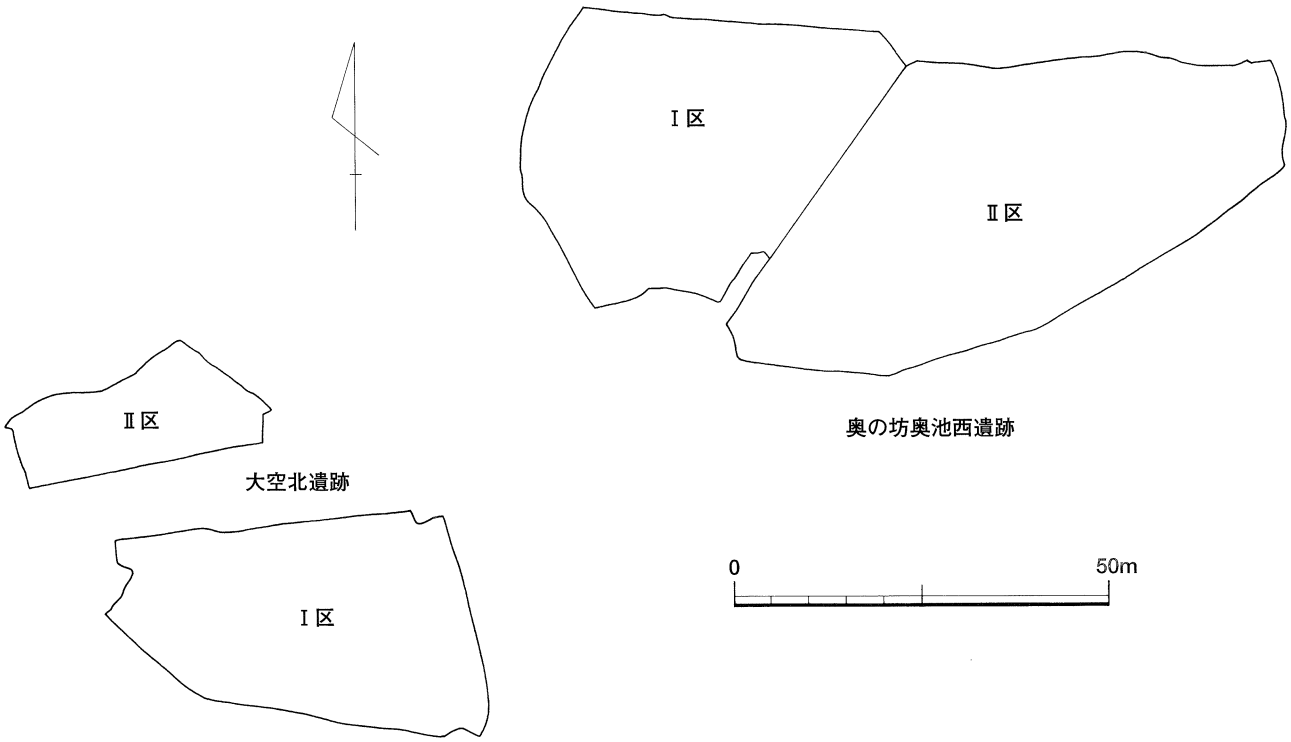
第１図　高松市東部運動公園（仮称）整備事業発掘調査地

第２節　大空北遺跡及び奥の坊奥池西遺跡の発掘調査の経緯と経過

運動公園予定地内では，平成７年度から用地買収の進捗状況に応じて試掘調査を実施してきた。このうち，大空北遺跡と奥の坊奥池西遺跡については平成８年度の試掘調査によってその所在が明らかになったものである。一方，試掘調査と並行して早急に工事を着工する洪水調整池予定地から本調査を実施していったところ，平成10年度末で洪水調整池予定地のうち未買収地を除くほぼ全域の調査が完了した。平成11年度以降の調査地について事業者である高松市公園緑地課との協議の結果，洪水調整池予定地周辺部にも工事が及ぶ可能性があることから，洪水調整池に近い部分から順次本調査を実施していくことで合意した。なお，洪水調整池を掘削した土をそのまま盛土として利用する場所として大空北遺跡部分も含まれていたことから，平成11年度早期に発掘調査を実施することとした。やや調整池からはずれた奥の坊奥池西遺跡については平成12年度に発掘調査を実施することとした。一方，高松市教育委員会では平成11年度から調査費用の軽減のため，従来の掘削業務の委託発注の見直しを行い，大空北遺跡と奥の坊奥池西遺跡については，市の直営調査として実施することとした。

大空北遺跡は平成11年４月16日から６月４日に調査を実施した。調査面積は2,200m^{2}である。遺跡の中央を東西に県道が横切っていることから，県道の南側をⅠ区，北側をⅡ区とした。

奥の坊奥池西遺跡は平成12年４月17日から７月25日に調査を実施した。調査面積は3,600m^{2}である。遺跡の現況は棚田となっており，特に遺跡の中央で，１ｍの段差があり，この段差部分の西側をⅠ区，東側をⅡ区とした。当初はこの段差部分で調査区を区切っていたが，遺構面まで掘り下げるとほぼ平坦面となったことから，土層図を作成した後調査区間の区切りをなくした。なお，調査期間中の平成12年７月11日には高松市立協和中学校２年生12名が職場体験学習として調査に参加した。



第２図　大空北遺跡・奥の坊奥池西遺跡調査区割図

第３節　整理作業の経過

東部運動公園整備事業に伴う発掘調査は平成 14 年度まで行われた。このため，各調査年度の翌年度に土器洗浄や接合等の基礎整理を行うのみで，本格的な整理作業は全調査終了後の平成 14 年度後半から実施した。

大空北遺跡及び奥の坊奥池西遺跡の整理作業は，平成 12・13 年度において基礎整理を実施し，本格的な整理作業は平成 16 年 1 月から 12 月において実施した。以下に工程表を掲載した。

表２ 大空北遺跡整理作業工程表

	平成12年度	平成15年度			平成16年度								
		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
基礎整理													
実　測													
トレース													
レイアウト													
報告書執筆													

表３ 奥の坊奥池西遺跡整理作業工程表

	平成13年度	平成15年度			平成16年度								
		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
基礎整理													
実　測													
トレース													
レイアウト													
報告書執筆													

第２章 地理的・歴史的環境

第１節 地理的環境

高松市は香川県のほぼ中央，瀬戸内海に面している。高松市域の大部分は高松平野によって占められている。東を立石山，雲附山等に，南を日山，上佐山，西を五色台山塊に遮られ，北に瀬戸内海を望み位置しており，南北約 20 ｋｍ，東西約 16 ｋｍを測る。平野の境界を画する低位山塊及び屋島，紫雲山等の独立山塊は，侵食の容易な花崗岩層（三豊層群）が風化侵食に抵抗の強い安山岩層に覆われていたことによって侵食解析から取り残されて形成されたメサまたはビュートと呼ばれるもので，讃岐ののどかな田園風景の象徴の一つである。

高松平野は四国中央部に東西に連なる讃岐山脈に端を発する中小河川により形成された沖積地である。高松平野には，西から本津川，香東川，春日川，新川といった河川が瀬戸内海に向けて北流している。本調査区の位置する古高松（高松町・新田町・春日町）は，この中の春日川，新川にほど近い地域である。春日・新川の両河川は水量に乏しく，平野中央部を流れる香東川のように大規模な扇状地は見られない。また，古高松の北部は，江戸時代初期の干拓により陸地化されたものであり，寛永 10（1633）年の『讃岐国絵図』によると，その頃の海岸線はかなり内陸に入り込んでおり，屋島は島として描かれている。北を屋島に面した海岸（旧地形による），東を立石山山塊，南を久米山丘陵，西を春日川によって限られた高松平野北東部の一角は，古代・中世を通じて「高松」（讃岐国山田郡高松郷）と呼ばれたが，天正 16（1588）年の生駒親正による高松城築造以後は，城下高松に対して「古高松」と呼称されてきた。江戸時代以前の古高松の地形が推定可能な史料として香西成資が古老の話を元に享保４（1719）年に成立させた『南海通記』がある。その中に天正 10（1582）年頃の地形として「…春日ノ里ニ至ル，此所ハ屋島山，石清尾山両受ノ間，入海ニテ山田郡小山ノ下マデ潮サシ来ル，遠干潟ナ春日里ト木太郷ノ間，海ノ中道アツテ通用ス。…」と記載している。ここでいう小山とは，現在の高松市新田町小山にあたると考えられ，この小山近辺まで海岸線あるいは河口が湾状に入り込んでいたと想定できる。

今回，東部運動公園（仮称）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査事業として発掘調査が行われた「奥ノ坊」は高松町の北東端にあたり，地形的には高松市と牟礼町にまたがる標高 100 ～ 200 ｍの山塊の，西側低丘陵地の尾根及び谷部に位置する地域である。現在はかなり内陸的な様相を示すが，上記の推定海岸線から考えると海岸から１～ 1.5km と非常に近かったと推測される。

第２節 歴史的環境

高松平野では，昭和 60 年代以降，高松東道路建設，太田第２土地区画整理事業，空港跡地再開発などの大規模プロジェクトに伴い発掘調査件数が増大したことによって遺跡数は飛躍的に増大した。また新たな遺跡の発見と併せて，香東川の旧河道が平野の形成に大きな影響を及ぼしていた事実も次第に明らかになってきた。今回の調査地区は高松平野の東部にあたり，平野北西部に位置する石清尾山塊と共に遺跡の多い地帯として早くから認識されてきた地域で，近年も数多くの遺跡が調査されている。

調査地区周辺の遺跡の大部分は弥生時代から古墳時代にかけてのものであるが，旧石器時代，縄文時代の遺物，遺構も若干知られている。旧石器時代については，本格的な遺構は知られていないが，久米池南遺跡（東山崎町）においてナイフ型石器が出土している。縄文時代については，小山・南谷遺跡において落とし穴状の土坑が 14 基検出されているほか，旧河道中から縄文土器が出土している。本報告書の奥の坊奥池西遺跡においても落とし穴と考えられる遺構が検出されており，小山・南谷遺跡との関連が注目される。また平野部の発掘調査において縄文晩期を中心とした遺跡出土例の増加が特筆でき，林・坊城遺跡，浴・長池遺跡，浴・長池Ⅱ遺跡，井手東Ⅰ遺跡，井手東Ⅱ遺跡，居石遺跡，上天神遺跡，東中筋遺跡，宗高・坊城遺跡などをあげることができる。これらの多くは旧河道の堆積から遺物の出土が確認されたものであるが，井手東Ⅰ遺跡では遺物の確認はなかったものの，地表面下約 70cm からアカホヤの堆積層が確認されており，縄文早期の高松平野の形成過程をうかがうことができる。

弥生時代前期の遺跡としては，平野中央部では二重の環濠が検出された汲仏遺跡等が知られているが，平野東部では現在のところ発見されていない。中期前半では今回の調査事業で発見された奥の坊遺跡が見られる。南向きの緩斜面に営まれた集落で，多量の土器・石器に伴い分銅形土製品等も出土している。また，牟礼町羽間

では細形銅剣が出土している。中期後半では久米山東側丘陵上に立地する高地性集落の久米池南遺跡がある。後期前半では，大空遺跡，スベリ山南遺跡，南谷遺跡，小山・南谷遺跡がある。この中の，大空遺跡は香川県の弥生時代後期前半の標式土器が出土したことで知られる遺跡である。後期後半では牟礼町の原中村遺跡があげられる。

古墳時代になると，周辺では集落遺跡は発見されていない。平野中央部では空港跡地遺跡，上天神遺跡などで前期初頭まで集落が存在していたことが確認されている。また，太田下・須川遺跡では古墳時代中期の遺構を検出している。古墳としては，高松平野では積石塚として有名な石清尾山古墳群があるが，平野東部では盛土古墳しか見られない。高松市茶臼山古墳は全長 60 mの前方後円墳で，後円部には竪穴式石室が２箇所設けられており，第１主体からは鍬形石２点，画文帯神獣鏡１点などが出土している。また高松市茶臼山古墳に続く，前期から中期にかけての茶臼山古墳群，後期の小山古墳，久本古墳，山下古墳，瀧本神社古墳，岡山小古墳群，平尾古墳群といった古墳が引き続いて築かれていく。後期の久本古墳は讃岐唯一の石棚を設けた横穴式石室を有するもので，出土品として承盤付銅椀，石棚直下に置かれた亀甲型陶棺等がある。

古代の遺跡では，『日本書紀』にも記載されている古代山城屋嶋城の存在が知られている。近年の調査で城門遺構や石垣が検出されている。また新田本村遺跡と小山・南谷遺跡では高松平野の条里地割に先行し，方向の異なる条里地割が発見されている。古代寺院としては山下廃寺がある。古式の瓦を出土していることが知られているが，発掘調査は行われていないので詳細は不明である。また屋島北嶺の千間堂において 10 ～ 11 世紀と考えられる礎石建物及び集積遺構が検出されており，屋島寺の前身遺構と考えられている。

中世に入ると高松平野でも武士の台頭が目立つ。特に中央政権との関わりも多く，数多くの戦いが行われている。まず，源氏と平氏が屋島に戦い，那須与一や佐藤継信の戦い振りが『平家物語』によって今日まで伝えられている。南北朝期には讃岐の守護となった高松（舟木）頼重が喜岡城を築城するが，北朝方の細川定禅の攻撃により落城した。その後喜岡城は秀吉の四国征伐時にも落城している。中世の遺跡としては，中世末～近世初頭にかけての溝で区画された屋敷が検出された川南・西遺跡があげられる。

近世の遺跡としては，近年高松城周辺で数多くの調査が実施されており，武家屋敷等が検出されている。平野東部では，東山崎・水田遺跡や川南・東遺跡等の農村が見られる。

参考文献

『古高松郷土誌』古高松郷土誌編集委員会 1977
『久米池南遺跡発掘調査報告書』高松市教育委員会 1989
『県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　小山・南谷遺跡Ⅰ』香川県教育委員会 1997
『県道高松志度線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　小山・南谷遺跡』平成５年度　香川県教育委員会 1994
『史跡天然記念物屋島 －史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書Ⅰ－』高松市教育委員会 2003
『県道高松志度線緊急整備工事および県立医療短期大学建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　原中村遺跡』香川県教育委員会 2000
『高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第１冊　奥の坊遺跡群Ⅰ』高松市教育委員会 1999
『高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第２冊　奥の坊遺跡群Ⅱ』高松市教育委員会 2004
『一般国道 11 号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第１冊　浴・長池遺跡』高松市教育委員会 1993
『一般国道 11 号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第３冊　浴・長池Ⅱ遺跡』高松市教育委員会 1994
『一般国道 11 号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第４冊　井手東Ⅰ遺跡』高松市教育委員会 1995
『一般国道 11 号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第５冊　井手東Ⅱ遺跡』高松市教育委員会 1995
『一般国道 11 号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第７冊　居石遺跡』高松市教育委員会 1995
『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第１冊 東山崎・水田遺跡』香川県教育委員会 1992
『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第２冊　林・坊城遺跡』香川県教育委員会 1993
『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第４冊　太田下・須川遺跡』香川県教育委員会 1995
『都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告 第１冊　川南・西遺跡』高松市教育委員会 1999
『都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告 第２冊　川南・東遺跡』高松市教育委員会 2000
「新田本村遺跡」『香川県文化財調査年報 平成８年度』香川県教育委員会 1997
「新田本村遺跡」『香川県文化財調査年報 平成９年度』香川県教育委員会 1999

第３図　周辺遺跡分布図（S=1/25,000）

1　奥の坊権現前遺跡	2　奥の坊遺跡	3　大空北遺跡	4　奥ノ坊奥池西遺跡	5　奥ノ坊１号墳（消滅）
6　奥ノ坊２～４号墳	7　金川渕古墳	8　大空古墳	9　スベリ古墳（消滅）	10　大空遺跡（消滅）
11　大空南遺跡	12　屋嶋城跡	13　喜岡城（高松城）跡	14　羽間遺跡	15　長尾１号墳
16　長尾２号墳	17　長尾３号墳	18　南谷遺跡	19　小山・南谷遺跡	20　新田本村遺跡
21　小山古墳	22　山下古墳	23　山下廃寺	24　久本古墳	25　岡山古墳群
26　岡山小古墳群	27　漆谷古墳群	28　久米池遺跡		

大　空　北　遺　跡

第３章 大空北遺跡の調査成果

第１節　Ｉ区の調査

(1) 概要と基本層序

Ｉ区は調査地の南半にあたり，調査前の状況は１枚の水田となっていた。なお，現状では調査地の南側についても平坦面が続くが，昭和50年代の花崗土採取によってできたものであり，本来は北西方向に延びる尾根が所在したことが地図からうかがえる。Ｉ区の本来の地形は，丘陵部の中腹に位置し，北向きの緩斜面であったことがうかがえる。また，現地表面は44.0mとほぼ水平であるが，地山面は南東部で43.8m，北西部で43.0mを測り，南東から北西方向に傾斜した地形であったことがうかがえる。南東部は削平のため１面のみしか遺構面を確認していないが，北西部については２面の遺構面を確認できた。

調査区南壁と北壁において断面を作成した。まず，南壁の基本層序は，28層に分層できた。第１層は花崗土の客土で，花崗土採取時に盛土されたものと考えられる。第２～16層についても細かく分層したが，比較的新しい時期の客土である。17・18層は花崗土採取前の耕作土である。第28層の灰黄色粘質シルト層は遺物を含まないことから地山である。耕作土と地山の間の第19～27層はすべて遺構埋土である。このため，耕作土直下地山であり，南壁で確認できた遺構面は１面だけである。なお，断面で確認できた遺構のうち第24層の黒色砂混粘質土層はSD12017埋土であり，弥生時代の遺構であるが，その他の遺構については灰白～褐灰色の埋土であり，同色の埋土の遺構出土遺物から概ね近世以降の遺構と考えられる。

次に，調査区北壁の基本層序であるが，８層に分層できた。第１層は現耕作土で，ほぼ水平な堆積である。第２層は客土である。西側ほど厚く堆積していることがうかがえる。第３・４層は旧耕作土と床土である。調査区の西側部分のみに認められる層序で，第２層の客土によって複数枚の水田を１枚にしたことがうかがえる。第５層の暗灰黄色砂混粘質土層，第６層の黒褐色砂混粘質土層，第７層の褐灰色砂混粘質土層はいずれも西側ほど厚い堆積となっている。これらの層序からはほとんど遺物が出土しておらず，具体的な堆積年代は不明である。なお，北壁断面では遺構が見られなかったが，第６層上面において灰白～褐灰色の埋土の遺構を検出しており，第１遺構面とした。概ね近世以降の遺構面と考えられる。第７層以下は南壁第28層と同じ灰黄色粘質シルト層が見られ，遺物を含まないことから地山である。この地山面において第８層の黒褐色砂混粘質土層が掘削されていることから，南壁第28層上面を第２遺構面とした。第８層の黒褐色砂混粘質土層はSD12017埋土であることから，第２遺構面については概ね弥生時代の遺構面と考えられる。遺構面直上においては第５図S1のサヌカイト製の削器が出土した。

なお，調査区の東部から南部にかけては調査時に第１遺構面において第２遺構面の遺構も検出していたが，調査時には各遺構の時期が不明であったため，すべて第１遺構面に帰属する遺構として調査を行った。本報告書においても，本来第２遺構面の遺構であるが，第１遺構面の遺構として取り扱っている。

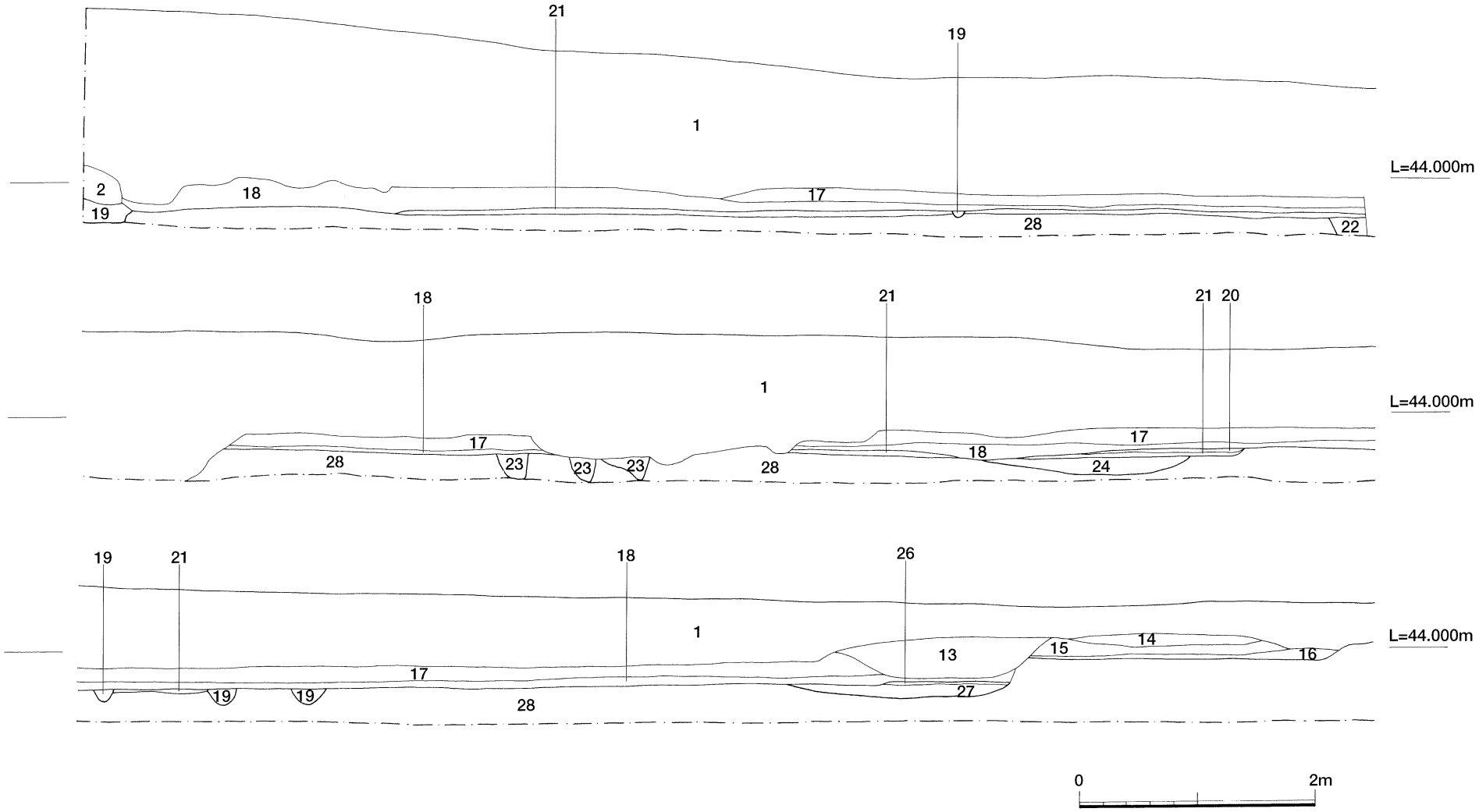
(2) 弥生時代の遺構

SH12001（第９図）

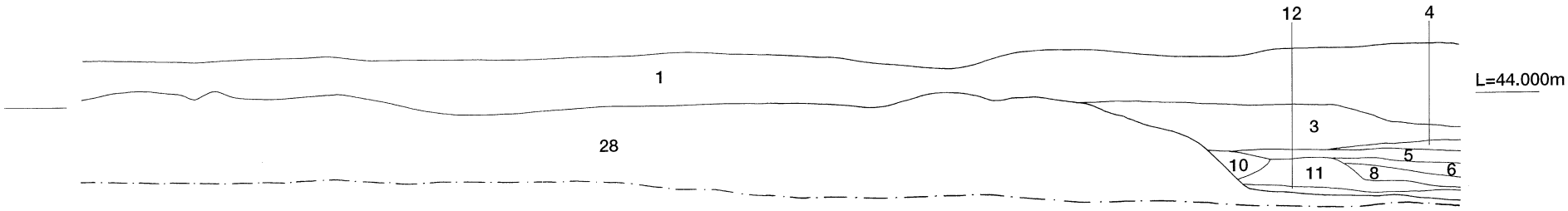
第２遺構面の北西部で検出した小溝群から竪穴住居が数等復元できる。SH12001はＬ字に曲がる２本の溝から4.5m × 2.8m以上の小型方形の平面形態が復元できる。溝埋土は黒色砂混粘質土である。推定復元の住居内には柱穴等を多数検出しているが，南部に片寄っており，柱の位置を特定できない。遺物は出土しておらず，時期は不明である。

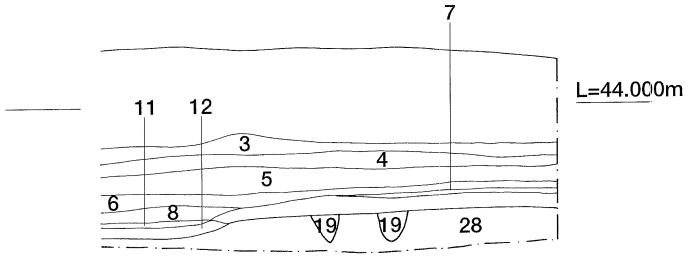
SH12002（第10図）

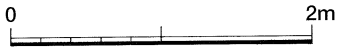
SH12002はＬ字に曲がる溝と直線の溝から4.35 × 3.0m以上の小型方形の平面形態が復元できる。溝埋土は黒色砂混粘質土である。推定復元の住居内においては柱穴等の遺構はまったく検出していない。遺物は出土しておらず，時期は不明である。なお，復元した住居はSH12001と切り合い関係を持つと考えられるが，溝での切り合いは無く，いずれが先行するかは不明である。

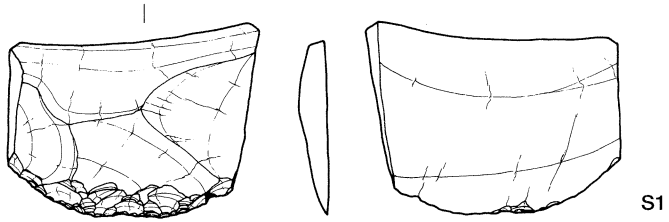


第４図　Ⅰ区南壁土層断面図①



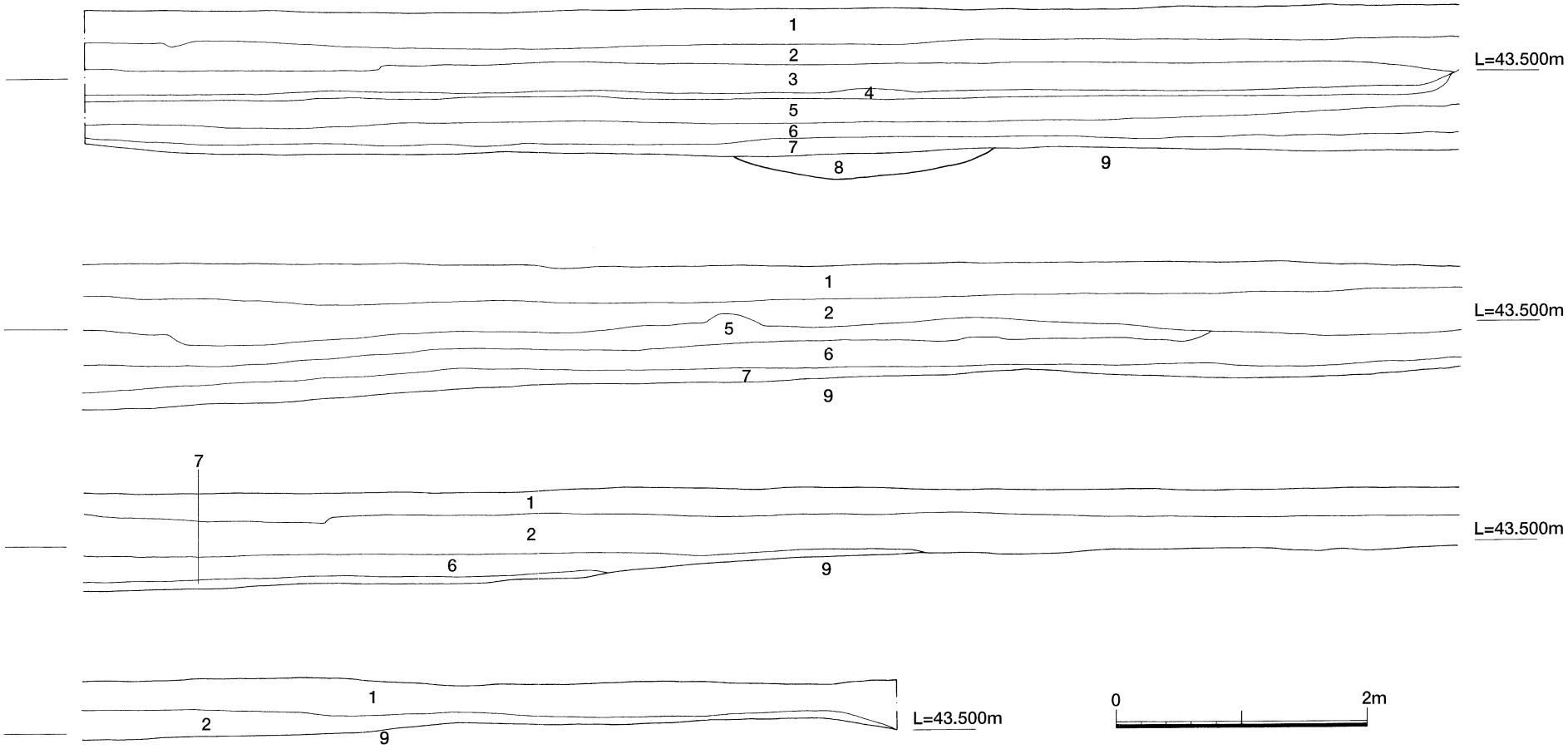






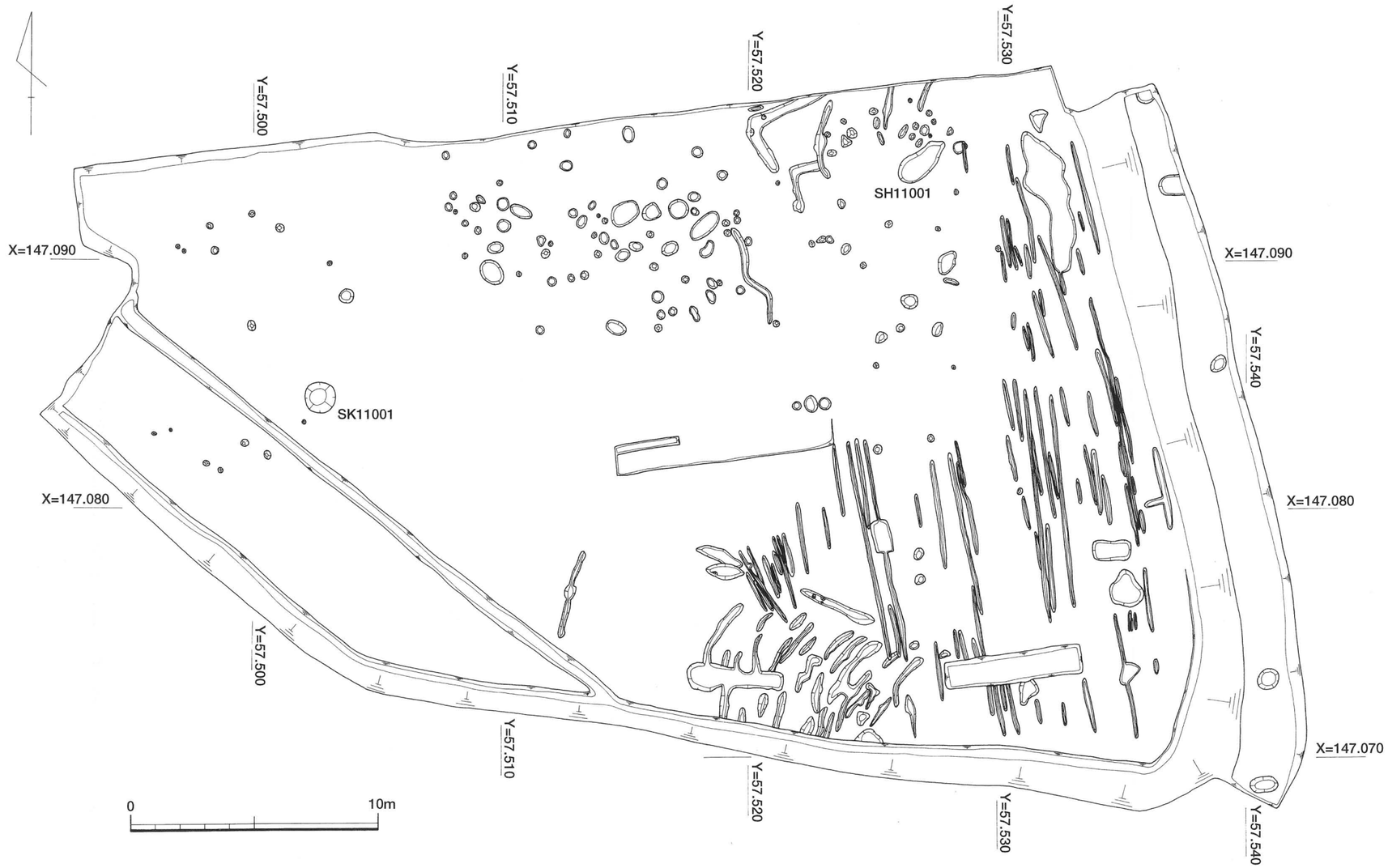
1	客土			
2	10YR	6/1	灰	粘質シルト
3	2.5Y	6/1	黄灰	砂混粘質土
4	7.5YR	4/1	褐灰	粗砂
5	7.5YR	3/2	黒褐	粗砂
6	2.5Y	4/1	黄灰	粗砂
7	2.5Y	8/3	淡黄	シルト質粘土
8	2.5Y	3/2	黒褐	砂混粘質土
9	2.5Y	3/3	暗オリーブ褐	砂混粘質土
10	2.5Y	8/4	淡黄	シルト質粘土
11	10YR	4/1	褐灰	粘質シルト
12	10YR	4/1	褐灰	砂混粘質土
13	5Y	4/1	灰	砂混粘質土
14	10YR	5/1	褐灰	砂混粘質土
15	2.5Y	4/1	黄灰	砂混粘質土
16	2.5Y	4/2	暗灰黄	シルト質極細砂
17	耕作土			
18	10BG	4/1	暗青灰	砂混粘質土（旧耕作土）
19	7.5Y	5/1	灰	シルト質極細砂
20	2.5GY	5/1	オリーブ灰	砂泥粘質土
21	10YR	5/4	にぶい黄褐	粗砂
22	7.5YR	6/6	橙	粗砂
23	10YR	4/1	褐灰	砂混粘質土
24	10YR	2/1	黒	砂混粘質土
25	5Y	7/2	灰白	粘質シルト
26	7.5YR	4/2	灰褐	粗砂
27	10YR	4/1	褐灰	砂混粘質土
28	2.5Y	7/2	灰黄	粘質シルト（地山）

第５図　Ⅰ区南壁土層断面図②



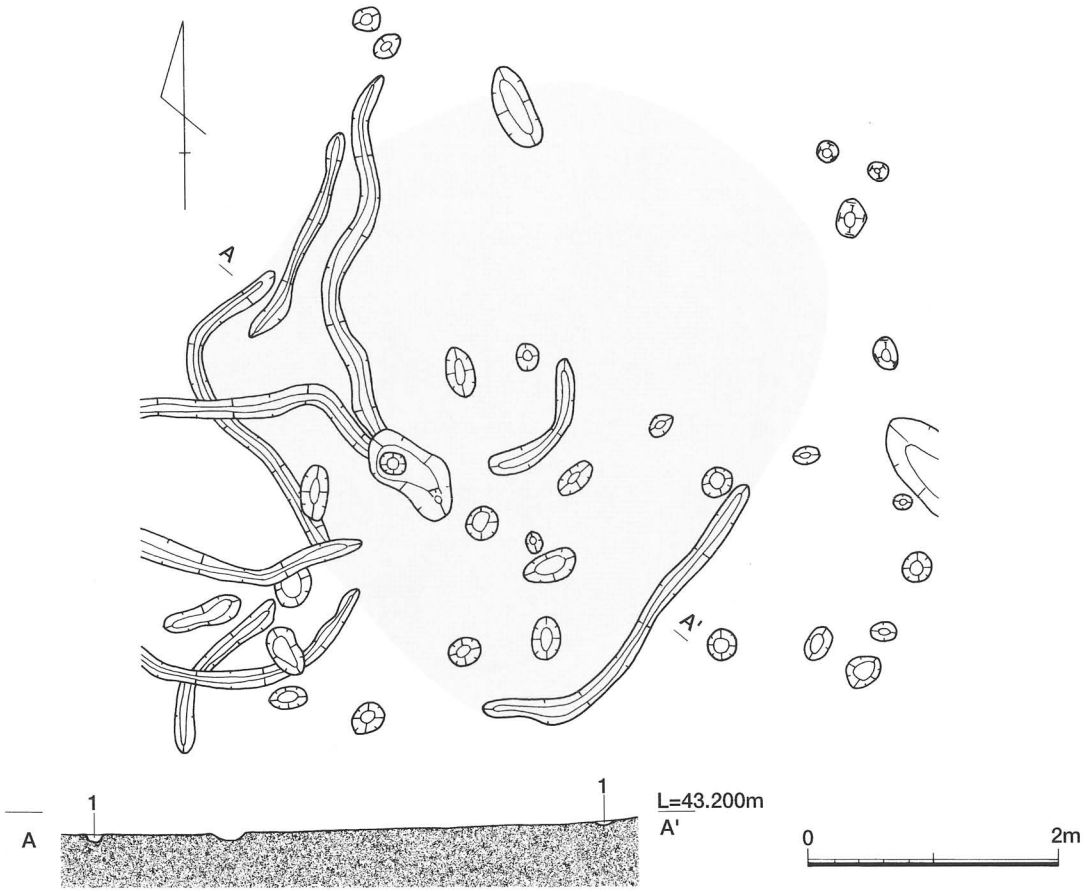
1 耕作土
2 客土（花崗土）
3 耕作土
4 床土
5 10YR 4/2 暗灰黄 砂混粘質土
6 10YR 3/1 黒褐色 砂混粘質土
7 10YR 4/1 褐灰 砂混粘質土
8 10YR 3/1 黒褐色 砂混粘質土
9 2.5Y 7/2 灰黄 粘質シルト（地山）

第6図 Ⅰ区北壁土層断面図



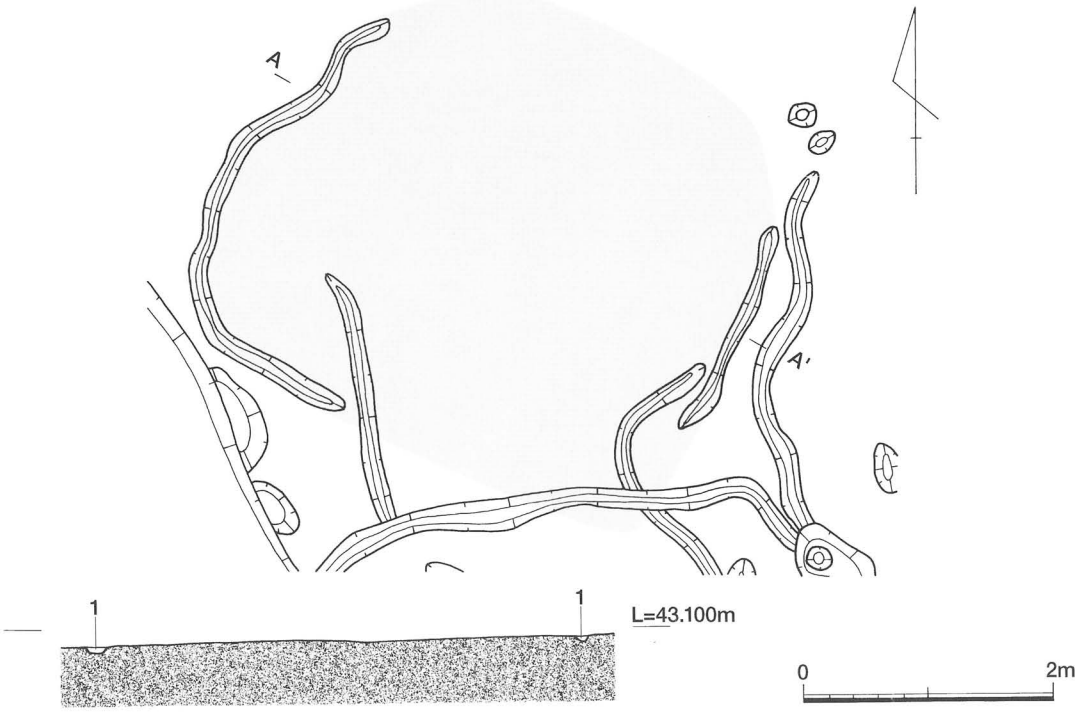
第７図　Ⅰ区第１遺構面平面図

第８図　Ⅰ区第２遺構面平面図



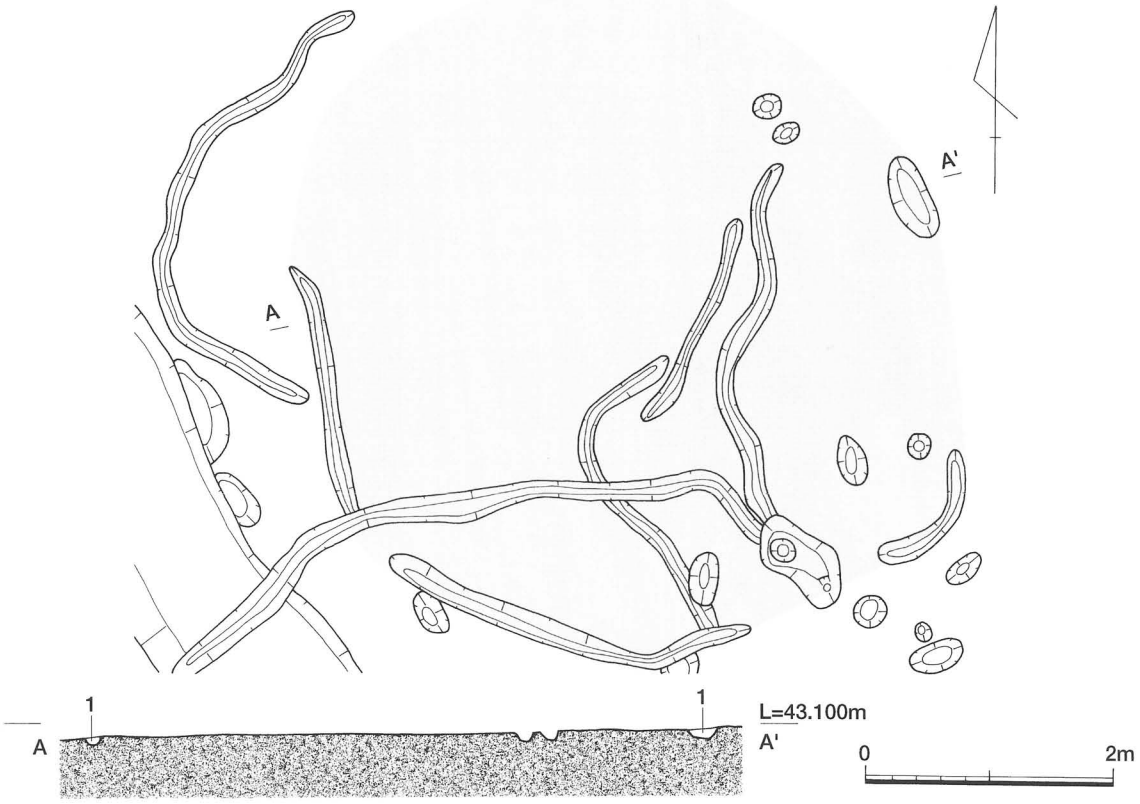
1　10YR　2/1　黒　砂混粘質土

第 9 図　SH12001 平・断面図



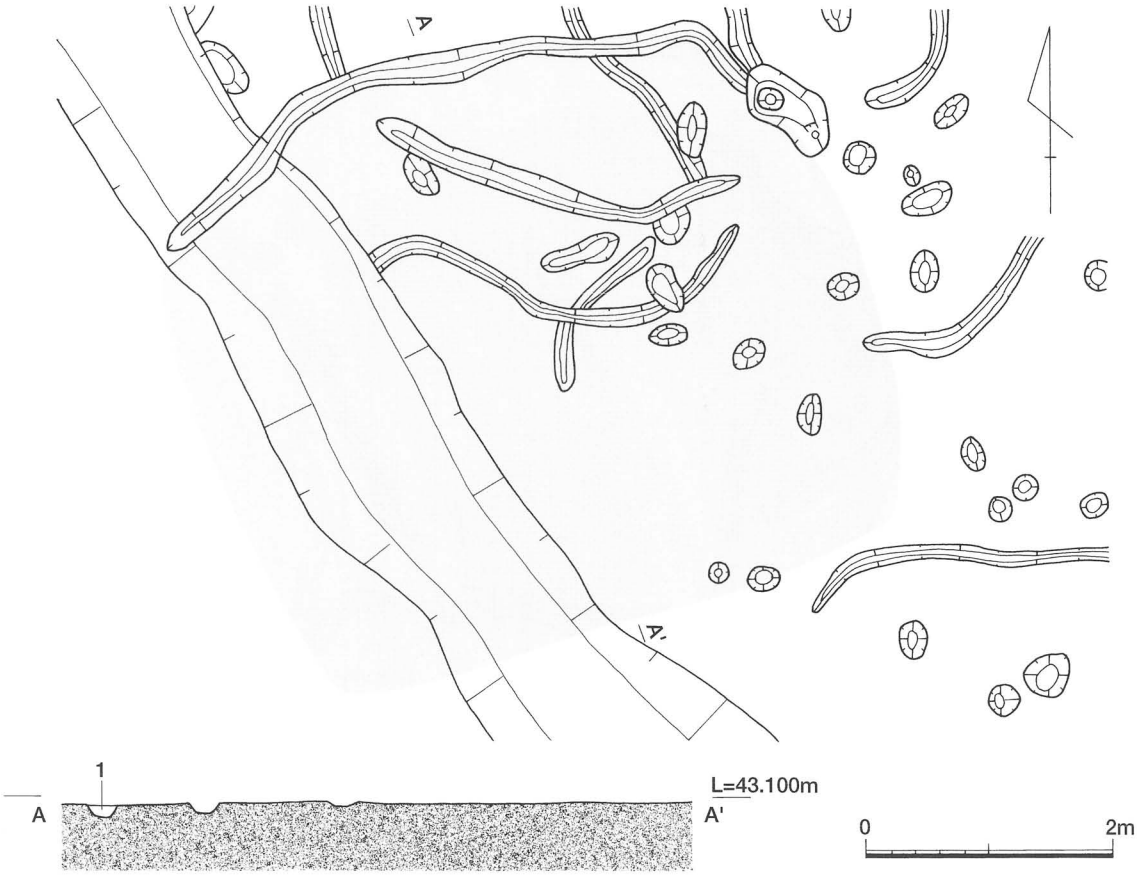
1　10YR　2/1　黒　砂混粘質土

第 10 図　SH12002 平・断面図



1　10YR　4/1　褐灰　砂混粘質土

第 11 図　SH12003 平・断面図



1　10YR　3/1　褐灰　砂混粘質土

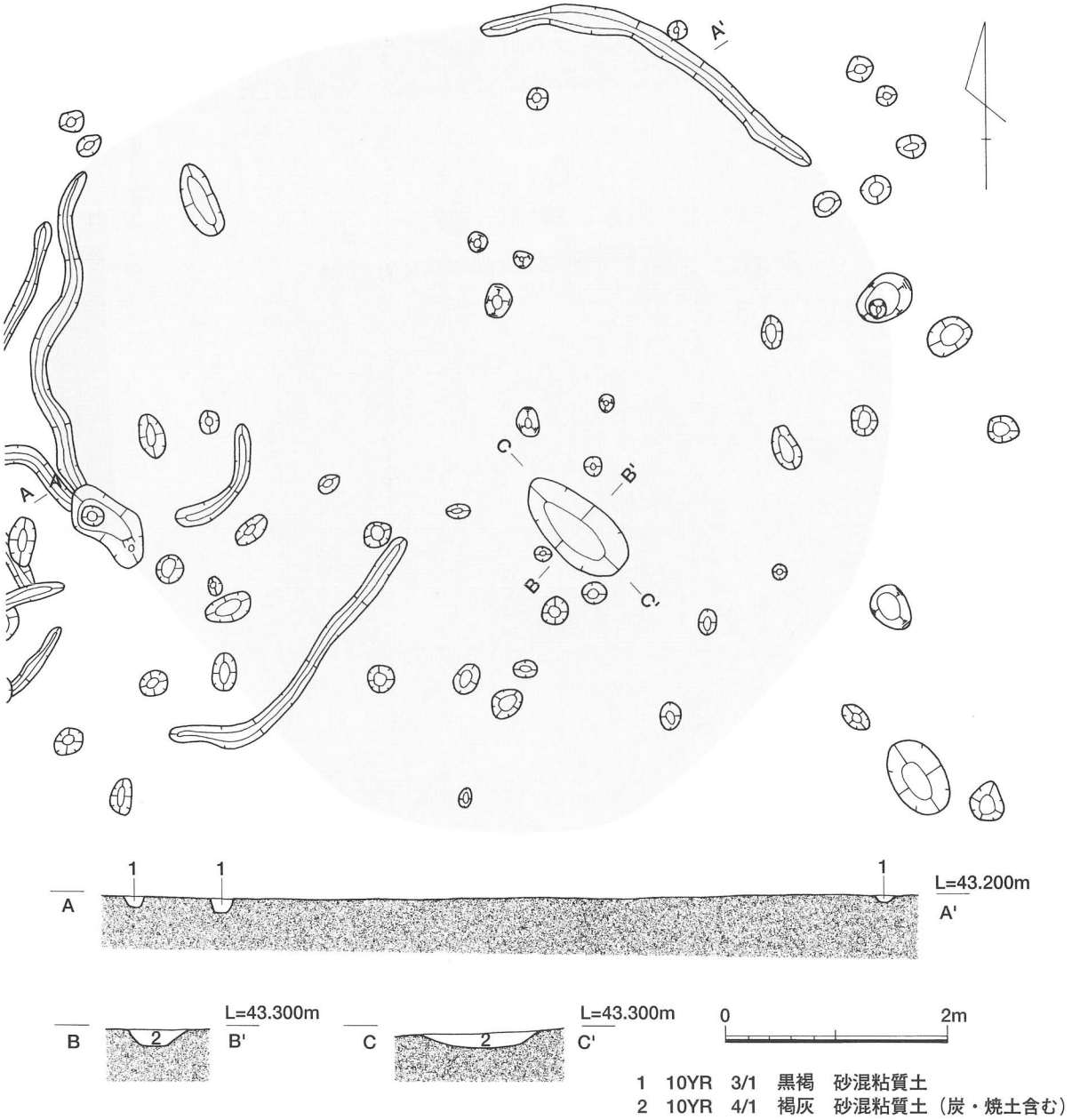
第 12 図　SH12004 平・断面図

SH12003（第 11 図）

SH12003 は断続的な溝から直径 5.7m 程度の六角形または不整円形の平面形態が復元できる。溝埋土は褐灰色砂混粘質土である。推定復元の住居内には柱穴等を多数検出しているが，東辺に片寄っており，柱の位置を特定できない。遺物は出土しておらず，時期は不明である。なお，復元した住居は SH12001 及び SH12002 と切り合い関係を持つ。SH12001 の溝を切っていることから SH12001 が先行すると考えられるが，SH12002 とはどちらが先行するかは不明である。

SH12004（第 12 図）

SH12004 は緩やかにカーブする溝から直径 5.1m 以上の円形または隅丸方形の平面形態が復元できる。溝埋土は褐灰色砂混粘質土である。推定復元の住居内には柱穴等を多数検出しているが，東辺に片寄っており，柱の位置を特定できない。遺物は出土しておらず，時期は不明である。なお，復元した住居は SH12001 及び SH12003 と切り合い関係を持つ。SH12003 の溝を切っていることから SH12003 が先行すると考えられる。なお，SD12017 を切っていることから弥生中期以降の遺構と考えられる。



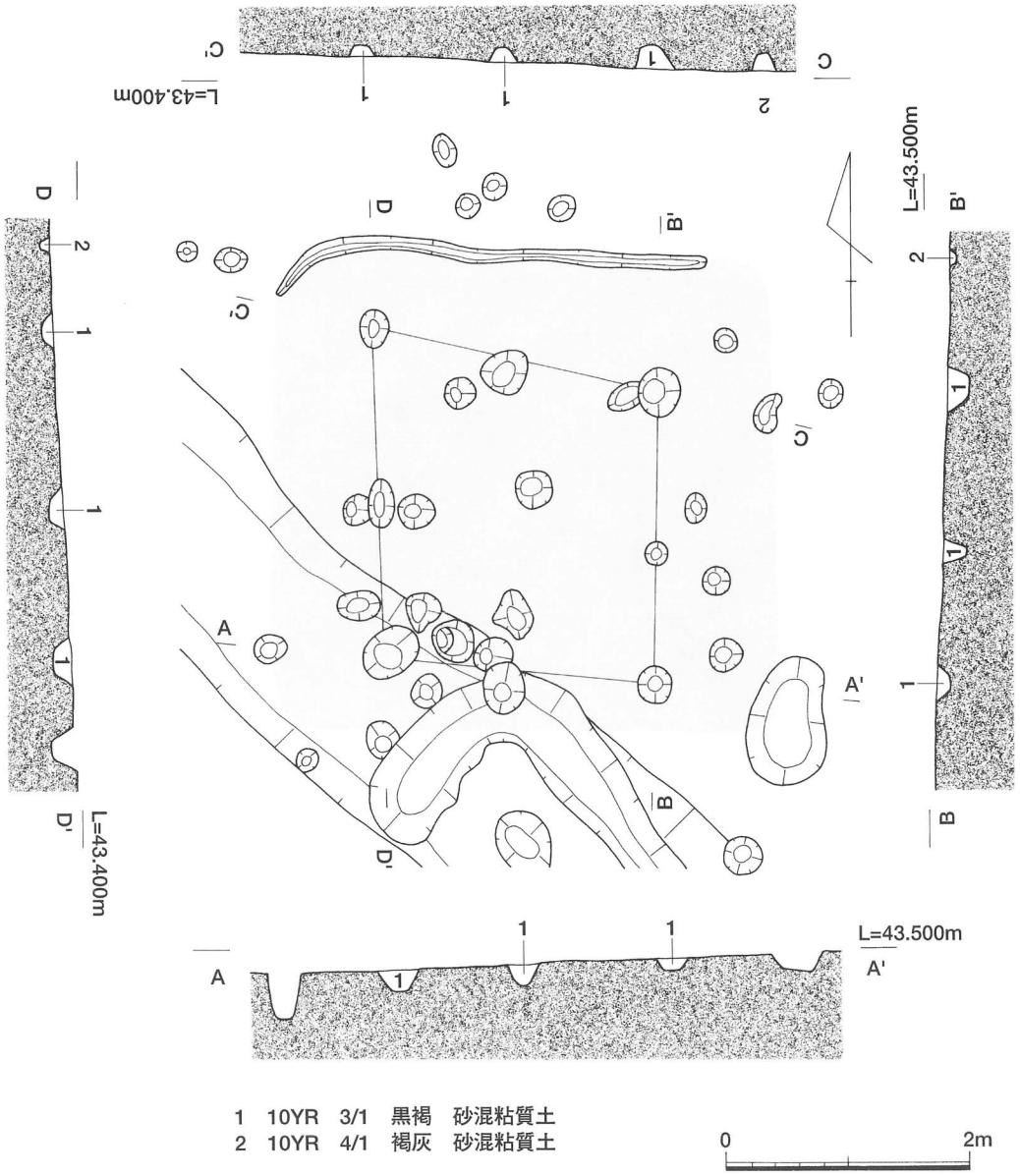
第 13 図　SH12005 平・断面図

SH12005（第13図）

SH12005は緩やかにカーブする2本の溝から直径7.0m以上の円形の平面形態が復元できる。溝埋土は黒褐色砂混粘質土である。推定復元の住居内には柱穴等を多数検出しているが，規則性は認められず，柱の位置を特定できない。しかしながら，復元した住居の南部において土坑を1基検出した。土坑は楕円形を呈し，長径1.1m，短径55cm，深さ15cmを測る。断面形態は浅い逆台形を呈し，埋土は炭・焼土を含む褐灰色砂混粘質土層であることから，炉跡の可能性が高いと考えられる。遺物は出土しておらず，時期は不明である。なお，復元した住居はSH12001及びSH12003と切り合い関係を持つが，溝での切り合いは無く，いずれが先行するかは不明である。

SH12006（第14図）

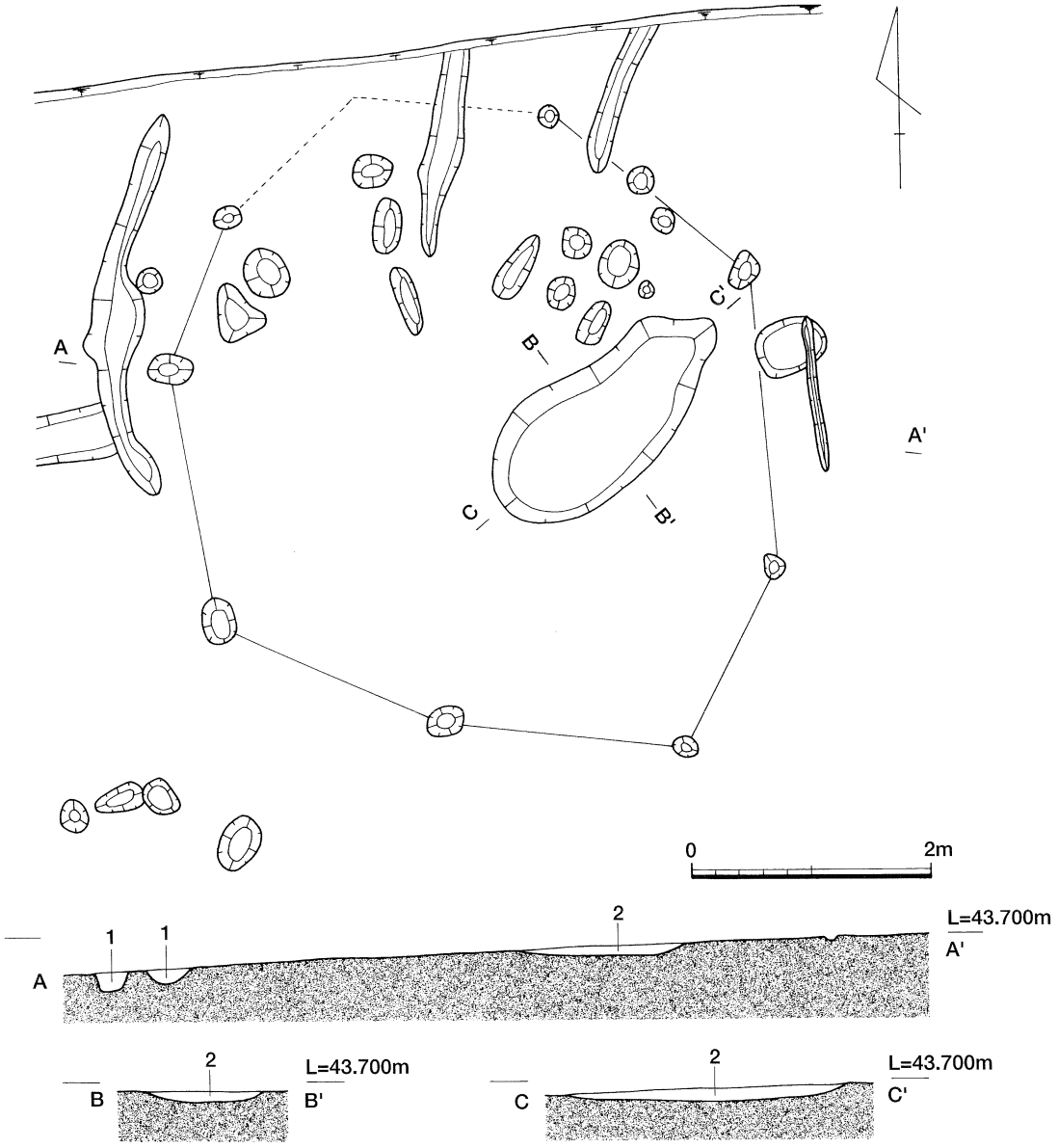
SH12006はL字に曲がる溝から1辺3.5m以上の小型方形の平面形態が復元できる。溝埋土は黒褐色砂混粘質土である。推定復元の住居内においては柱穴を多数検出しており，その中で東西2間(2.4m)×南北2間(2.7m)で柱穴が並ぶ。建物の主軸はほぼ南北方向である。遺物は出土しておらず，時期は不明であるが，推定復元の柱穴がSD12017を切っていることから，弥生中期以降の遺構である。



第14図　SH12006平・断面図

SH11001（第15図）

調査区の北東部は，第1・第2遺構面を同一面で検出したため，調査時には第1遺構面で検出した遺構としたが，近世以降の遺構が概ね灰白色であることから，弥生時代の遺構と考えた。SH11001は緩やかにカーブする溝から円形の平面形態が復元できる。溝埋土は黒褐色砂混粘質土である。推定復元の住居内には柱穴等を多数検出しており，それらが円形に巡る可能性が考えられる。また，復元した住居の東部において土坑を1基検出した。土坑は楕円形を呈し，長径2.3m，短径1.1m，深さ10cmを測る。断面形態は浅いレンズ状の堆積である。やや規模が大きいものの，埋土が炭・焼土を含む褐灰色砂混粘質土層であることから，炉跡の可能性が高いと考えられる。柱穴列と現存する溝部分から推定して直径7m程度に復元できる。遺物は出土しておらず，時期は不明である。



1　10YR　3/1　黒褐　砂混粘質土
2　10YR　4/1　褐灰　砂混粘質土（炭・焼土含む）

第15図　SH11001平・断面図

SD12017（第16図）

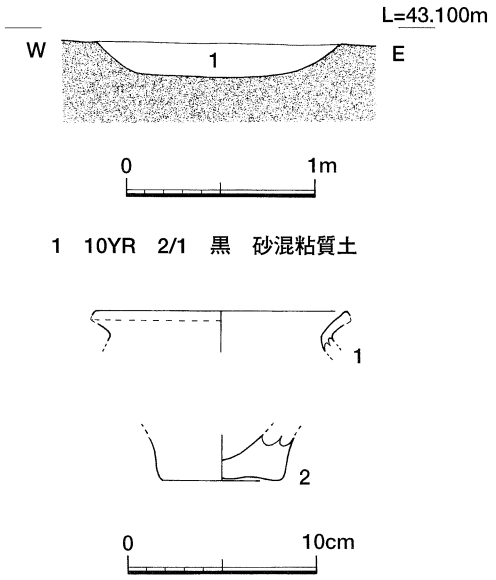
調査区の西部を南西から北東に流れる溝で，幅1.95m，深さ20cmを測る。埋土は黒色砂混粘質土層の単層で，断面形状は浅い逆台形を呈する。

出土遺物は第16図に掲載した。1は弥生土器の甕口縁部である。くの字の甕で，口縁部を拡張させていないことから，凹線施文以前のものと考えられ，弥生中期前葉末～中期中葉前半頃のものと考えられる。2は弥生土器の底部で，詳細な時期は不明である。出土遺物から概ね弥生中期中葉までには埋没した遺構と考えられる。

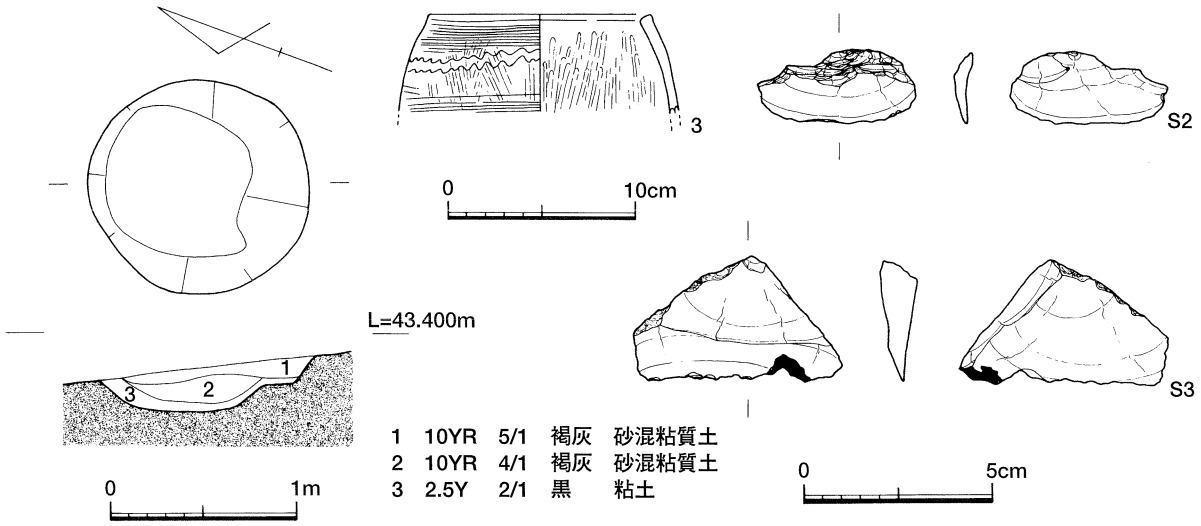
SK12001（第17図）

調査区の西部で検出した土坑である。平面形態は円形を呈し，直径1.2m，深さ30cmを測る。断面形態は北側が緩やかに落ち込むのに対し，南側が2段落ちとなっている。埋土は3層に分層できる。第1・2層は褐灰色砂混粘質土層で，第3層は黒色粘土層である。

遺物は第3層から出土しており，第17図に掲載した。3は弥生土器の無頸壺である。外面タテハケ，内面タテヘラミガキにより器壁を整え，外面に櫛描直線文と波状文が施されている。S2はサヌカイトの剥片で，背部を調整し，削器として使用している。S3もサヌカイトの剥片である。出土遺物から弥生中期前葉の遺構と考えられる。



第16図　SD12017断面図及び出土遺物実測図



第17図　SK12001平・断面図及び出土遺物実測図

(3) 近世以降の遺構

SK11001（第18図）

調査区西部で検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し，長径1.38m，短径1.26 m，深さ30cmを測る。断面形態は逆台形を呈し，埋土は褐灰色砂混粘質土層の単層である。

出土遺物は18図4の瓦質土器羽釜のみで，外面指頭圧，内面ヨコハケが見られる。出土遺物から江戸時代の遺構と考えられる。

鋤溝群（第７図）

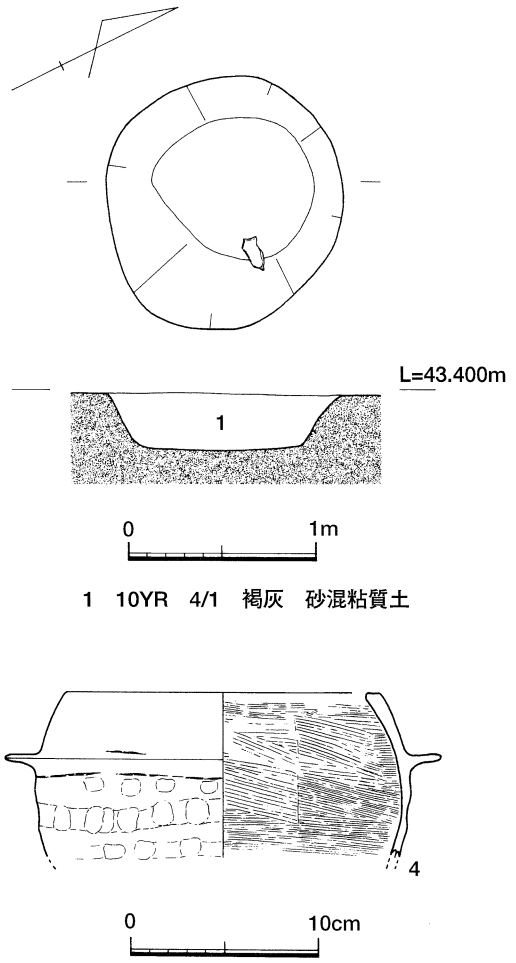
調査区の南東部で検出した溝群である。調査区の南部に認められる北東－南西方向の溝群が原地形に近く，調査区東部に所在する南北方向の溝群に切られていることから，新旧の２時期に大別できる。溝からは陶磁器の小片が出土しており，江戸時代以降の遺構と考えられる。

第２節　Ⅱ区の調査

(1) 概要と基本層序

Ⅱ区は調査地の北半にあたり，調査前の状況は１枚の水田となっていた。調査地の北側は急斜面となっており，斜面裾は奥の池から流れる谷が見られる。このため，Ⅱ区の原地形はⅠ区から続く丘陵部中腹の北向き緩斜面の末端部であったことがうかがえる。また，現地表面は 43.6m とほぼ水平であるが，地山面は南東部で 43.2m，北西部で 42.3m を測り，南東から北西方向に傾斜した地形であったことがうかがえる。

調査区南壁において断面を作成した。基本層序は，33 層に分層できた。第１層は耕作土である。第２～15 層については細かく分層したが，比較的新しい時期の客土である。16・17 層は客土造成前の耕作土，18 層は床土である。19 層以下 28 層まではほぼ水平堆積となっており，若干の遺物を含んでいる。33 層は浅黄色粘質シルト層で，遺物を含まないことから地山とした。遺構面は地山直上の１面のみである。出土遺物から弥生時代から近世の遺構面と考えられる。



第 18 図　SK11001 平・断面図及び出土遺物実測図

(2) 遺構

SB21001（第 21 図）

調査区中央部で検出した掘立柱建物である。東西２間（1.85m）×南北１間（1.5m）で，床面積 2.64m^2 である。建物の主軸はほぼ東西方向である。柱穴の埋土は暗灰黄色粗砂である。出土遺物は無く，遺構の詳細な時期は不明であるが，Ⅱ区の近世遺構の埋土が概ね灰色の砂層であることと，後述する SD21001 とほぼ同じ方位であることから，江戸時代の遺構の可能性が高い。

SD21001（第 22 図）

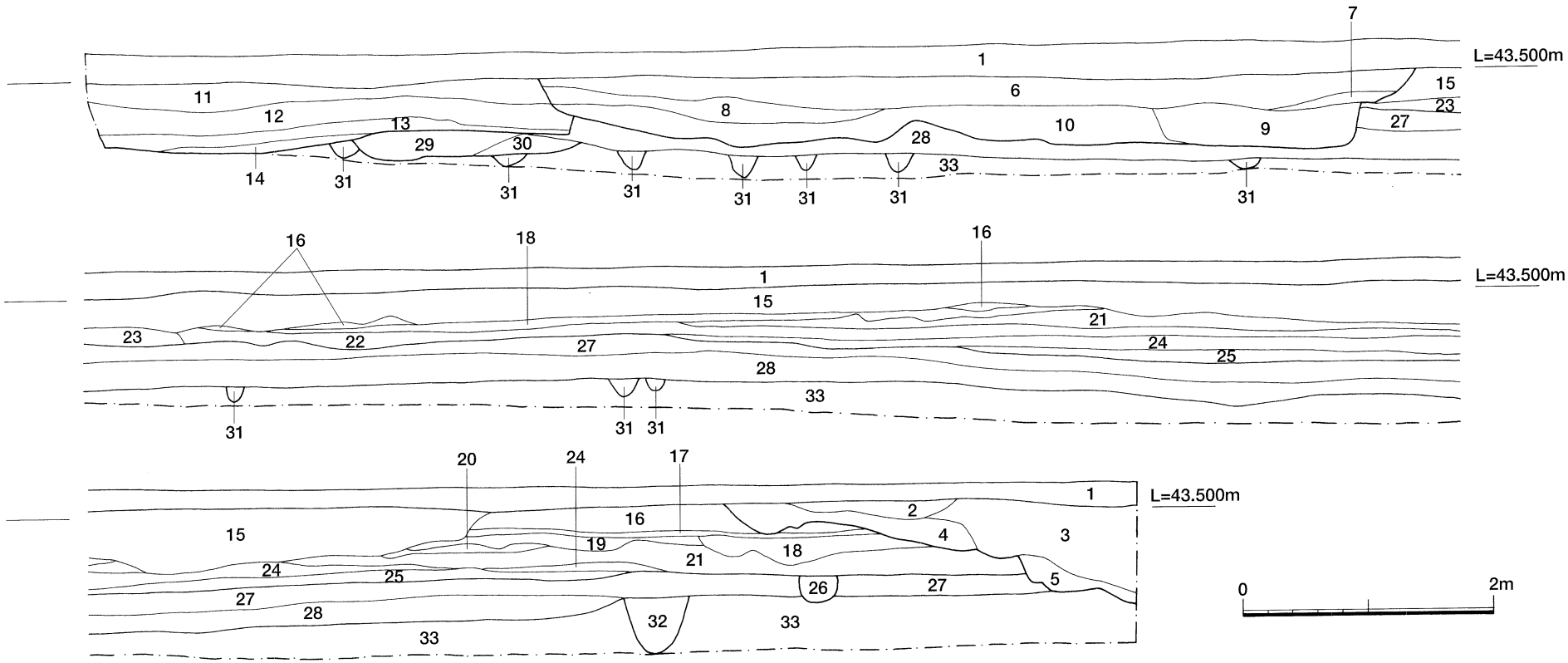
調査区の北東部を東西に流れる溝である。検出長 20m，幅 1.1m，深さ 10cm を測る。埋土は灰色シルト質極細砂の単層で，断面形態は逆台形を呈する。

出土遺物は第 22 図５の内面に圏線２条を染付した肥前系磁器碗１点のみで，概ね江戸時代の遺構と考えられる。

SD21002（第 23 図）

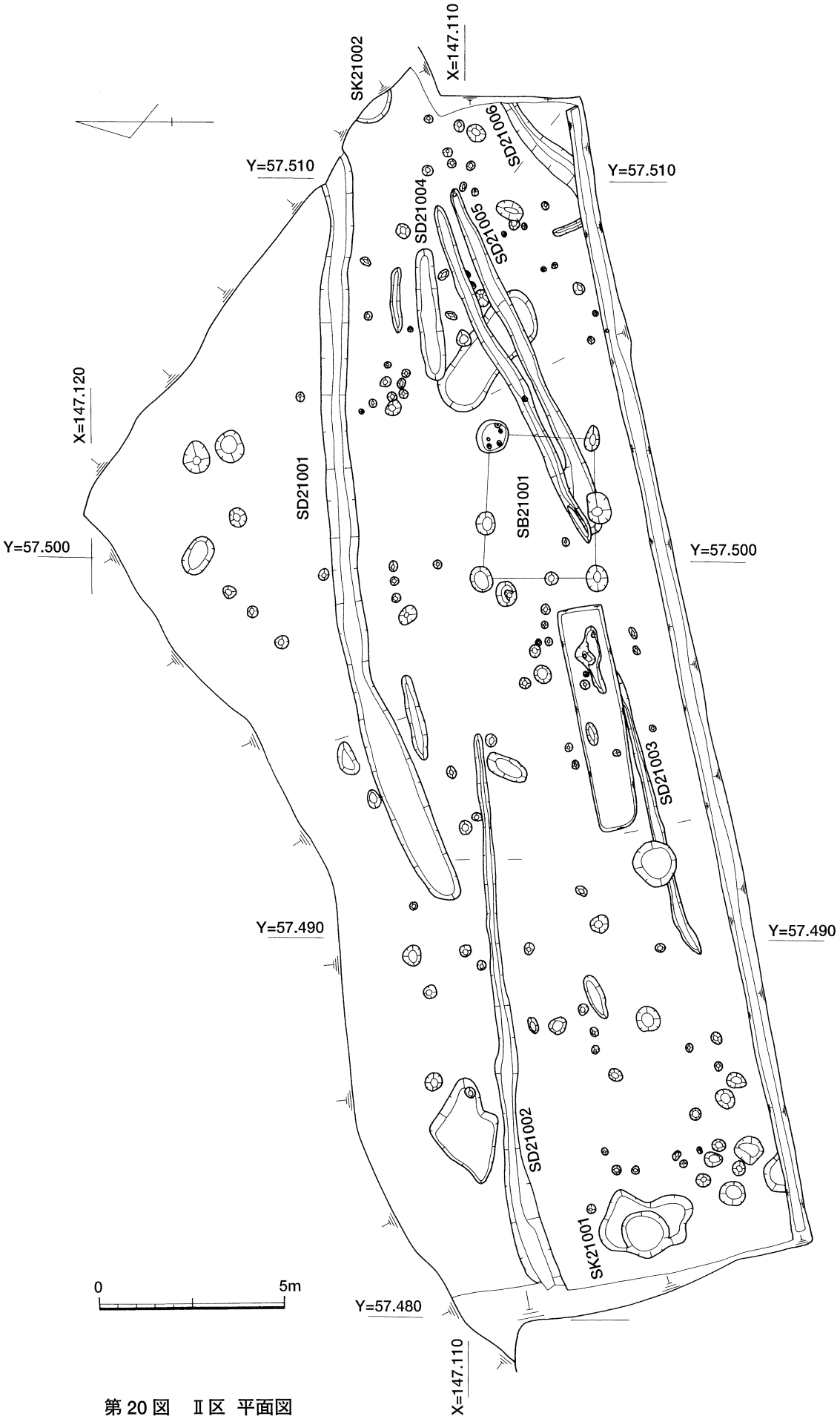
調査区の北西部を東西に流れる溝である。検出長 15m，幅 95cm，深さ 10cm を測る。埋土は灰色シルト質極細砂の単層で，断面形態は半円形を呈する。

出土遺物は第 23 図 S4 の磨石がある。上面は平坦面で，使用痕が認められる。概ね弥生時代の遺物と考えられるが，SD21001 とほぼ同方位であり，また同埋土であることから，弥生時代の溝とは考えがたく，江戸時代の遺構の可能性が高い。



1	耕作土			
2～15	客土			
16	7.5GY	5/1	緑灰	砂混粘質土（旧耕作土）
17	2.5GY	5/1	オリーブ灰	砂混粘質土（旧耕作土）
18	10YR	4/2	灰黄褐	砂混粘質土（旧床土）
19	10YR	3/3	暗褐	砂混粘質土
20	7.5YR	3/3	暗褐	砂混粘質土
21	7.5YR	3/2	黒褐	細砂～粗砂
22	10YR	4/1	褐灰	砂混粘質土
23	10YR	4/2	灰黄褐	砂混粘質土
24	10YR	2/1	黒	粗砂
25	5Y	3/1	オリーブ黒	砂混粘質土
26	2.5Y	3/2	黒褐	砂混粘質土
27	2.5Y	4/2	暗灰黄	砂混粘質土
28	5Y	4/1	灰	砂混粘質土
29	10YR	2/1	黒	砂混粘質土（古代の遺構）
30	10YR	4/1	褐灰	砂混粘質土
31	2.5Y	4/1	褐灰	砂混粘質土（弥生の遺構）
32	10YR	3/2	黒褐	粗砂
33	2.5Y	7/4	浅黄	粘質シルト（地山）

第19図　Ⅱ区 南壁土層断面図


X=147.110
SK21002
SD21006
Y=57.510
Y=57.510
SD21004
SD21005
X=147.120
SD21001
SB21001
Y=57.500
Y=57.500
SD21003
Y=57.490
Y=57.490
SD21002
SK21001
0
5m
Y=57.480
X=147.110

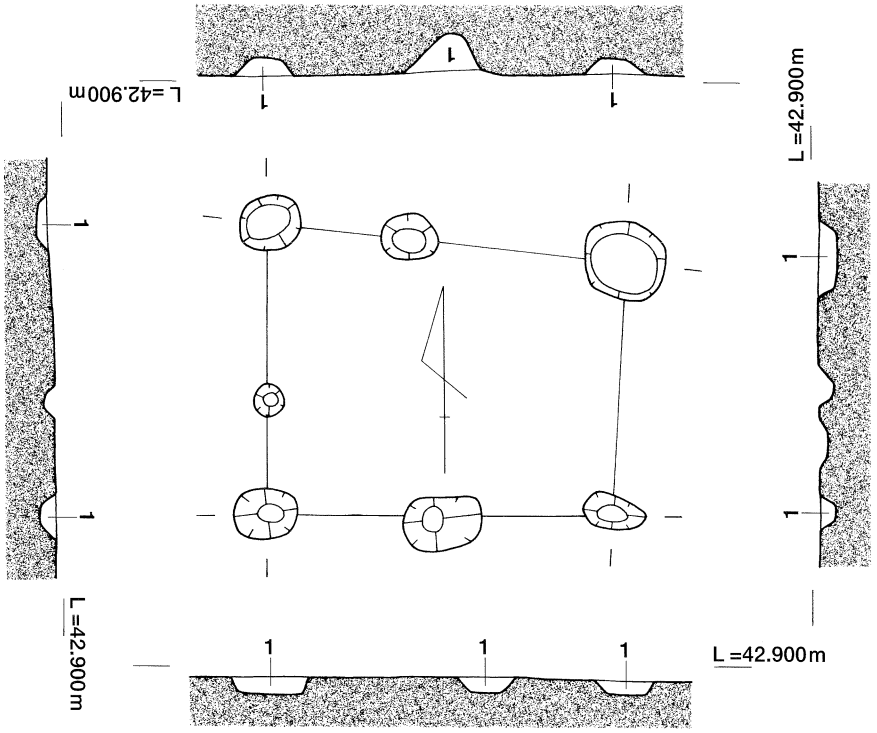
第20図　Ⅱ区 平面図

SD21003（第24図）

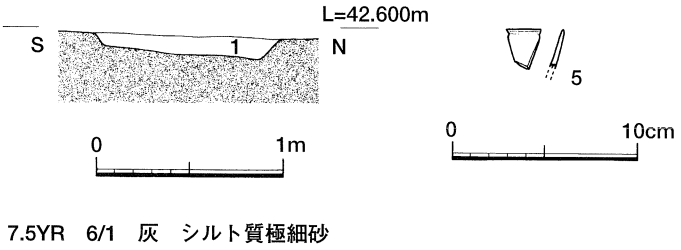
調査区中央部で検出した溝である。検出長8m，幅30cm，深さ12cmを測る。埋土は黒色砂混粘質土の単層で，断面形態は逆台形を呈する。出土遺物は無く，詳細な時期は不明であるが，遺構埋土はⅠ区検出の弥生時代の遺構のものに近似しており，弥生時代の遺構の可能性が考えられる。

SD21004（第24図）

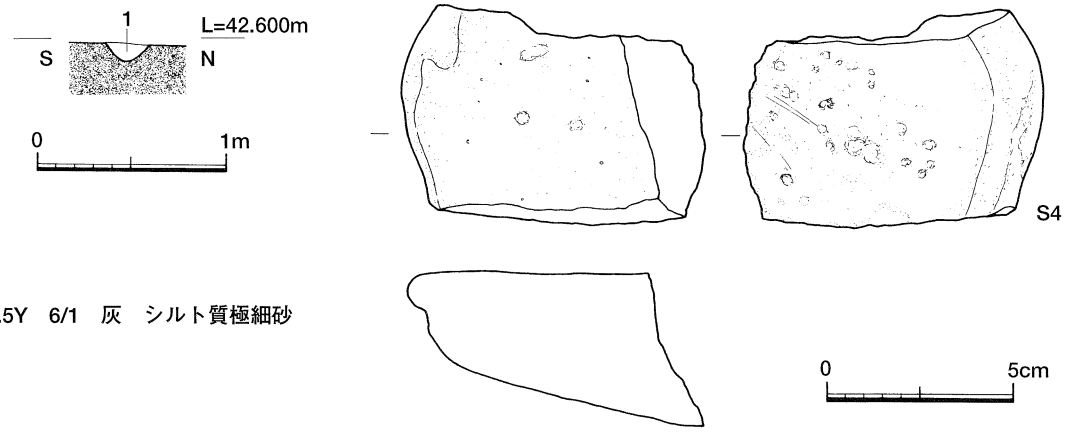
調査区中央部で検出した溝である。検出長10m，幅70cm，深さ10cmを測る。埋土は暗灰黄色砂混粘質土の単層で，断面形態は逆台形を呈する。出土遺物は無く，詳細な時期は不明であるが，隣接する奥の坊奥池西遺跡で検出された中世の溝SD21001とほぼ同方位であることから，中世の遺構の可能性が考えられる。



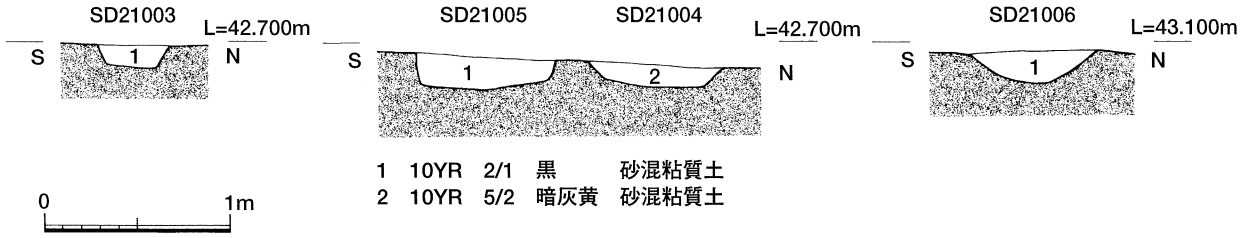
第21図 SB21001 平・断面図



第22図 SD21001 断面図及び出土遺物実測図



第23図 SD21002 断面図及び出土遺物実測図



第 24 図　Ⅱ区検出溝断面図

SD21005（第 24 図）

調査区中央部で検出した溝で，SD21004 と並行し，西端で切り合いを持つ。検出長 10m，幅 80cm，深さ 15cm を測る。埋土は黒色砂混粘質土の単層で，断面形態は逆台形を呈する。出土遺物は無く，詳細な時期は不明であるが，近世の掘立柱建物 SB21001 に切られていることと，中世の溝と考えられる SD21004 と並行していることから，概ね中世の遺構の可能性が考えられる。

SD21006（第 24 図）

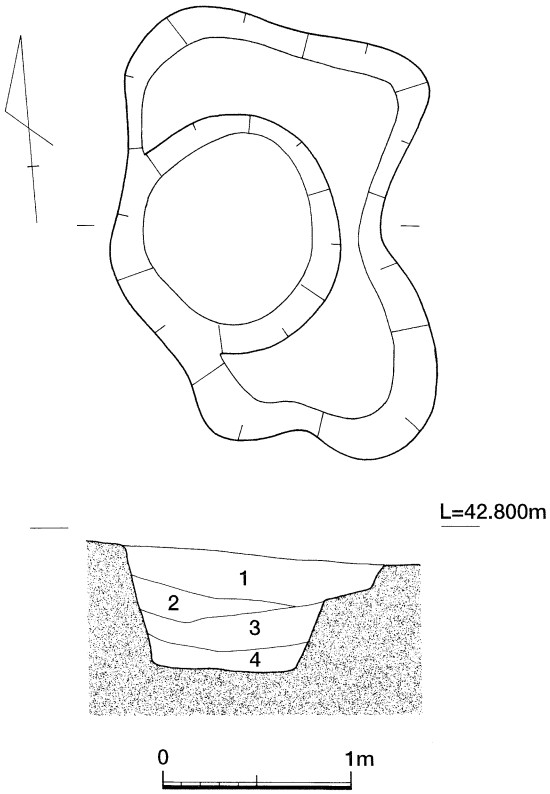
調査区南東部で検出した溝である。検出長 3.4m，幅 80cm，深さ 18cm を測る。埋土は黒色砂混粘質土の単層で，断面形態は半円形を呈する。溝の方位は北東－南西方向で，Ⅱ区検出の他の溝とは方位が異なる。埋土はⅠ区検出の SD12017 とほぼ同じであり，また弥生土器の小片が出土したことから，弥生時代の遺構と考えられる。

SK21001（第 25 図）

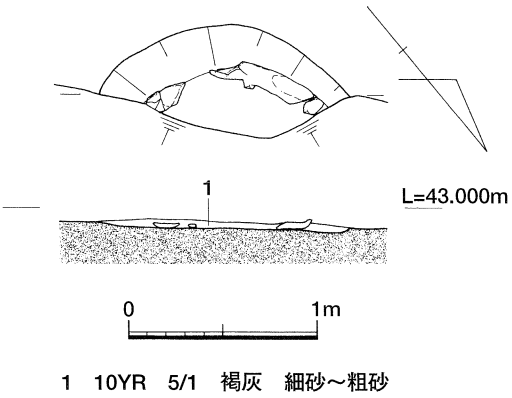
調査区西端で検出した土坑である。平面形態はやや不整な長方形を呈し，長辺 2.3m，短辺 1.6m を測る。遺構は検出面から約 25cm の深さで平坦面をもち，この面から直径 1.25m，深さ 40cm の円形の掘り込みが認められた。埋土は 4 層に分層できた。第 1 層は黄灰色粘質シルトで，検出面から平坦面まで堆積している。第 2 層の灰オリーブ色シルト質粘土，第 3 層は黄灰色細砂，第 4 層は黄灰色砂混粘土で，この 3 層が円形の掘り込み部分にあたる。遺構の用途は不明であるが，調査区西隣は小規模な墓地となっていることから，SK21001 についても墓の可能性が考えられる。陶磁器の小片が出土していることから近世以降の遺構と考えられる。

SK21002（第 26 図）

調査区東端で検出した土坑である。東側は斜面によって遺構が削られており，規模・形態は不明であるが，直径 1.3m 以上の円形の土坑と考えられる。深さ 5cm を測り，埋土は褐灰色細砂～粗砂の単層である。底面には円形に漆喰が認められ，容器の固定もしくは漆喰自体が容器になるような状態で検出した。出土遺物は無く，時期は不明であるが，漆喰等の存在から近世以降の遺構と考えられる。



第 25 図　SK21001 平・断面図



第 26 図　SK21002 平・断面図

第３節　まとめ

大空北遺跡においては２面の遺構面を確認し，多数の遺構を検出したが，遺物に関しては全体でビニール袋１袋分しか出土しておらず，各遺構の時期決定において困難を極めた。わずかな出土遺物と切り合い関係，また遺構埋土によって概ね弥生時代中期（5時期に細分可能），中世，近世以降の４時期に大別した。なお，試掘調査では包含層中から縄文土器片が１点出土したが，縄文時代の遺構・遺物は検出されていない。以下に主要遺構の変遷を掲載し，まとめに代えたい。

第１期　弥生時代中期（第27図）

SK12001とSD12017は弥生時代中期の遺物が含まれており，時期が特定できる数少ない遺構である。この他の同時期の遺構としては，SD12017と直交するような方位で検出したSD21006がSD12017とほぼ同じ埋土であることから同時期の遺構の可能性が考えられる。

また，小溝から復元したSH12001～SH12006，SH11001の竪穴住居７棟が該当すると考えられる。いずれの竪穴住居からも出土遺物は無く，時期は不明であるが，SH12004の壁溝及びSH12006の主柱穴がSD12017を切っていることから，弥生中期以降のものと判断したが，具体的な時期は不明である。一方，竪穴住居には復元し得なかったが，小溝のうち１条はSD12017に切られていることから，SD12017の掘削前から竪穴住居が存在した可能性も考えられる。包含層や他の遺構出土遺物からもこれらについては弥生中期以降の遺物は近世のものしか見られないことから，これらの竪穴住居についてもSD12017廃絶後ではあるが，弥生時代中期に該当する可能性が高いと考えた。

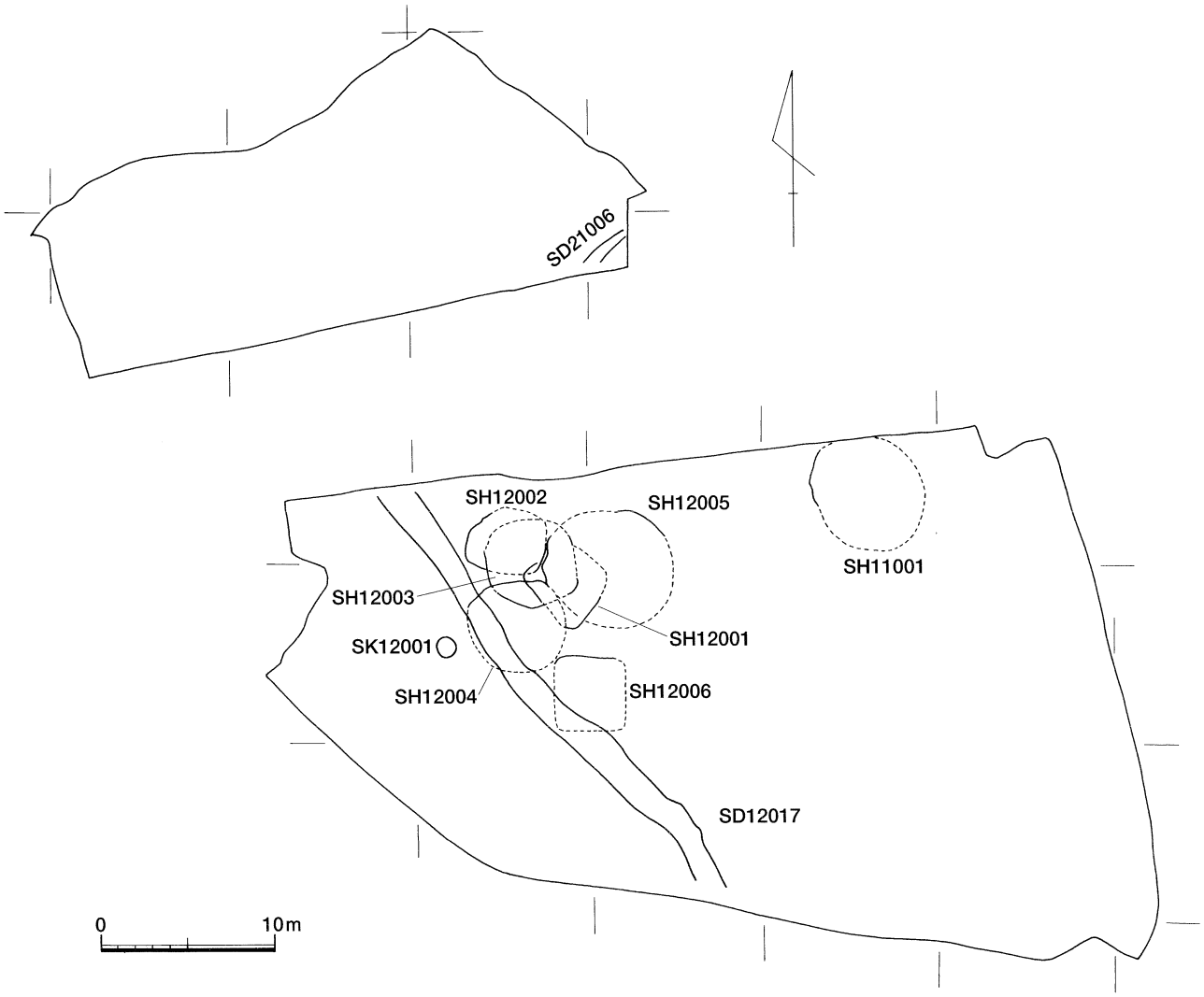
竪穴住居の前後関係は，壁溝の切り合いからSH12001→SH12003→SH12004の変遷が判明した。なお，これらの竪穴住居のいずれにも切り合いを持ち近接して同時期のものと考えられないSH12002・SH12005がある。これらの前後関係は不明であるが，先の３時期の変遷に加え，さらに２時期の変遷が想定できる。なお，単独で検出したSH12006及びSH11001についてもいずれの竪穴住居と同一時期のものであるかは不明である。このため，最低でも５時期の変遷があったことがうかがえる。なお，SD12017を切っているSH12004は，判明している竪穴住居の変遷では最終段階に位置づけられることから，５時期のうち最終段階以前のいずれかにSD12017が該当するものと考えられる。

第３期　中世（第28図）

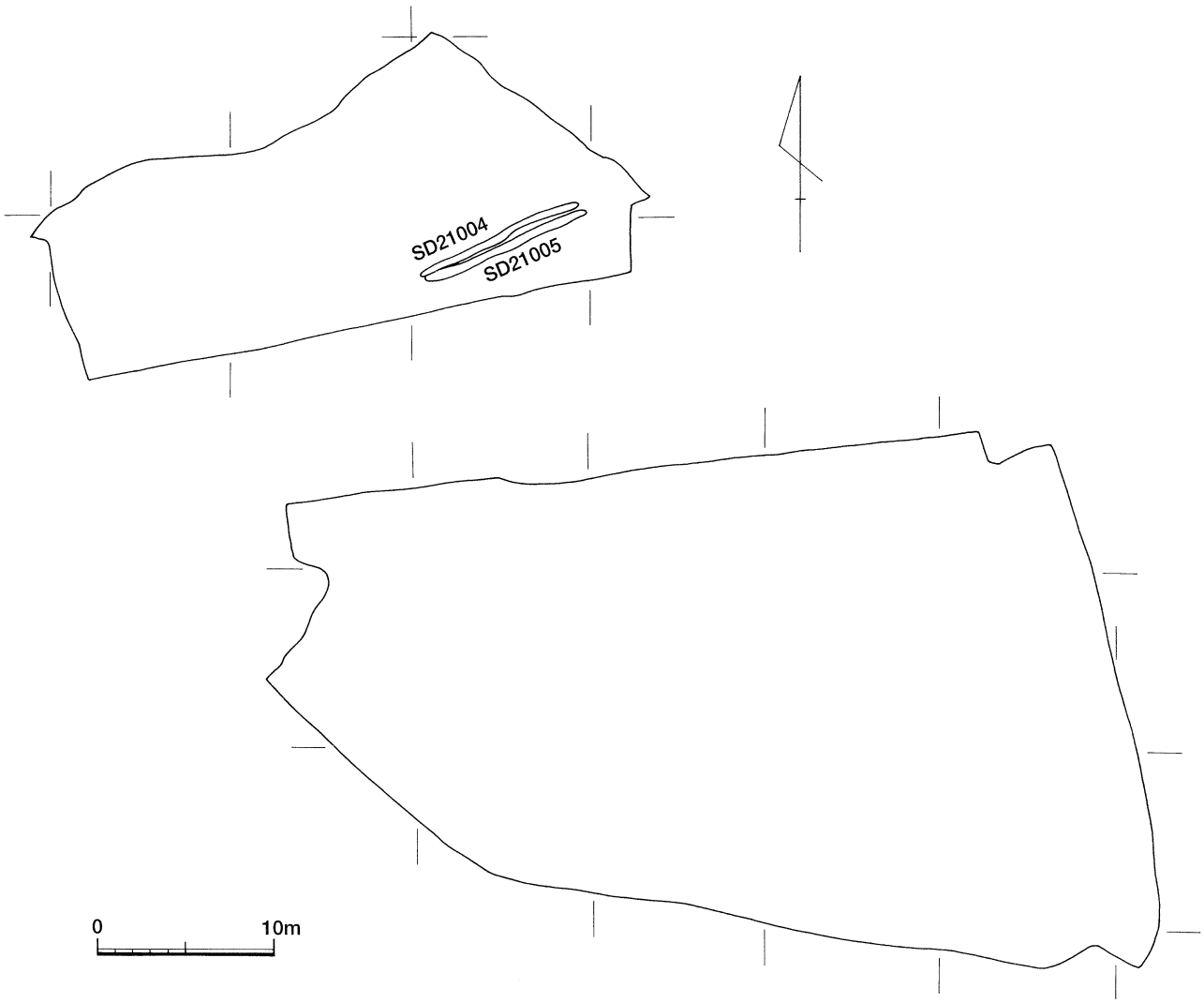
弥生時代中期や近世の溝とは明らかに方位が異なる溝SD21004・SD21005を検出した。近世の掘立柱建物と考えられるSB21001に切られていることから，近世以前の遺構と考えられる。遺物は出土しておらず，詳細な時期は不明であるが，隣接する奥の坊奥池西遺跡において検出したSD21001とほぼ同一の方位であり，SD21005については埋土も同じであることから，同時期の遺構と考えられる。奥の坊奥池西遺跡SD21001については第４章で述べるが，延長部分の溝SD21017から瓦器椀等が出土しており，13世紀頃の溝と考えられており，SD21004・SD21005についても中世前半ころの遺構の可能性がある。

第４期　近世以降（第29図）

近世の遺構としては，Ⅰ区南東部において鋤溝群が認められ，耕作地となっていたことがうかがえる。Ⅱ区では肥前系磁器碗が出土したSD21001があり，ほぼ現在の道路と同方向の溝となっている。これと同方位を示す溝としてSD21002も見られる。また，掘立柱建物SB21001についても中世の溝を切っており，同時期の可能性が考えられる。



第 27 図　弥生中期の主要遺構



第 28 図　中世の主要遺構

第 29 図　近世の主要遺構

奥の坊奥池西遺跡

第４章 奥の坊奥池西遺跡の調査成果

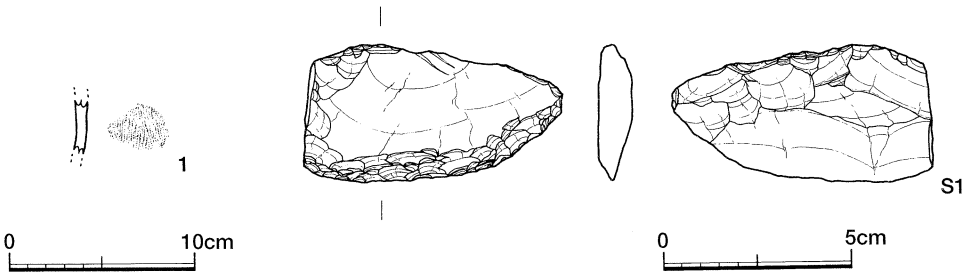
第１節 調査成果

(1) 概要と基本層序

調査地は北西方向に延びる尾根先端部に位置し，調査前の状況は４枚の棚田となっていた。調査対象地の西半が１枚の水田となっており，東半の３枚の水田との比高差が1m程度あり，かつ畦畔上に電柱が所在したことから，この畦畔より西側をⅠ区，東側をⅡ区として調査を実施した。

調査区の南側から北東側にかけては耕作土直下地山となっていたため，断面図はⅠ区西壁及び北壁，Ⅱ区西壁の３面で作成した。Ⅰ区西壁では，第１・２層の耕作土，第３層の床土が見られ，第４・５層の暗渠埋土が見られ，第５層までは現代の耕作に伴う土層と考えられる。第６層以下15層まで砂混粘質土の水平堆積が続くが，いずれも近世以降の耕作土層と考えられる。第16層は黄灰色砂混粘質土層で，若干ではあるが遺物を含む包含層である。第18層はにぶい黄橙色粘質シルト層で，遺物を含まないことから地山とした。なお，18層上面から第17層の暗灰黄色砂混粘質土層が掘り込まれており，地山直上が遺構面となっている。同様に，Ⅰ区北壁においても第１～４層の現代耕作土層の下層には，第５～12層の砂混粘質土層の近世耕作土層，第12・13層の砂混粘質土層の包含層があり，第15層の地山のにぶい黄橙色粘質シルト層が見られる。Ⅱ区西壁でも第１層の現代耕作土層の下層には，第２～15層の砂混粘質土層の近世耕作土層，第19層の黄灰色砂混粘質土層の包含層があり，第21層の地山の淡黄色シルト～粘土層が見られる。遺構面は地山直上の１面のみで，近世以降の棚田により階段状になっているものの，標高は南東部が49.9 m，北西部が44.8 mで，北西に向かって低くなっている。

包含層出土遺物は第30図に掲載した。１は縄文土器で，外面に縄文が施されている。S1はサヌカイト製の石庖丁である。



第30図　遺構面直上検出遺物実測図

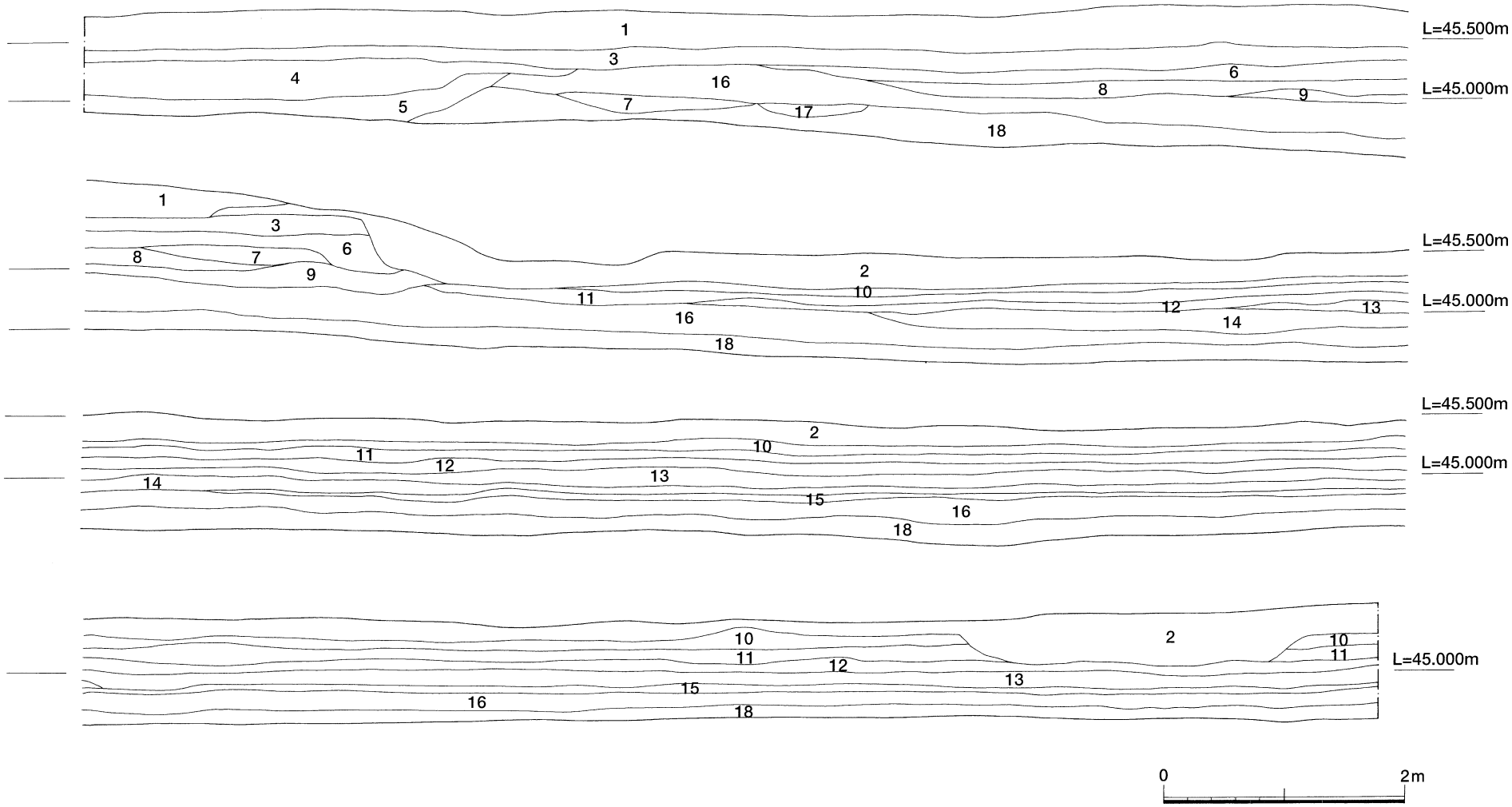
(2) 遺構

SH21001（第35図）

Ⅱ区の南西隅で検出した。炭・焼土を含む土坑SK21002と，その周囲の柱穴群から竪穴住居の可能性が考えられる。柱間は不均衡なものもあるが，概ね2.5m間隔で柱は円形に並んでおり，直径10m以上の円形の竪穴住居と推測される。炭・焼土を含むSK21002は炉跡と考えられ，竪穴住居の南部に位置し，長辺95cm，短辺58cm，深さ10cmを測り，埋土はにぶい褐色砂混粘質土の単層である。竪穴住居内にはその他SK21003～SK21009の土坑をはじめ，多数の柱穴が検出されているが，竪穴住居に伴うものかどうかは不明である。出土遺物は無く，時期は不明である。

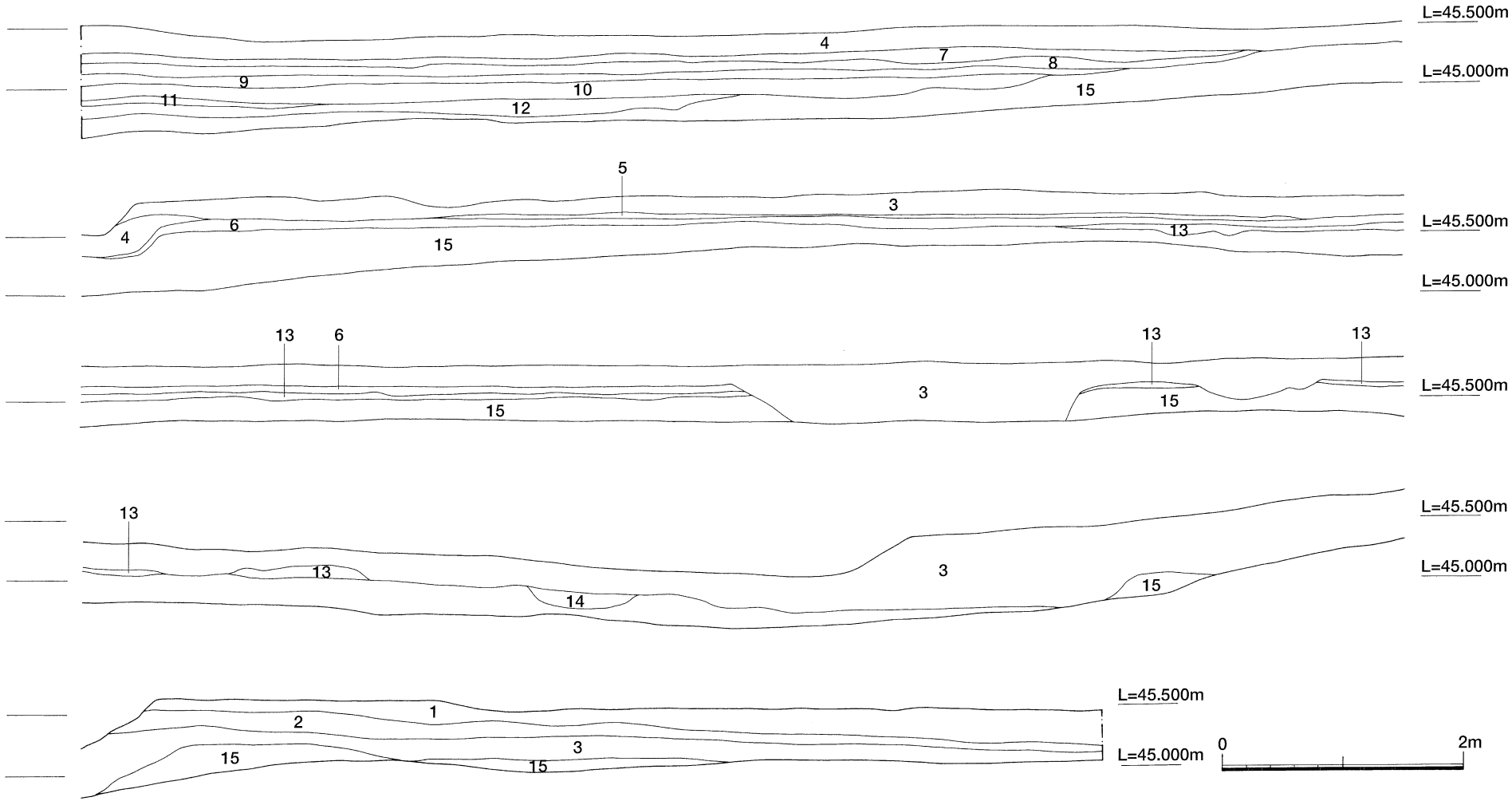
SB21001（第36図）

Ⅱ区中央で検出した掘立柱建物である。梁間２間（4 m）×桁行１間（2 m），床面積8m^{2}で，建物方位はN－43°－Wである。柱穴はほぼ円形を呈し，直径35～50cm，深さ５～30cmを測り，埋土は褐灰色砂混粘質土である。南東側の２基の柱穴には根石が据えられていた。出土遺物は無いが，近世以降の溝の方位と合致し，柱間も６尺５寸であることから，近世以降の建物と考えられる。



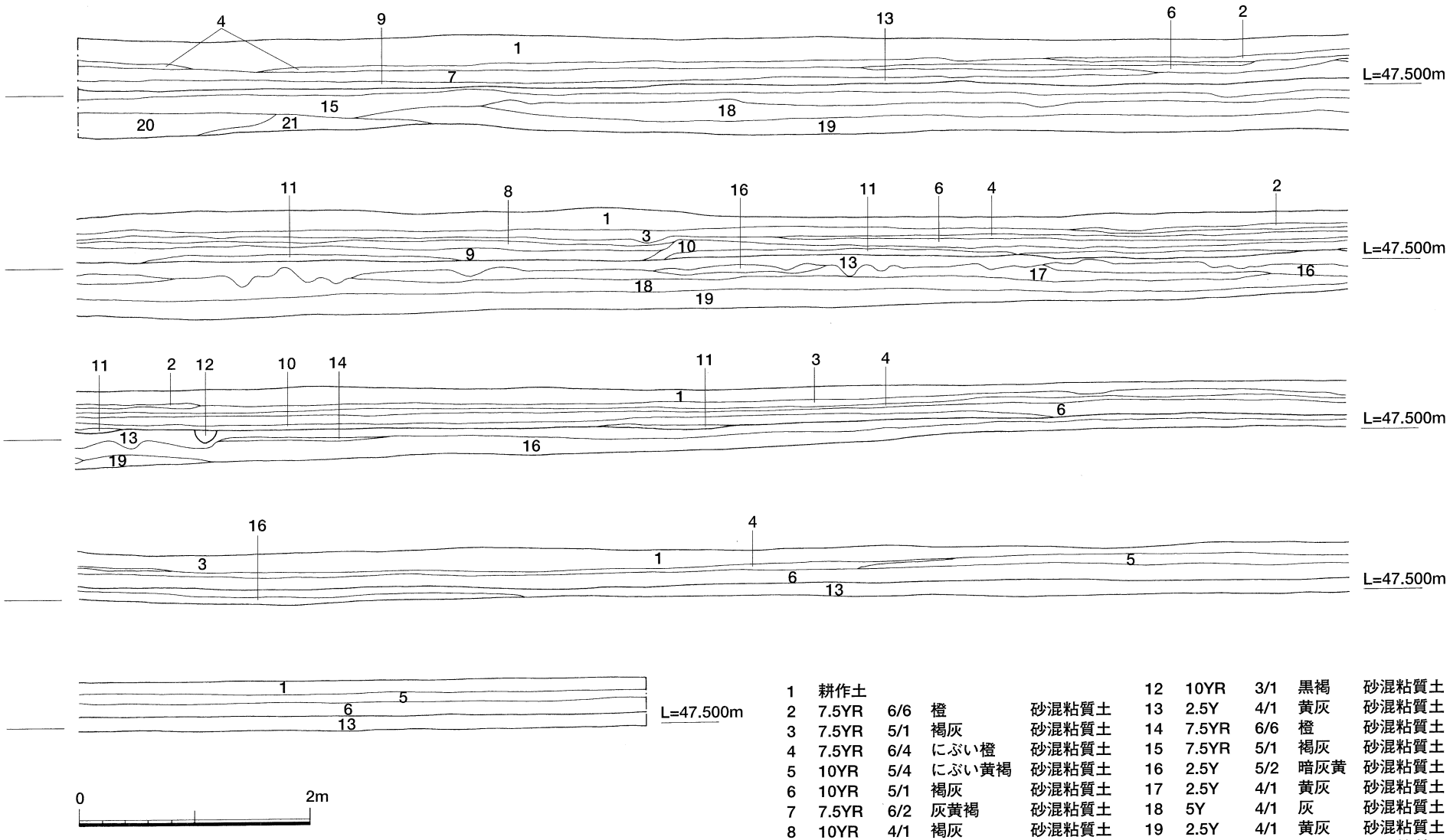
1	耕作土			
2	耕作土			
3	7.5YR	6/4	にぶい橙	砂混粘質土
4	7.5YR	6/3	にぶい橙	砂混粘質土（暗渠埋土）
5	7.5YR	2/1	黒	砂混粘質土（暗渠埋土）
6	7.5YR	6/2	灰褐	砂混粘質土
7	10YR	4/3	にぶい黄褐	砂混粘質土
8	10YR	4/1	褐灰	砂混粘質土
9	10YR	5/3	にぶい黄褐	砂混粘質土
10	7.5YR	6/4	にぶい橙	砂混粘質土
11	7.5YR	7/1	明褐灰	砂混粘質土
12	7.5YR	5/4	にぶい褐	砂混粘質土
13	7.5YR	4/1	褐灰	砂混粘質土
14	10YR	5/1	褐灰	砂混粘質土
15	10YR	6/6	明黄褐	砂混粘質土
16	2.5Y	4/1	黄灰	砂混粘質土
17	2.5Y	5/2	暗灰黄	砂混粘質土
18	10YR	7/3	にぶい黄橙	粘質シルト

第31図　Ⅰ区西壁土層断面図



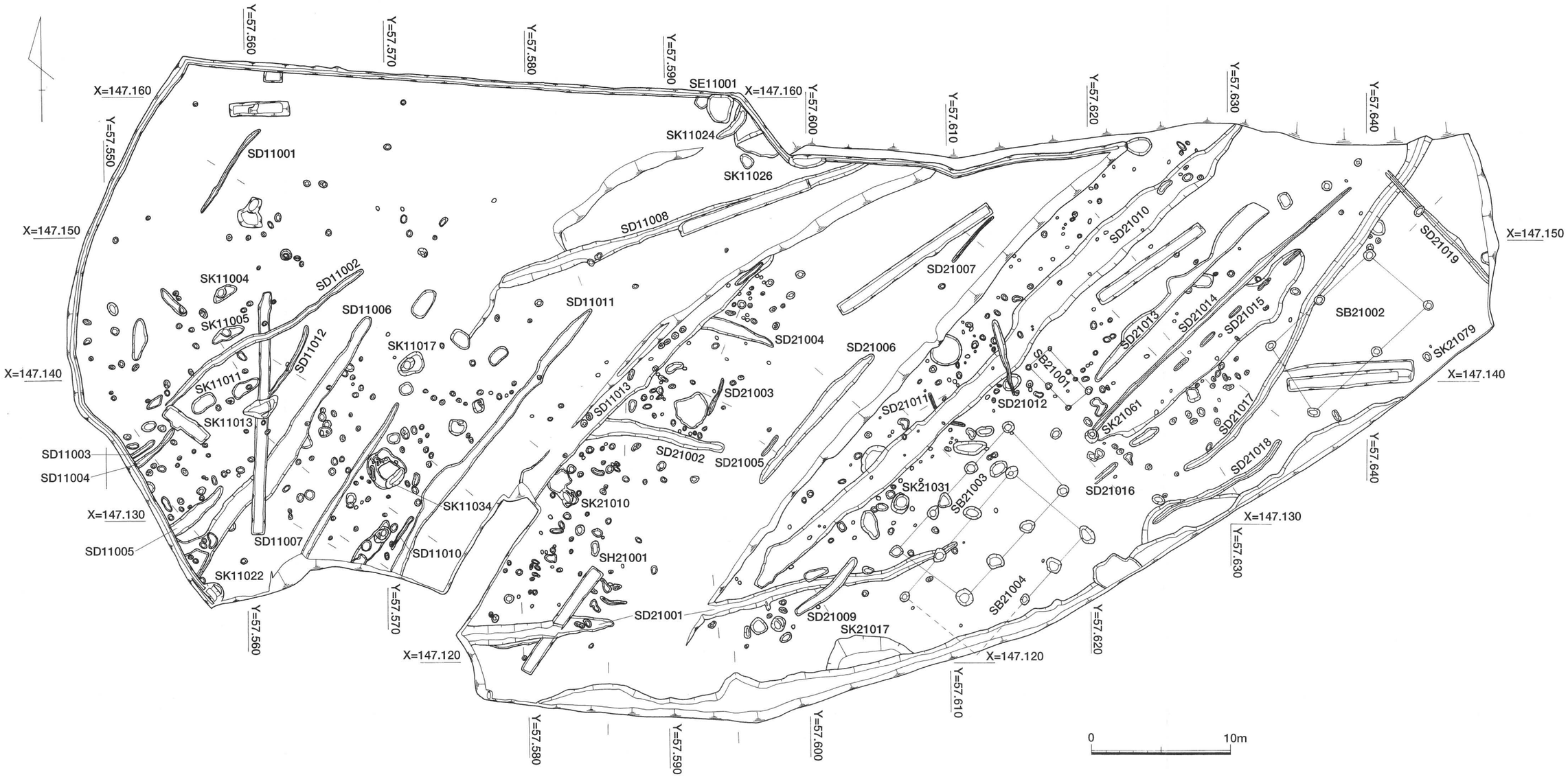
1	耕作土				6	7.5YR	6/6	橙	砂混粘質土	11	10YR	6/6	明黄褐	砂混粘質土
2	7.5YR	5/6	明褐	砂混粘質土	7	7.5YR	6/4	にぶい橙	砂混粘質土	12	2.5Y	4/1	黄灰	砂混粘質土
3	耕作土				8	7.5YR	7/1	明褐灰	砂混粘質土	13	7.5YR	4/1	褐灰	砂混粘質土
4	耕作土				9	7.5YR	5/4	にぶい褐	砂混粘質土	14	10YR	6/3	にぶい黄橙	細砂～粗砂
5	10YR	6/1	褐灰	砂混粘質土	10	7.5YR	4/1	褐灰	砂混粘質土	15	10YR	7/3	にぶい黄橙	粘質シルト

第32図　Ⅰ区北壁土層断面図

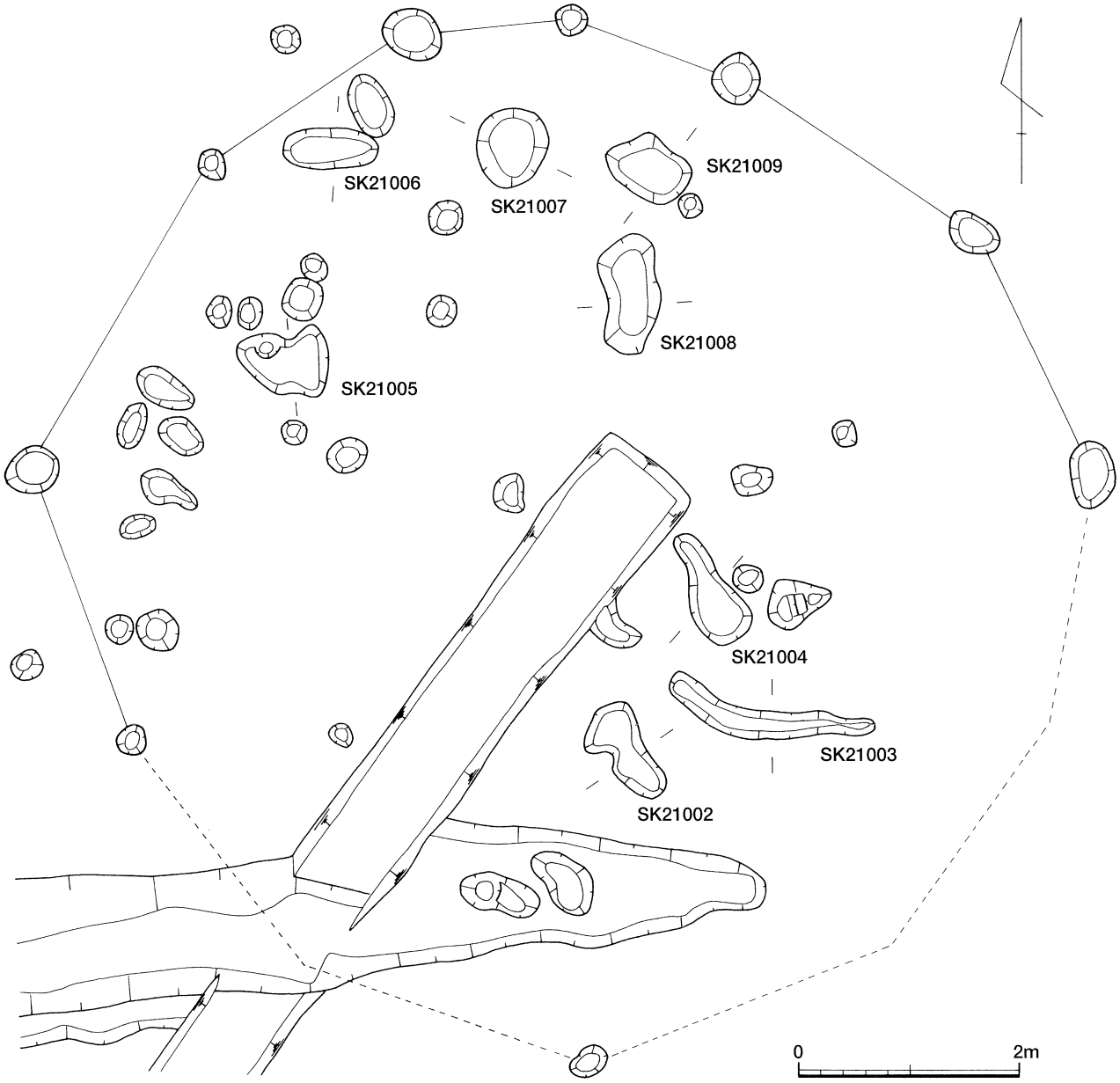


1	耕作土			
2	7.5YR	6/6	橙	砂混粘質土
3	7.5YR	5/1	褐灰	砂混粘質土
4	7.5YR	6/4	にぶい橙	砂混粘質土
5	10YR	5/4	にぶい黄褐	砂混粘質土
6	10YR	5/1	褐灰	砂混粘質土
7	7.5YR	6/2	灰黄褐	砂混粘質土
8	10YR	4/1	褐灰	砂混粘質土
9	10YR	4/2	灰黄褐	砂混粘質土
10	2.5YR	6/1	黄灰	砂混粘質土
11	10YR	7/4	にぶい黄橙	砂混粘質土
12	10YR	3/1	黒褐	砂混粘質土
13	2.5Y	4/1	黄灰	砂混粘質土
14	7.5YR	6/6	橙	砂混粘質土
15	7.5YR	5/1	褐灰	砂混粘質土
16	2.5Y	5/2	暗灰黄	砂混粘質土
17	2.5Y	4/1	黄灰	砂混粘質土
18	5Y	4/1	灰	砂混粘質土
19	2.5Y	4/1	黄灰	砂混粘質土
20	10YR	3/1	黒褐	砂混粘質土
21	2.5Y	8/4	淡黄	シルト～粘土

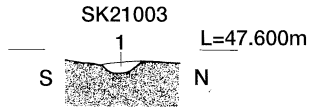
第33図　Ⅱ区西壁土層断面図



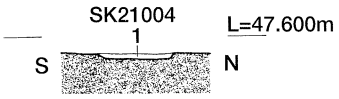
第34図　奥の坊奥池西遺跡平面図



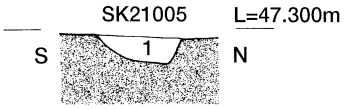
1　7.5YR　5/4　にぶい褐　砂混粘質土（炭・焼土含む）



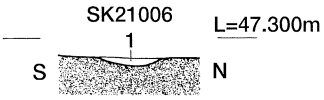
1　10YR　3/3　暗灰　砂混粘質土



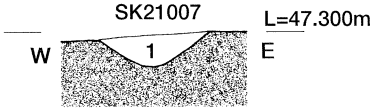
1　10YR　5/2　灰黄褐　砂混粘質土



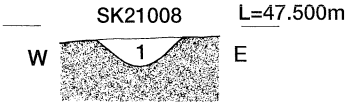
1　10YR　4/1　褐灰　砂混粘質土



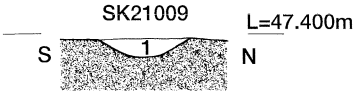
1　10YR　4/1　褐灰　砂混粘質土



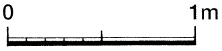
1　10YR　4/1　褐灰　砂混粘質土



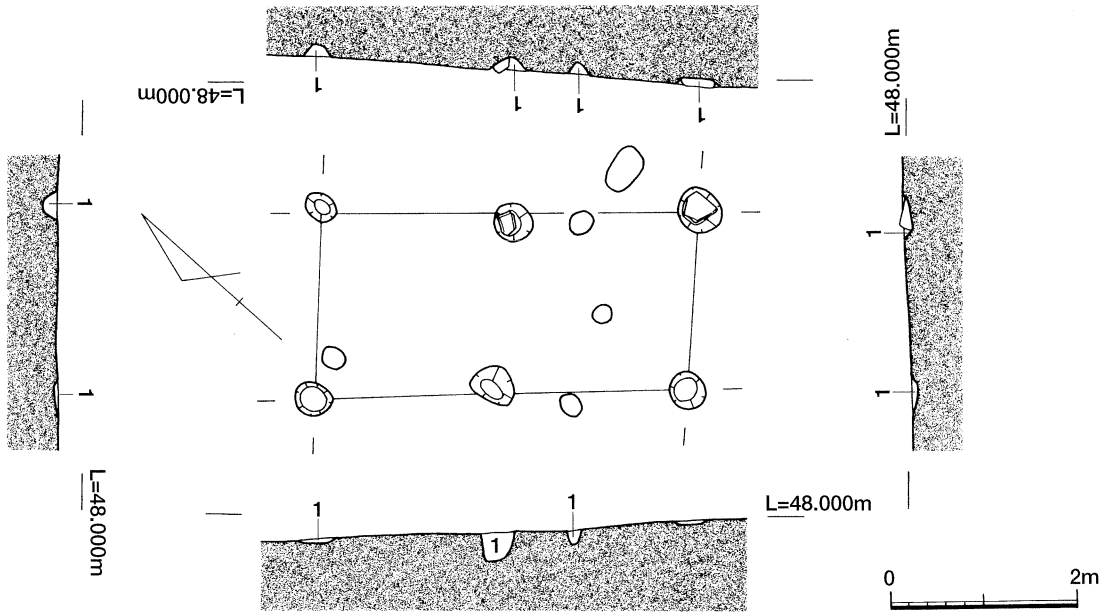
1　10YR　4/1　褐灰　砂混粘質土



1　10YR　4/1　褐灰　砂混粘質土



第 35 図　SH21001 平・断面図



1　10YR　5/1　褐灰　砂混粘質土

第 36 図　SB21001 平・断面図

SB21002（第 37 図）

Ⅱ区東端で検出した掘立柱建物である。梁間 2 間（11 m）×桁行 1 間（5.5 m），床面積 56.38 ㎡で，建物方位はN－48°－E である。柱穴は円形や隅丸方形を呈し，直径 70 ～ 85cm，深さ 10 ～ 20cm を測り，埋土は褐灰色砂混粘質土である。出土遺物は無いが，近世以降の溝の方位と合致することから，近世以降の建物と考えられる。

SB21003（第 38 図）

Ⅱ区中央南部で検出した掘立柱建物である。梁間 3 間（11.5 m）×桁行 1 間（6 m），床面積 66 ㎡で，建物方位はN－41°－E である。柱穴は円形や隅丸方形を呈し，直径 80cm ～ 1.2m，深さ 10 ～ 30cm を測り，埋土は砂混粘質土である。

出土遺物は，南端の柱穴である SK21029 から出土した鉄釘 2 本だけで，詳細な磁器は不明であるが，近世以降の溝の方位と合致することから，近世以降の建物と考えられる。

SB21004（第 39 図）

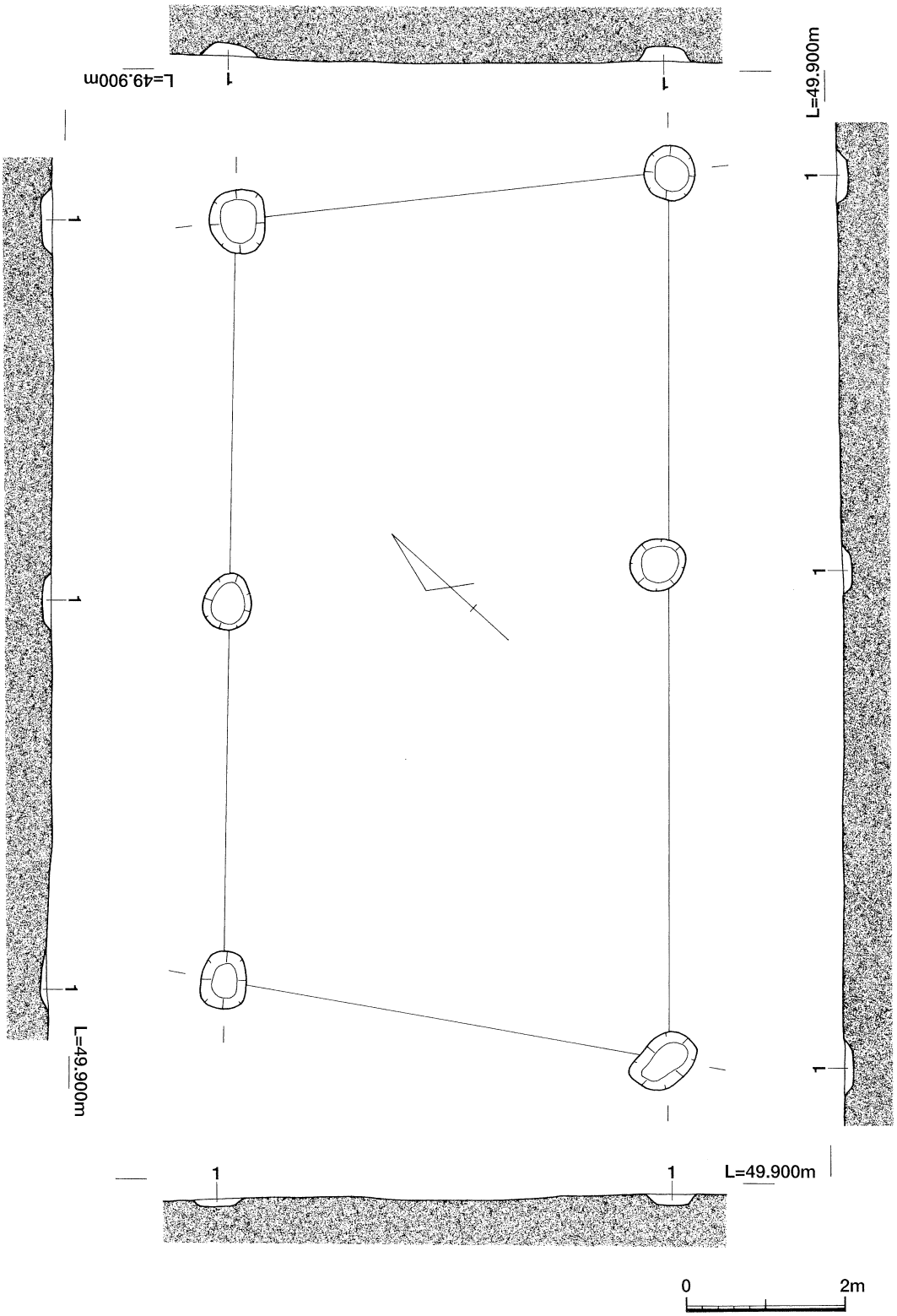
Ⅱ区中央南部で検出した掘立柱建物である。南端が調査区外に伸びているが，梁間 3 間（11.5 m）×桁行 1 間（6.8 m），床面積 78.2 ㎡と推定でき，建物方位はN－42°－E である。柱穴は不整形なものが多く，直径 70cm ～ 1.2m，深さ 10 ～ 30cm を測り，埋土は砂混粘質土である。出土遺物は無いが，近世以降の溝の方位と合致することから，近世以降の建物と考えられる。

SD11001（第 42 図）

Ⅰ区北西端で検出した溝である。検出長 7.3m，幅 15cm，深さ 5cm を測る。断面形状はU字を呈し，埋土は褐灰色粘質シルトである。遺物は出土していないが，他の近世以降の溝と同一方位であることから近世以降の溝と考えられる。

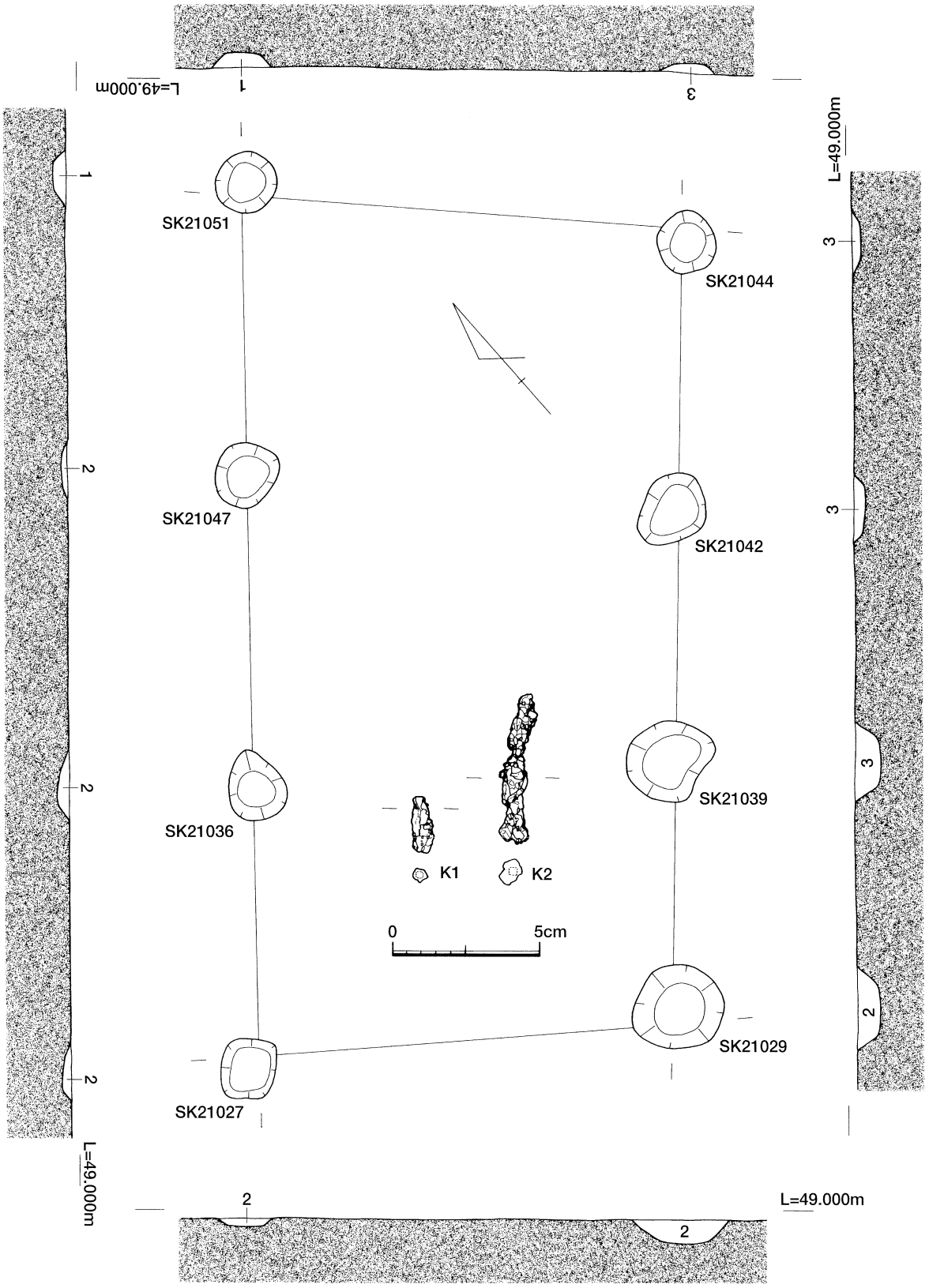
SD11002（第 42 図）

Ⅰ区西部で検出した溝である。検出長 17m，幅 50cm，深さ 15cm を測る。断面形状はU字を呈し，埋土は灰黄褐色砂混粘質土である。遺物は出土しておらず，他の溝とも方位が異なることから，時期は不明である。



1　10YR　5/1　褐灰　砂混粘質土

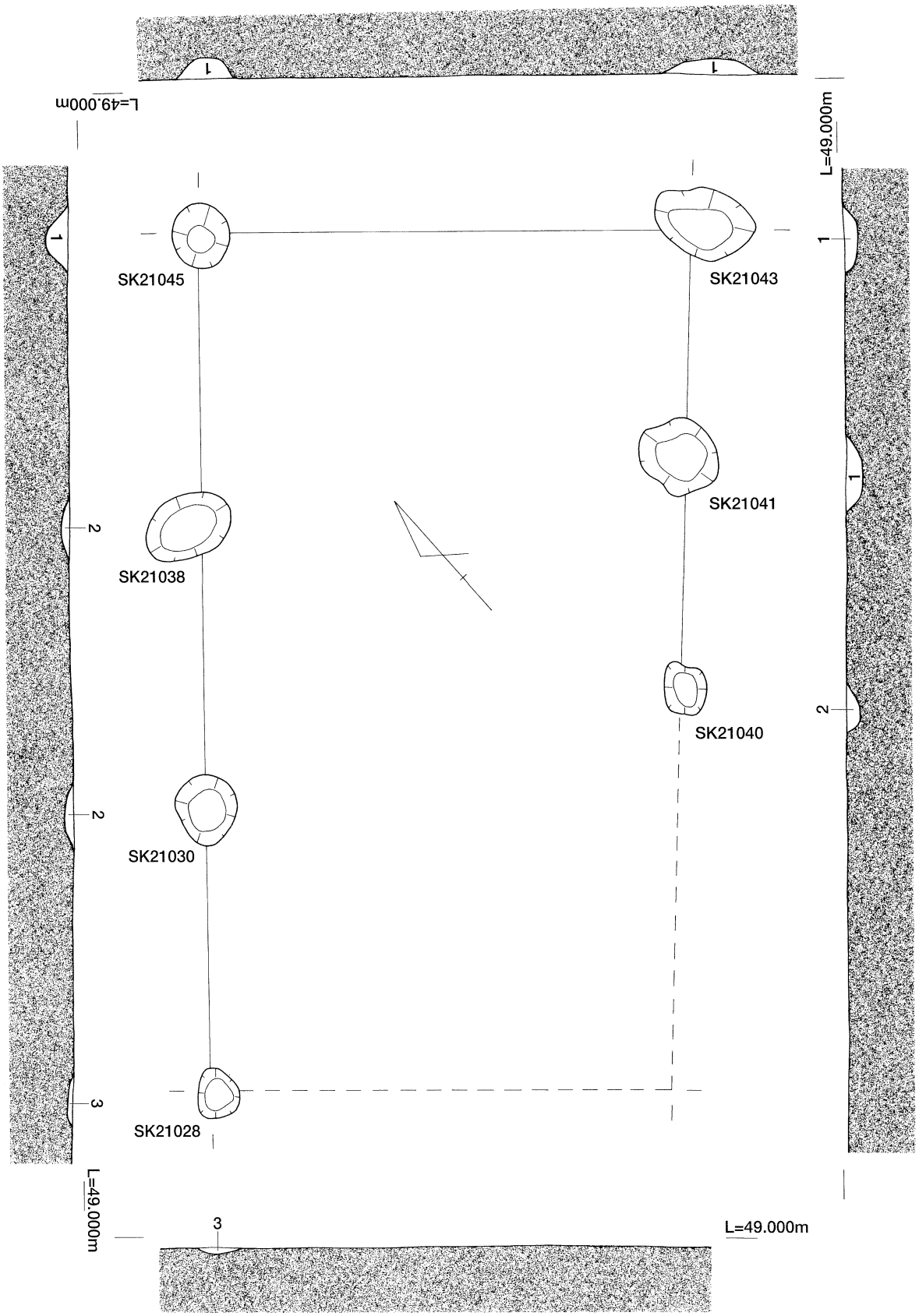
第 37 図　SB21002 平・断面図



1 2.5Y 5/1 黄灰 砂混粘質土
2 10YR 6/1 褐灰 砂混粘質土
3 2.5GY 6/1 緑灰 砂混粘質土

0 4m

第 38 図 SB21003 平・断面図及び出土遺物実測図



1　2.5GY　6/1　緑灰　砂混粘質土
2　10YR　6/1　褐灰　砂混粘質土
3　10YR　5/1　褐灰　砂混粘質土

0　4m

第 39 図　SB21004 平・断面図

SD11003（第42図）

Ⅰ区西部で検出した溝である。検出長2m，幅35cm，深さ15cmを測る。断面形状はU字を呈し，埋土は灰黄褐色砂混粘質土である。遺物は出土していないが，他の近世以降の溝と同一方位であることから近世以降の溝と考えられる。

SD11004（第42図）

Ⅰ区西部で検出した溝である。検出長4m，幅35cm，深さ15cmを測る。断面形状はU字を呈し，埋土は灰黄褐色砂混粘質土である。遺物は出土していないが，他の近世以降の溝と同一方位であることから近世以降の溝と考えられる。

SD11005（第42図）

Ⅰ区南西部で検出した溝である。検出長5m，幅1m，深さ5cmを測る。断面形状は浅い逆台形を呈し，埋土は褐灰色砂混粘質土である。遺物は出土していないが，他の近世以降の溝と同一方位であることから近世以降の溝と考えられる。

SD11006（第40図）

Ⅰ区中央から南西部にかけて流れる溝である。調査区南西隅で2方向に分岐している。検出長22m，幅1.7m，深さ10cmを測る。断面形状は浅い逆台形を呈し，埋土は褐灰色砂混粘質土である。調査区南西隅でそのまま南西方向に向かう溝と，西へ派生する溝の2方向に分岐している。

遺物は縄文土器の小片が3点出土しており，第40図に掲載した。2は深鉢の口縁部で，口縁部外面に2条の平行沈線が施されている。3・4は縄文土器の体部片で，外面に縄文が施されている。縄文土器しか出土していないが，他の近世以降の溝と同一方位であることから近世以降の溝と考えられる。

SD11007（第42図）

Ⅰ区南部で検出した溝である。検出長13m，幅45cm，深さ10cmを測る。断面形状はU字を呈し，埋土は灰黄褐色砂混粘質土である。遺物は出土していないが，他の近世以降の溝と同一方位であることから近世以降の溝と考えられる。

SD11008（第42図）

Ⅰ区北東部で検出した溝である。検出長27.5m，幅1m，深さ40cmを測る。断面形状はU字を呈し，埋土は5層に分層できる。1～4層は砂混粘質土層で，最下層の5層は黄褐色細砂層である。遺物は出土していないが，12世紀の溝と考えられるSD21001と同方位であることから，同時期の遺構と考えられる。

SD11009（第42図）

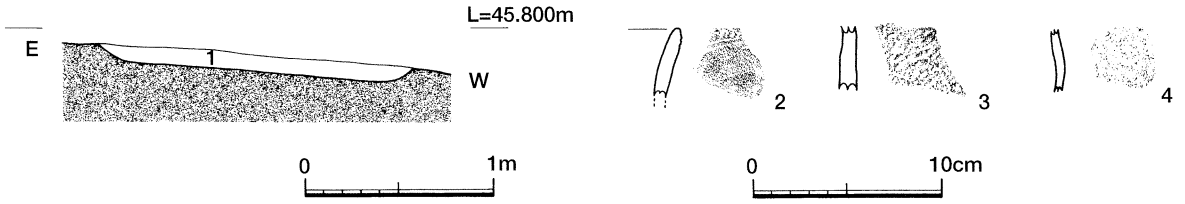
Ⅰ区南東部で検出した溝である。検出長4m，幅1.15m，深さ3cmを測る。ほぼ溝底しか検出しておらず，埋土は褐灰色砂混粘質土である。遺物は出土していないが，他の近世以降の溝と同一方位であることから近世以降の溝と考えられる。

SD11010（第42図）

Ⅰ区南東部で検出した溝である。検出長3m，幅15cm，深さ3cmを測る。ほぼ溝底しか検出しておらず，埋土は褐灰色砂混粘質土である。遺物は出土していないが，他の近世以降の溝と同一方位であることから近世以降の溝と考えられる。

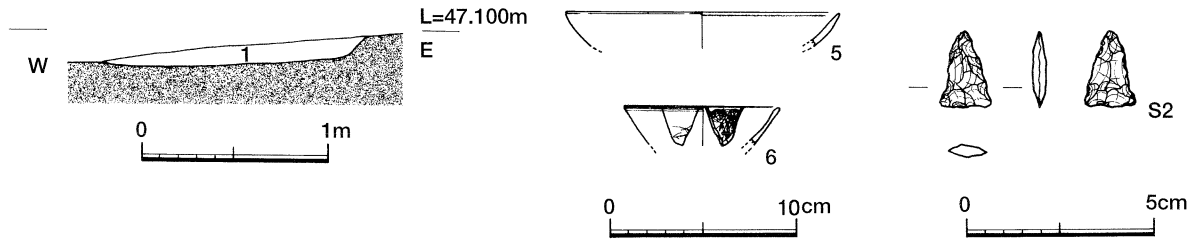
SD11011（第42図）

Ⅰ区東部で検出した溝である。検出長24m，幅1.4m，深さ10cmを測る。断面形状は浅いU字を呈し，埋土は褐灰色砂混粘質土である。遺物は出土していないが，他の近世以降の溝と同一方位であることから近世以降の溝と考えられる。



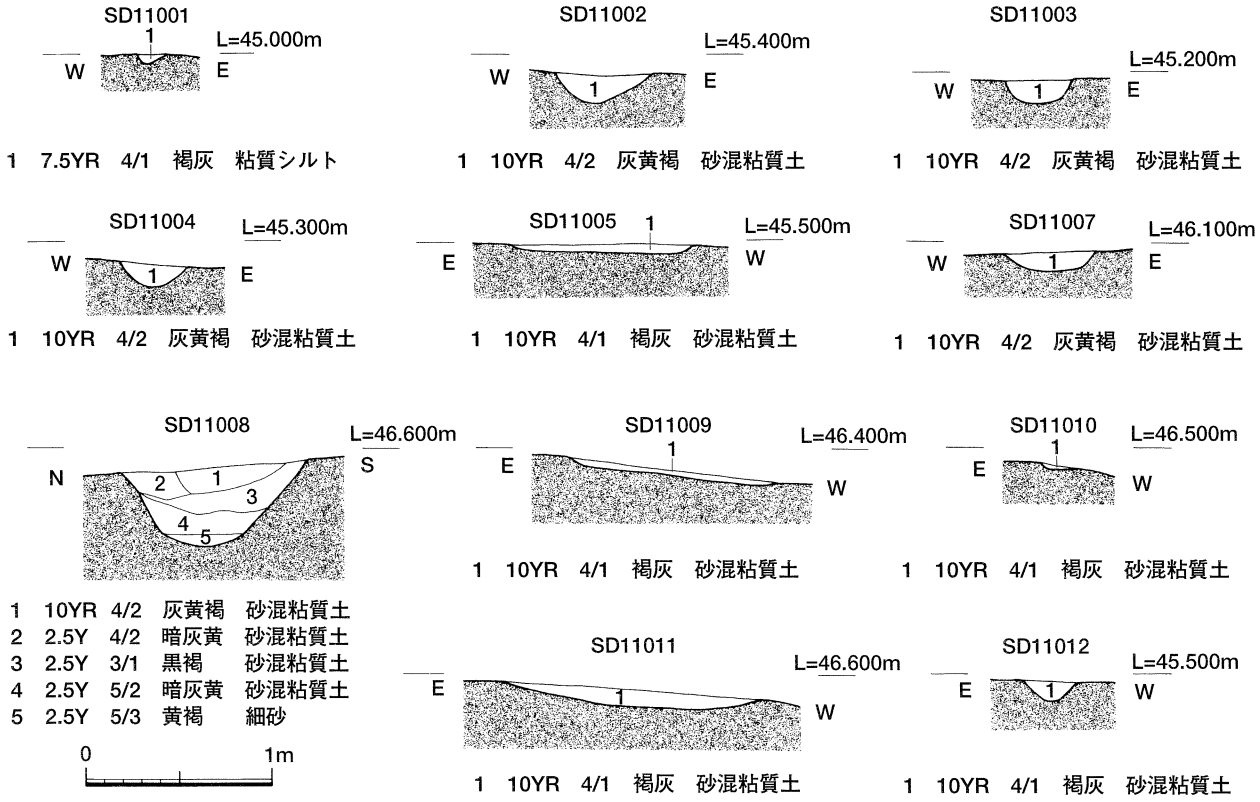
1　10YR　4/1　褐灰　砂混粘質土

第 40 図　SD11006 断面図及び出土遺物実測図



1　10YR　5/1　褐灰　砂混粘質土

第 41 図　SD11013 断面図及び出土遺物実測図



1　7.5YR　4/1　褐灰　粘質シルト

1　10YR　4/2　灰黄褐　砂混粘質土

1　10YR　4/2　灰黄褐　砂混粘質土

1　10YR　4/2　灰黄褐　砂混粘質土

1　10YR　4/1　褐灰　砂混粘質土

1　10YR　4/2　灰黄褐　砂混粘質土

1　10YR　4/2　灰黄褐　砂混粘質土
2　2.5Y　4/2　暗灰黄　砂混粘質土
3　2.5Y　3/1　黒褐　砂混粘質土
4　2.5Y　5/2　暗灰黄　砂混粘質土
5　2.5Y　5/3　黄褐　細砂

1　10YR　4/1　褐灰　砂混粘質土

1　10YR　4/1　褐灰　砂混粘質土

1　10YR　4/1　褐灰　砂混粘質土

1　10YR　4/1　褐灰　砂混粘質土

第 42 図　Ⅰ区検出溝断面図

SD11012（第42図）

Ⅰ区中央で検出した溝である。検出長6m，幅25cm，深さ10cmを測る。断面形状はU字を呈し，埋土は褐灰色砂混粘質土である。遺物は出土していないが，他の近世以降の溝と同一方位であることから近世以降の溝と考えられる。

SD11013（第41図）

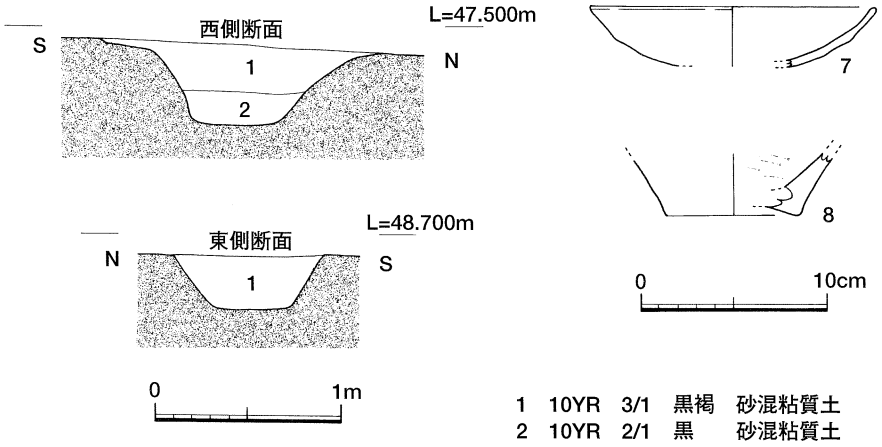
Ⅰ区とⅡ区の境で検出した溝である。ほぼ現在の地割と同位置に所在する。検出長25m，幅1.4 m，深さ10cmを測る。西肩が削平のため，ほとんど残っていないが，断面形状は浅い逆台形を呈するものと推測され，埋土は褐灰色砂混粘質土である。

出土遺物は第41図に掲載した。5は京信楽系陶器皿で，内面に圏線1条が施されている。6は瀬戸美濃系磁器盃で，内外面に染付が見られる。S2は平基式の石鏃である。瀬戸美濃系磁器が出土していることから，概ね19世紀頃の遺構と考えられる。

SD21001（第43図）

Ⅱ区南西部で検出した溝である。中央部で削平を受け途切れてはいるが，検出長36m，幅1.5m，深さ45cmを測る。断面形状は逆台形を呈し，埋土は2層に分層できる。上層は黒褐色砂混粘質土層，下層は黒色砂混粘質土層である。

出土遺物は第43図に掲載した。7は和泉型瓦器椀である。8は弥生土器の底部で，混入品である。瓦器椀から13世紀頃の遺構と考えられる。

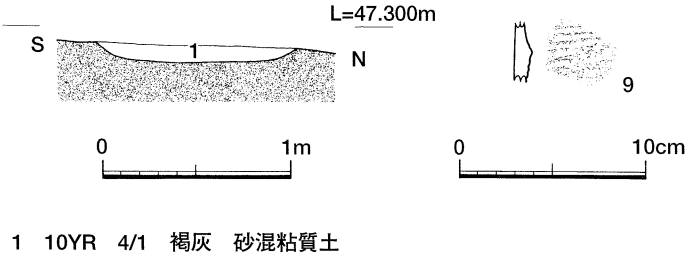


第43図　SD21001断面図及び出土遺物実測図

SD21002（第44図）

Ⅱ区西部で検出した溝である。検出長10m，幅1.1m，深さ10cmを測る。断面形状は浅い逆台形を呈し，埋土は褐灰色砂混粘質土である。

出土遺物は第44図に掲載した縄文土器片1点のみである。SD11013に切られており，近世以前の遺構と考えられる。他の中・近世の溝のいずれとも方位が異なることから時期は不明である。



第44図　SD21002断面図及び出土遺物実測図

SD21003（第53図）

Ⅱ区西部で検出した溝である。検出長3m，幅25cm，深さ10cmを測る。断面形状はU字を呈し，埋土は褐灰色砂混粘質土である。SD21002に直交する溝であるが，出土遺物は無く，時期は不明である。

SD21004（第53図）

Ⅱ区西部で検出した溝である。検出長5.4m，幅95cm，深さ10cmを測る。断面形状は浅い逆台形を呈し，埋土は褐灰色砂混粘質土である。SD21002とほぼ同方位の溝で，SD11013に切られており，近世以前の遺構と考えられるが，出土遺物は無く，時期は不明である。

SD21005（第53図）

Ⅱ区西部で検出した溝である。検出長1.8m，幅20cm，深さ5cmを測る。断面形状はU字を呈し，埋土は褐灰色砂混粘質土である。遺物は出土していないが，他の近世以降の溝と同一方位であることから近世以降の溝と考えられる。

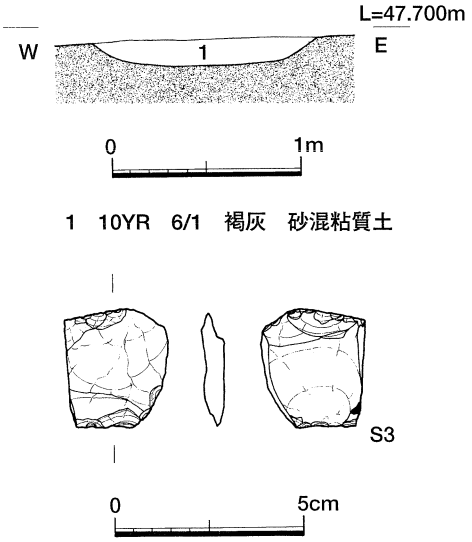
SD21006（第45図）

Ⅱ区西部で検出した溝である。検出長12.4m，幅1.2 m，深さ15cmを測る。断面形状は浅い逆台形を呈し，埋土は褐灰色砂混粘質土である。

出土遺物は第45図に掲載したサヌカイト製の削器1点のみである。他の近世以降の溝と同一方位であることから近世以降の溝と考えられる。

SD21007（第53図）

Ⅱ区北西部で検出した溝である。検出長4.4m，幅30cm，深さ5cmを測る。断面形状は逆台形を呈し，埋土は褐灰色砂混粘質土である。遺物は出土していないが，他の近世以降の溝と同一方位であることから近世以降の溝と考えられる。



第45図 SD21006断面図及び出土遺物実測図

SD21008（第46～48図）

Ⅱ区の南部で検出した東西方向の溝である。南肩は検出できておらず，幅は不明であるが，検出長66 m，深さ1 mを測る。断面形状は逆台形を呈し，埋土は東側断面で10層，西側断面で7層に細分できるが，上層の砂層，中層の粘質シルト～砂混粘土層，下層の砂層の3層に大別できる。

出土遺物は第47・48図に掲載した。10は弥生土器の製塩土器で，外面はタテヘラケズリである。11は須恵器の底部である。12・13は土師器の坏である。14・15は土師質土器の甕である。16は土師質土器の擂鉢で，内外面に指頭圧が見られる。17・18は土師質土器の鉢である。19～23は土師質土器の焙烙である。24は肥前系磁器の碗で外面は二重網目が施されている。25は肥前系の陶胎染付碗である。26は肥前系磁器の瓶で，外面青磁釉，内面無釉である。27は京信楽系陶器の灯明皿である。28は肥前系陶器の碗である。29は大谷焼陶器の甕で，底面は無釉である。30は肥前系陶器の鉢で内面は刷毛目が施される。31は明石焼の擂鉢で，口縁部に溶着痕が認められる。32は備前焼の擂鉢で，外面に重ね焼痕が認められる。33～36は堺または明石焼の擂鉢である。37は土師質の平瓦で，凹面指頭圧，凸面板ナデが見られ，凸面には波状文が2条施されている。なお，瓦の角には釘穴が見られる。弥生時代や中世の遺物も若干含まれるが，概ね18世紀後半～19世紀の遺物が多いことから，近世後半頃の遺構と考えられる。

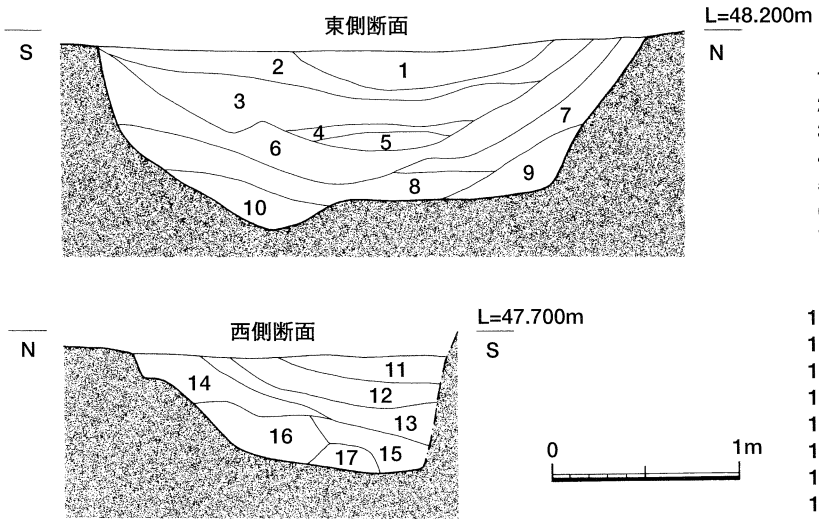
SD21009（第53図）

Ⅱ区南部で検出した溝である。検出長6m，幅75cm，深さ3cmを測る。底面近くで検出しており，埋土は褐灰色砂混粘質土である。遺物は出土していないが，中世の溝SD21001を切っており，また他の近世以降の溝と同一方位であることから近世以降の溝と考えられる。

SD21010（第49図）

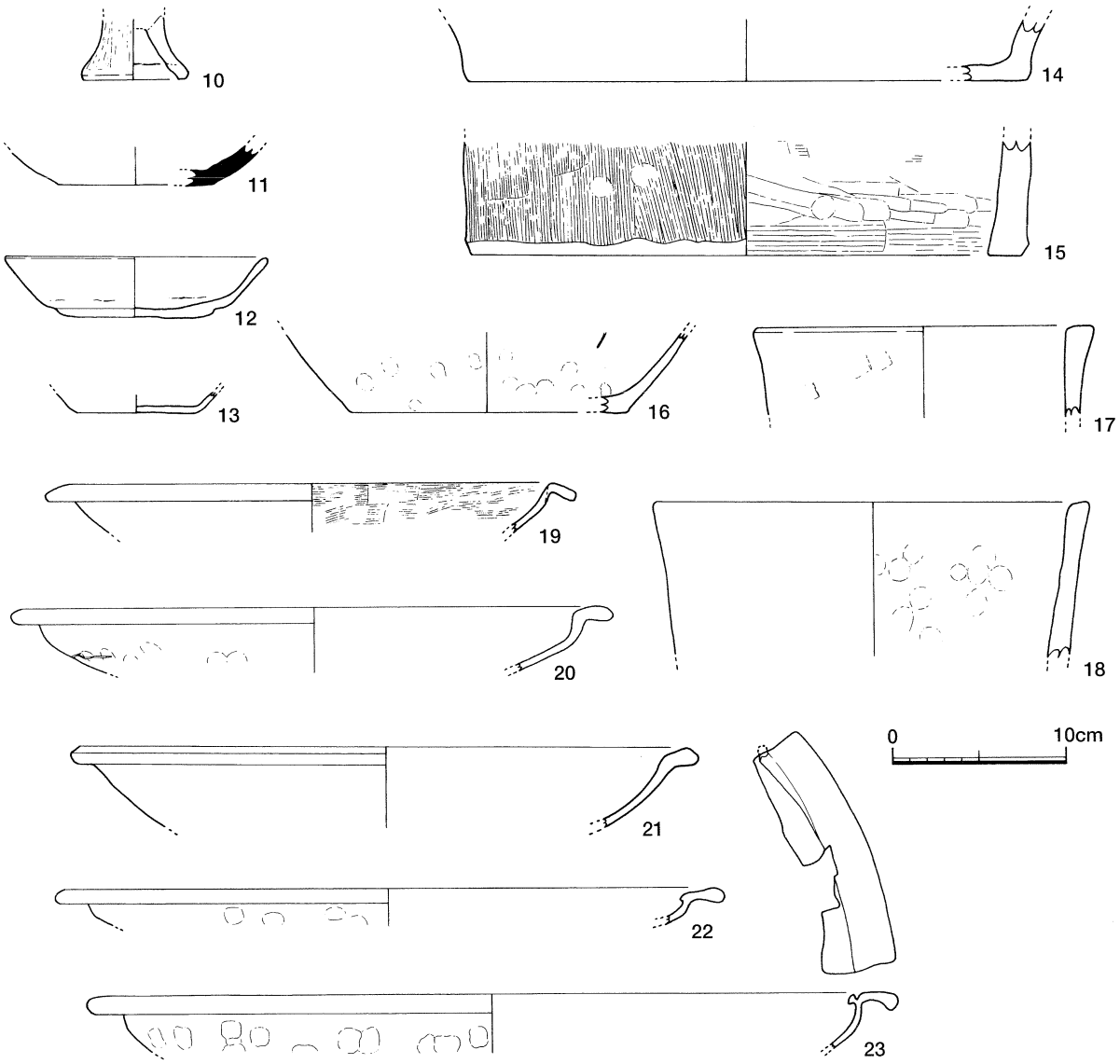
Ⅱ区中央で検出した溝である。検出長48m，幅2.75 m，深さ15cmを測る。断面形状は浅い逆台形を呈し，埋土は褐灰色砂混粘質土である。

出土遺物は第49図に掲載した。38は土師質土器の土瓶の注ぎ口である。39は肥前系磁器の皿である。40は混入品と考えられる縄文土器の底部で底部外面に沈線を1条巡らしている。S4はサヌカイト製の削器である。陶磁器等が出土していることから，近世の遺構と考えられる。

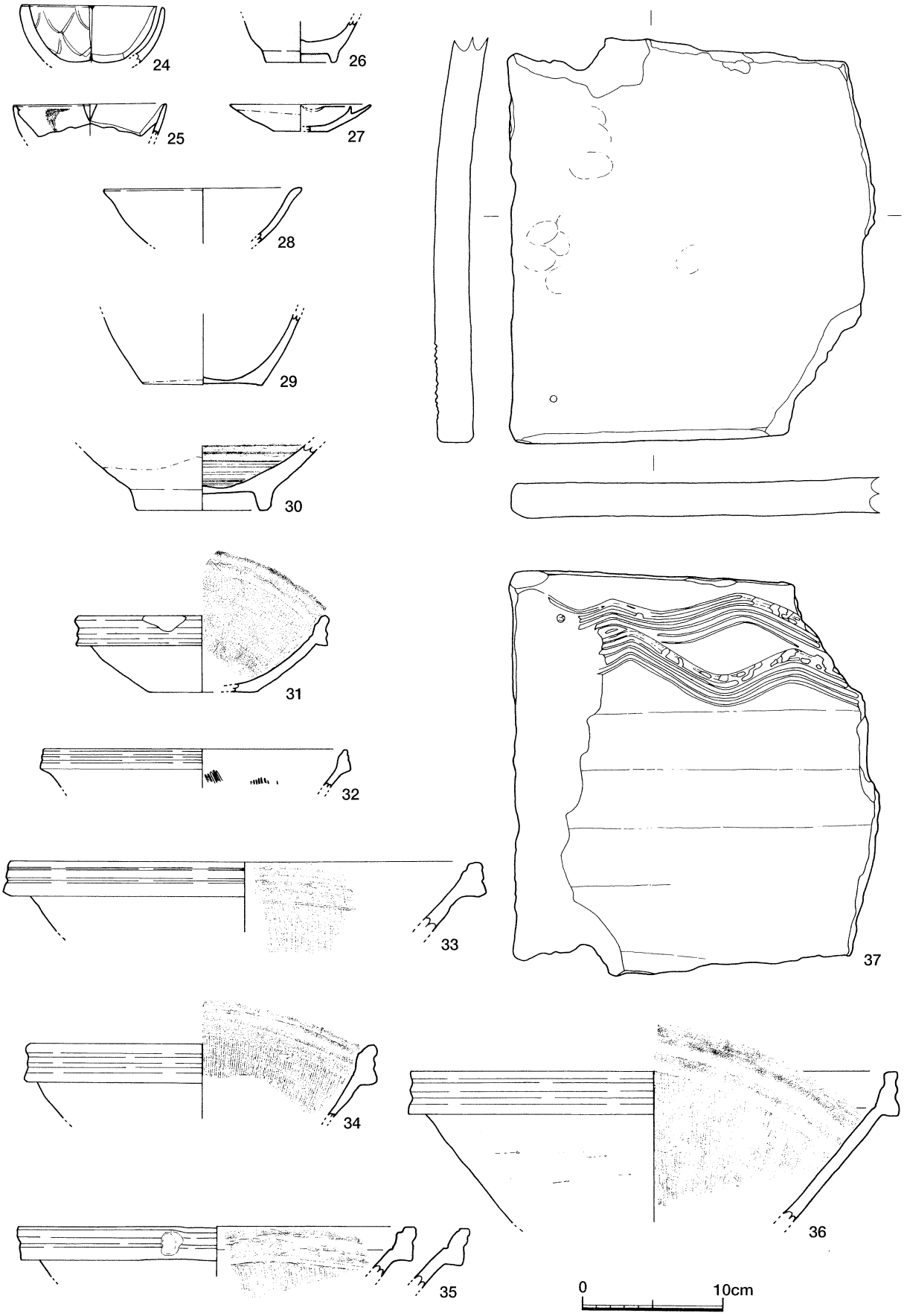


1	10YR	7/3	にぶい黄橙	粗砂
2	2.5Y	5/2	暗灰黄	粘質シルト
3	7.5YR	5/4	にぶい褐	細砂～粗砂
4	2.5Y	5/1	黄灰	粘質シルト
5	2.5Y	7/4	浅黄	細砂
6	7.5Y	5/1	灰	粘質シルト
7	2.5Y	6/3	にぶい黄	砂混粘土
8	2.5Y	7/2	灰黄	細砂～粗砂
9	10YR	6/3	にぶい黄橙	粗砂
10	10YR	6/2	灰黄褐	細砂～粗砂
11	10YR	6/4	にぶい黄橙	細砂
12	10YR	5/3	にぶい黄褐	粗砂
13	2.5Y	6/2	灰黄	粘質シルト
14	2.5Y	3/1	黒褐	砂混粘土
15	5Y	2/1	黒	砂混粘土
16	10YR	7/4	にぶい黄橙	粗砂
17	10YR	5/2	灰黄褐	砂混粘土

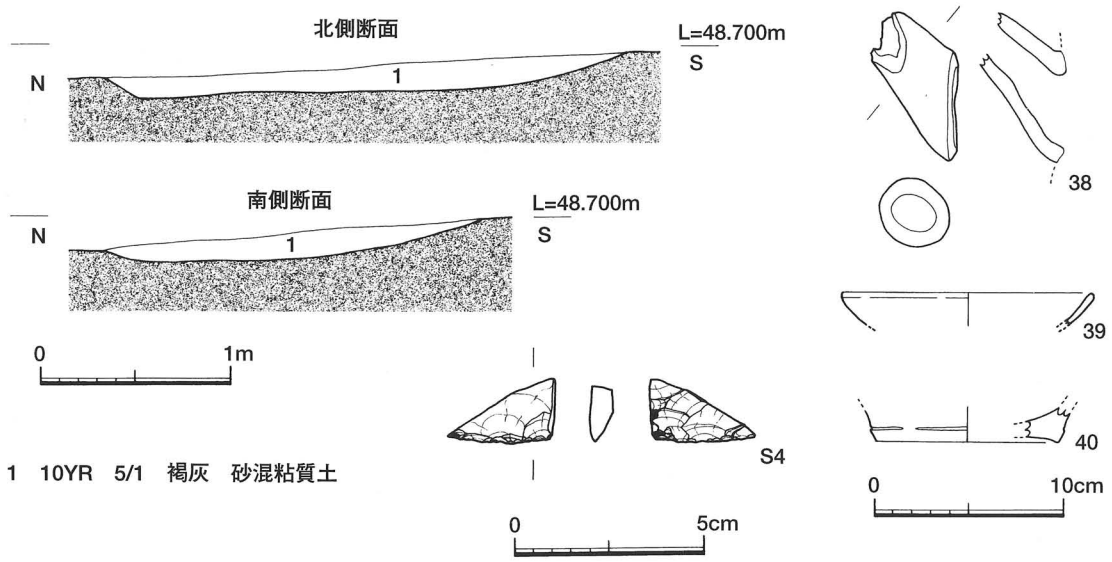
第 46 図　SD21008 断面図



第 47 図　SD21008 出土遺物実測図①



第 48 図　SD21008 出土遺物実測図②



第 49 図　SD21010 断面図及び出土遺物実測図

SD21011（第 53 図）

II 区中央で検出した溝である。検出長 3.5m，幅 15cm，深さ 15cm を測る。断面形状は逆台形を呈し，埋土は黒褐色砂混粘質土である。出土遺物は無く，時期は不明であるが，SD21010 に切られていることから，近世以前の遺構と考えられる。

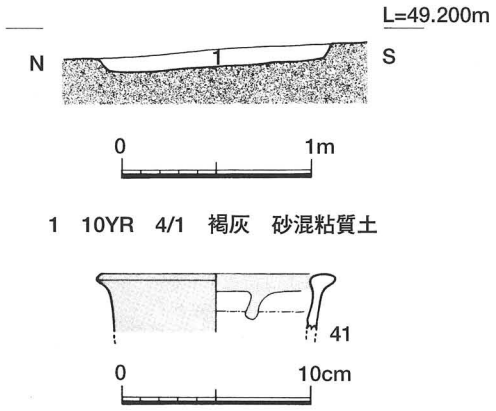
SD21012（第 53 図）

II 区中央で検出した溝である。SD21010 を切っており検出長 3.5m，幅 15cm，深さ 15cm を測る。断面形状は浅い逆台形を呈し，埋土は明黄褐色粗砂である。出土遺物は無く，時期は不明であるが，SD21010 を切っており，近世以降の遺構と考えられる。

SD21013（第 50 図）

II 区北東部で検出した溝である。検出長 17.4m，幅 1.25 m，深さ 10cm を測る。断面形状は浅い逆台形を呈し，埋土は褐灰色砂混粘質土である。

出土遺物は第 50 図 41 の肥前系磁器の鉢だけである。近世の遺構と考えられる。



第 50 図　SD21013 断面図及び出土遺物実測図

SD21014（第 53 図）

II 区北東部で検出した溝である。検出長 25.4m，幅 25cm，深さ 5cm を測る。断面形状は浅い逆台形を呈し，埋土は褐灰色砂混粘質土である。溝は南西部に向かって低くなっており，SK21061 が集水枡の役割を果たしている。遺物は出土していないが，他の近世以降の溝と同一方位であることから近世以降の溝と考えられる。

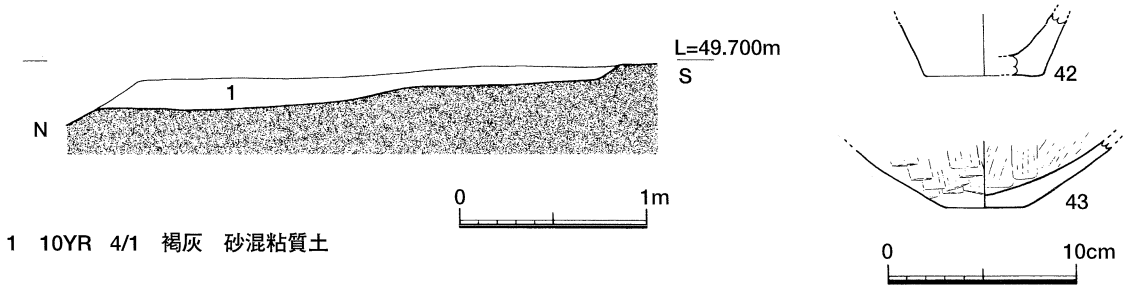
SD21015（第 51 図）

II 区北東部で検出した溝である。検出長 20m，幅 2.8m，深さ 15cm を測る。断面形状は浅い逆台形を呈し，埋土は褐灰色砂混粘質土である。

出土遺物は第 51 図に掲載した。42・43 は弥生土器の底部である。43 は内外面とも板ナデである。弥生土器しか出土していないが，他の近世以降の溝と同一方位であることから近世以降の溝と考えられる。

SD21016（第 53 図）

Ⅱ区南東部で検出した溝である。検出長 2.2m，幅 35cm，深さ 5cm を測る。断面形状は浅い逆台形を呈し，埋土は褐灰色砂混粘質土である。遺物は出土していないが，他の近世以降の溝と同一方位であることから近世以降の溝と考えられる。

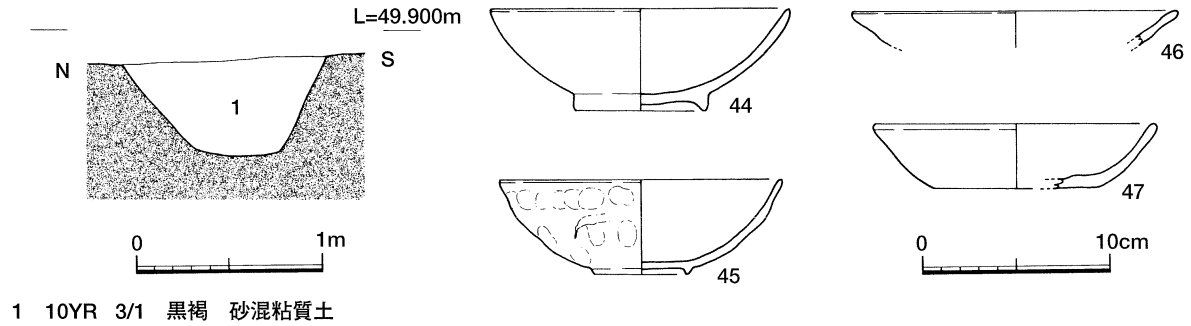


第 51 図　SD21015 断面図及び出土遺物実測図

SD21017（第 52 図）

Ⅱ区北東部で検出した溝である。検出長 29.5m，幅 1m，深さ 50cm を測る。断面形状は逆台形を呈し，埋土は黒褐色砂混粘質土である。削平されて不明であるが，溝の南西端が屈曲し，その延長方向に SD21001 が所在することから，同一の溝の可能性が高い。

出土遺物は第 52 図に掲載した。44・45 は土師器の坏である。46・47 は土師器の坏である。出土遺物から概ね 13 世紀頃の遺構と考えられる。



第 52 図　SD21017 断面図及び出土遺物実測図

SD21018（第 53 図）

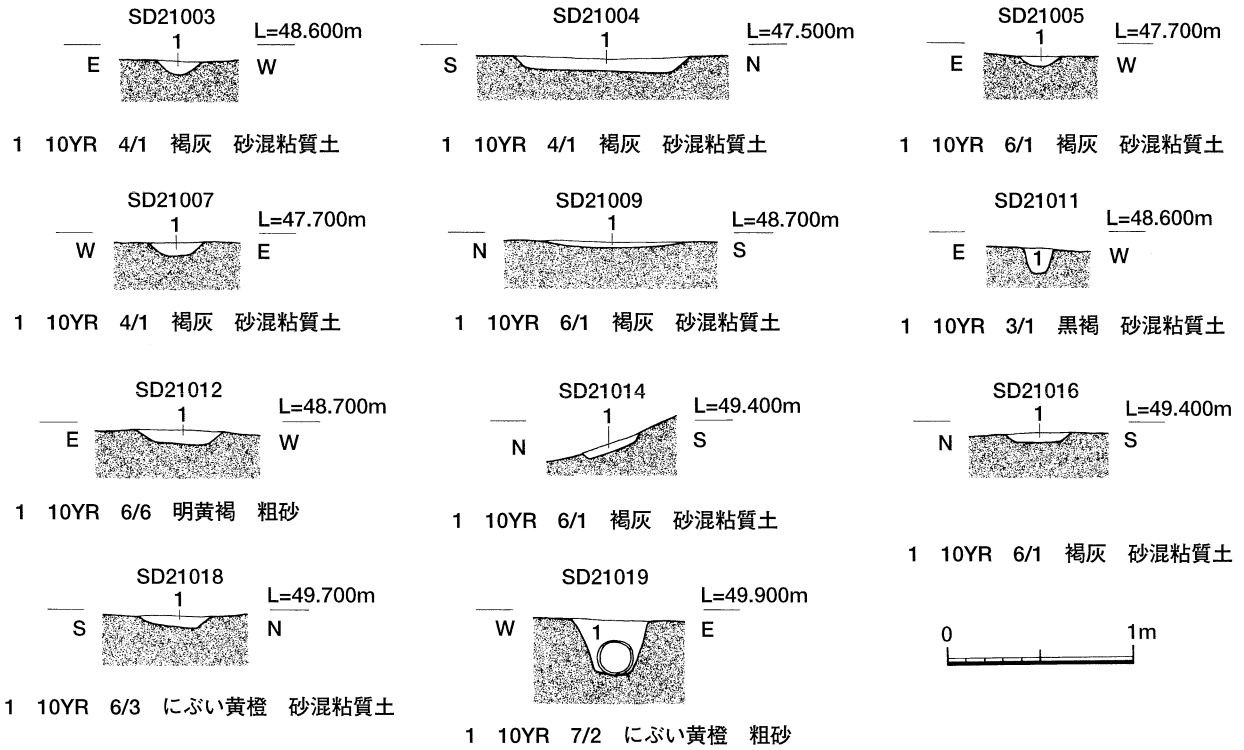
Ⅱ区南東部で検出した溝である。検出長 11m，幅 40cm，深さ 5cm を測る。断面形状は浅い逆台形を呈し，埋土はにぶい黄橙色砂混粘質土である。遺物は出土していないが，他の近世以降の溝と同一方位であることから近世以降の溝と考えられる。

SD21019（第 53 図）

Ⅱ区東端で検出した溝である。検出長 11m，幅 40cm，深さ 30cm を測る。断面形状は逆台形を呈し，埋土はにぶい黄橙色粗砂である。溝内には直径 18cm，長さ 90cm の土師質円筒管が埋設されており，暗渠としている。遺物は出土していないが，他の近世以降の溝と同一方位であることから近世以降の溝と考えられる。

SE11001（第 54 図）

Ⅰ区北東端で検出した遺構である。長辺 2m，短辺 1.7m，深さ 40cm を測る。断面形状は逆台形を呈し，埋土は灰白色細砂～粗砂である。遺構内には底面から約 15cm において漆喰によって作られた容器が認められた。長辺 1.7m，短辺 1.25m を測る長方形を呈し，上部は削平により欠損しているが，高さ 25cm 以上になる。内部は 2 ブロックに分かれており，北側の広いブロックは幅 1.25m，長さ 1.5m に対し，南側の狭いブロックは



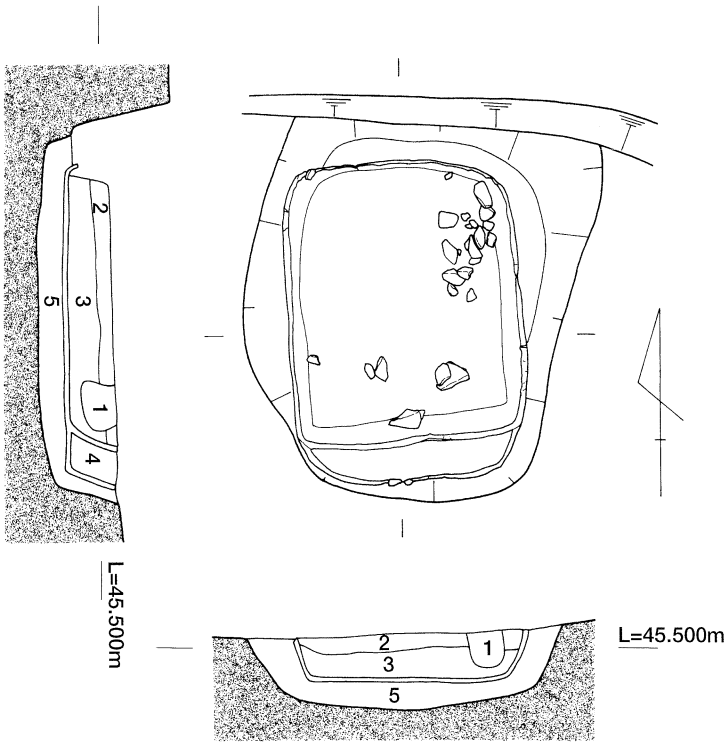
第53図　Ⅱ区検出溝断面図

幅1.25m，長さ20cmを測る。容器内部は4層に分層できた。第1層は明黄褐色砂混粘土層で，上部からの攪乱である。第2層は褐灰色砂混粘質土，第3層は灰白色細砂で，この2層は北側の広いブロック内に堆積していた。広いブロックの底面からは拳大の角礫が多く出土した。一方，南側の狭いブロック内には第4層の暗灰黄色砂混粘質土が堆積していた。

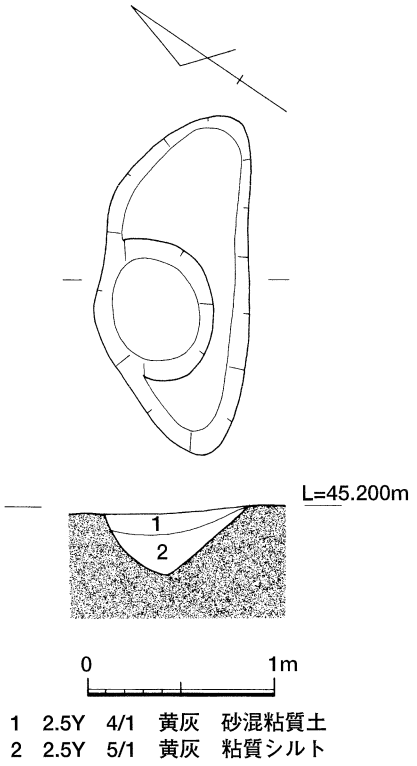
遺物は出土していないが，検出位置から近世以降の棚田に伴うものと考えられる。なお，棚田の角に位置することから，耕作に伴うもので，水溜用に使用された遺構の可能性が考えられる。

SK11004（第55図）

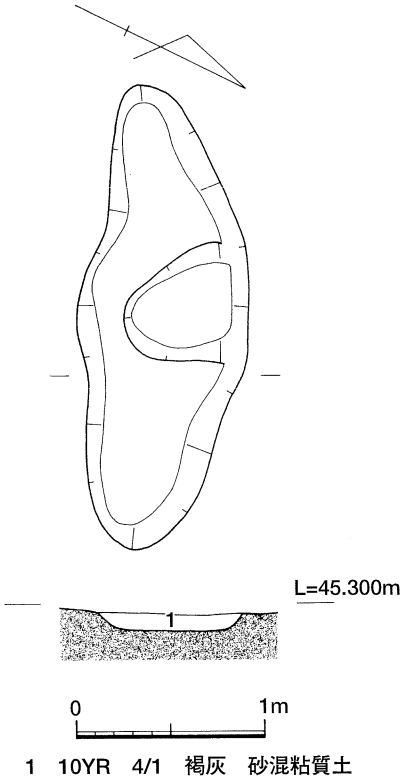
Ⅰ区西部で検出した土坑である。平面形態は楕円形ないし溝状を呈し，長辺1.8 m，短辺80cm，深さ35cmを測る。断面形状はV字を呈し，埋土は2層に分層でき，上層は黄灰色砂混粘質土，下層は黄灰色粘質シルトである。土坑底面において長径70cm，短径60cm，深さ20cmの楕円形のピットを検出した。遺物は出土しておらず，時期は不明であるが，縄文土器が出土したSK11013からの規則的な配列状況から縄文後期の遺構である可能性が考えられる。



第54図　SE11001平・断面図



第55図 SK11004平・断面図



第56図 SK11005平・断面図

SK11005（第56図）

Ⅰ区西部で検出した土坑である。平面形態は楕円形ないし溝状を呈し，長辺2.5 m，短辺90cm，深さ10cmを測る。断面形状は浅い逆台形を呈し，埋土は褐灰色砂混粘質土である。土坑底面において直径60cm，深さ20cmのピットを検出した。遺物は出土しておらず，時期は不明であるが，縄文土器が出土したSK11013からの規則的な配列状況から縄文後期の遺構である可能性が考えられる。

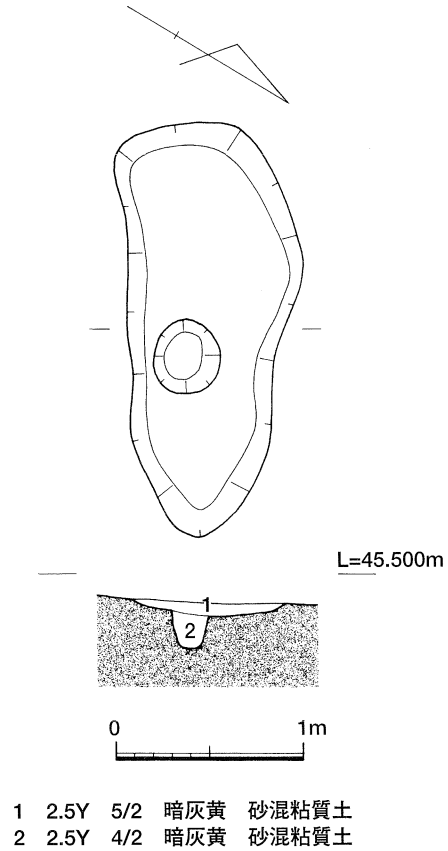
SK11011（第57図）

Ⅰ区西部で検出した土坑である。平面形態は楕円形ないし溝状を呈し，長辺2.2 m，短辺90cm，深さ5cmを測る。断面形状は浅いレンズ状の堆積を呈し，埋土は暗灰黄色砂混粘質土である。土坑底面において直径40cm，深さ20cmのピットを検出した。遺物は出土しておらず，時期は不明であるが，縄文土器が出土したSK11013からの規則的な配列状況から縄文後期の遺構である可能性が考えられる。

SK11013（第58図）

Ⅰ区西部で検出した土坑である。平面形態は楕円形ないし溝状を呈し，長辺2.7 m，短辺1.4 m，深さ50cmを測る。断面形V字を呈し，埋土は4層に分層できる。第1層は黒褐色砂混粘質土，第2層は黄灰色粗砂，第3層は暗灰黄色細砂，第4層は暗灰黄色シルト質極細砂である。

出土遺物は第58図48の縄文土器の底部のみである。最下層の第4層から出土しており，縄文後期の遺構と考えられる。



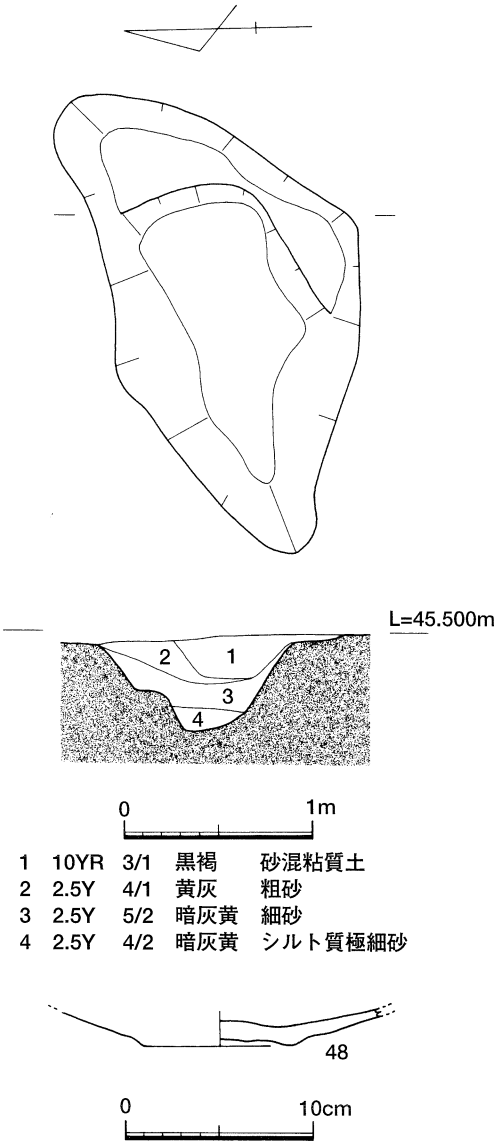
第57図 SK11011平・断面図

なお，SK11013，SK11011，SK11005，SK11004は，同規模・同形態の土坑が規則的に並んでおり，ピットを持つ土坑があることから，縄文時代の落とし穴の可能性が考えられる。

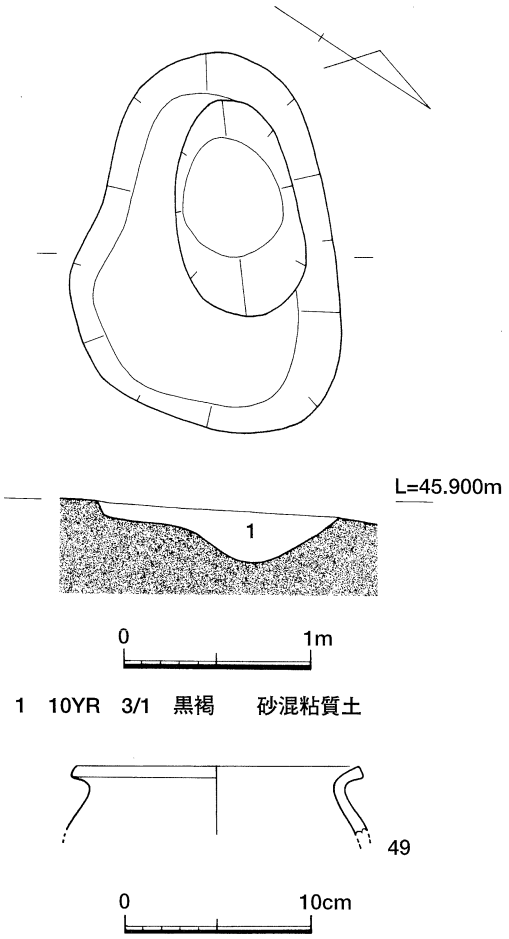
SK11017（第59図）

Ⅰ区中央で検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し，長径2m，短径1.4m，深さ25cmを測る。土坑西部がやや深くなっており，埋土は黒褐色砂混粘質土である。

出土遺物は第59図49の弥生土器の甕のみである。出土遺物から弥生後期の遺構と考えられる。



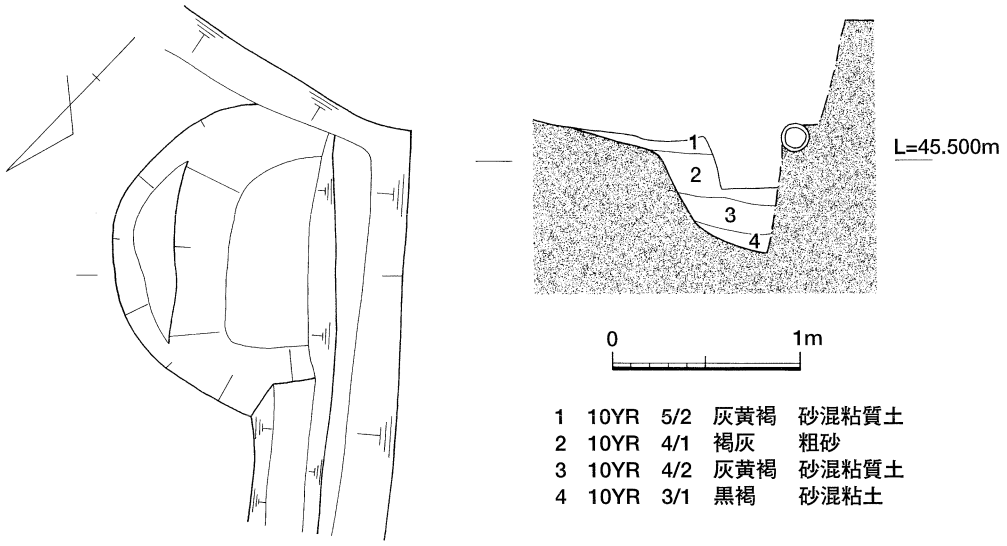
第58図　SK11013平・断面図及び出土遺物実測図



第59図　SK11017平・断面図及び出土遺物実測図

SK11022（第60図）

Ⅰ区南西端で検出した土坑である。西半が調査区外に伸びるが，平面形態は円形を呈すると考えられ，直径1.6m，深さ60cmを測る。埋土は4層に分層できる。第1層は灰黄褐色砂混粘質土，第2層は褐灰色粗砂，第3層は灰黄褐色砂混粘質土，第4層は黒褐色砂混粘土である。弥生土器の小片が出土しており，弥生時代の遺構と考えられる。



第 60 図　SK11022 平・断面図

SK11024（第 61 図）

Ⅰ区北東端で検出した土坑である。北半が調査区外に伸びるが，溝状を呈し，検出長 2.8 m，幅 60cm，深さ 10cm を測る。断面形状は浅いＵ字を呈し，埋土は灰色砂混粘質土である。

出土遺物は第 61 図 50 の瀬戸美濃系陶器の鉢のみであることから，近世の遺構と考えられる。

SK11026（第 62 図）

Ⅰ区北東端で検出した土坑である。平面形態は台形を呈し，長辺 1.05 m，短辺 80cm，深さ 15cm を測る。断面形状は浅い逆台形を呈し，埋土は褐灰色砂混粘質土である。

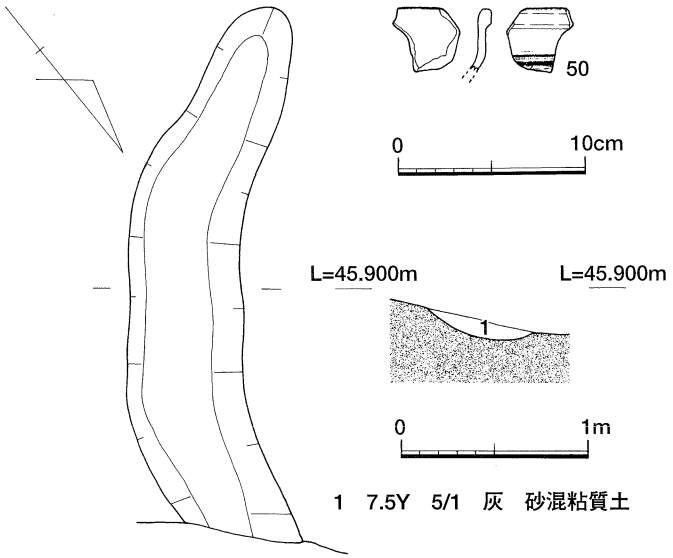
出土遺物は第 62 図 51 の肥前系磁器の碗のみであることから，近世の遺構と考えられる。

SK11034（第 63 図）

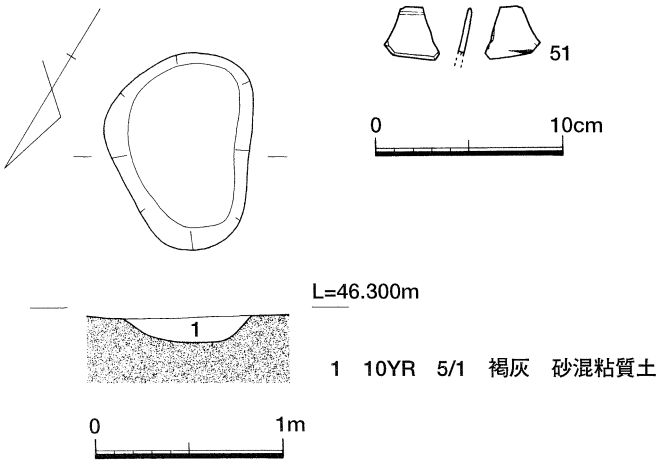
Ⅰ区南東部で検出した土坑である。平面形態は方形周溝状を呈する。遺構の外形は長辺 2.8 m，短辺 2.5m を測る。内部は長辺 1.25m，短辺 1m を測る。溝は幅 50 ～ 90cm，深さ 5cm で，溝底面には土坑やピット状の掘り込みが見られる。埋土は褐灰色砂混粘質土である。遺物は出土しておらず，時期・性格は不明である。

SK21010（第 64 図）

Ⅱ区西部で検出した土坑である。SD11013 に一部切られているが，平面形態は不整形で長辺 2.6m 短辺 1.6m，深さ 20cm を測る。断面形状は浅い逆台形を呈し，埋土は 3 層に分



第 61 図　SK11024 平・断面図及び出土遺物実測図



第 62 図　SK11026 平・断面図及び出土遺物実測図

層できる。第１層は黒褐色砂混粘質土，第２層は褐灰色砂混粘質土，第３層は黒褐色砂混粘質土である。

出土遺物は第64図52の縄文土器のみである。口縁部外面に沈線２条を巡らしている。他に遺物が出土していないことから，縄文後期の遺構と考えられる。

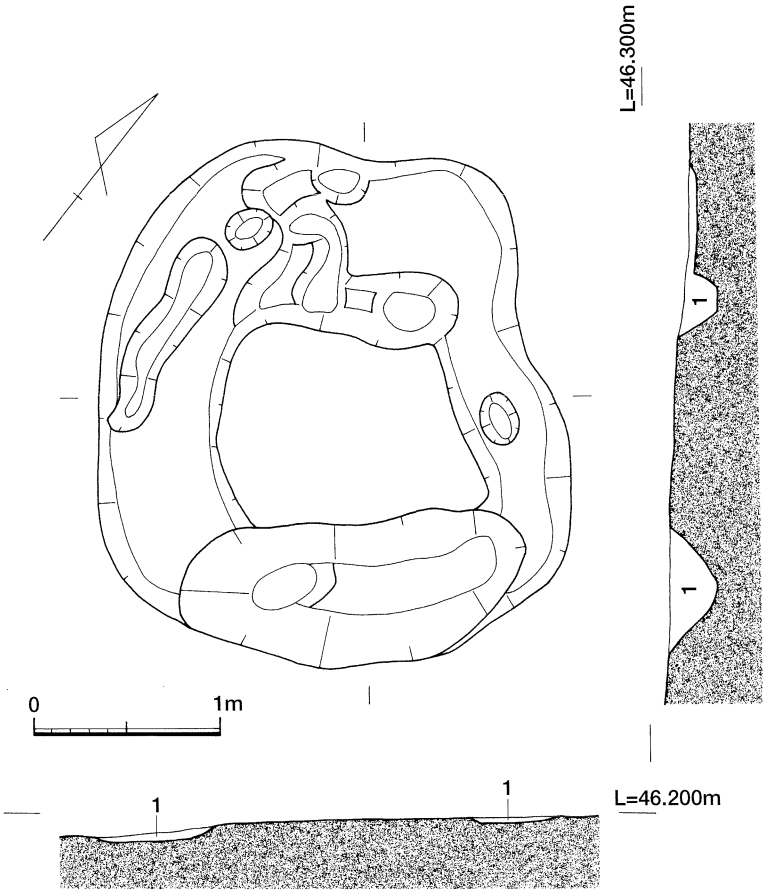
SK21017（第65図）

Ⅱ区南部で検出した土坑である。SD21008に切られているため平面形態は不明である。検出長6.35m，深さ60cmを測る大型の土坑である。断面形状は逆台形を呈し，埋土は７層に分層できる。第１層は黒褐色粘土層，第２層は褐灰色粗砂，第３層は暗灰黄色粘質シルト，第４層は暗灰黄色細砂，第５層は黄褐色細砂，第６層はにぶい黄褐色細砂，第７層は褐灰色砂混粘質土である。陶磁器の小片が出土していることから，近世の遺構と考えられる。

SK21031（第66図）

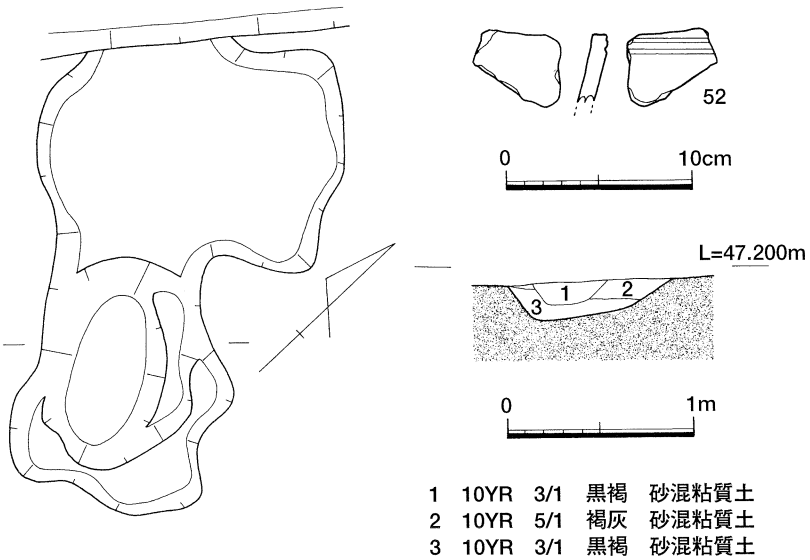
Ⅱ区中央で検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し，長径1.5 m，短径1.3m，深さ50cmを測る。肩から10～30cm程度緩やかに落ち込み，そこからほぼ垂直に掘り込まれ，底面も水平である。埋土は５層に分層できる。第１層は褐灰色砂混粘質土，第２層は灰黄褐色砂混粘質土，第３層はにぶい黄橙色砂混粘質土，第４層はにぶい黄橙色細砂，第５層は黒褐色砂混粘土層である。

出土遺物は第66図に掲載した。53は土師質の焙烙である。やや深めの器形で，外面指頭圧，内面ヨコハケである。54

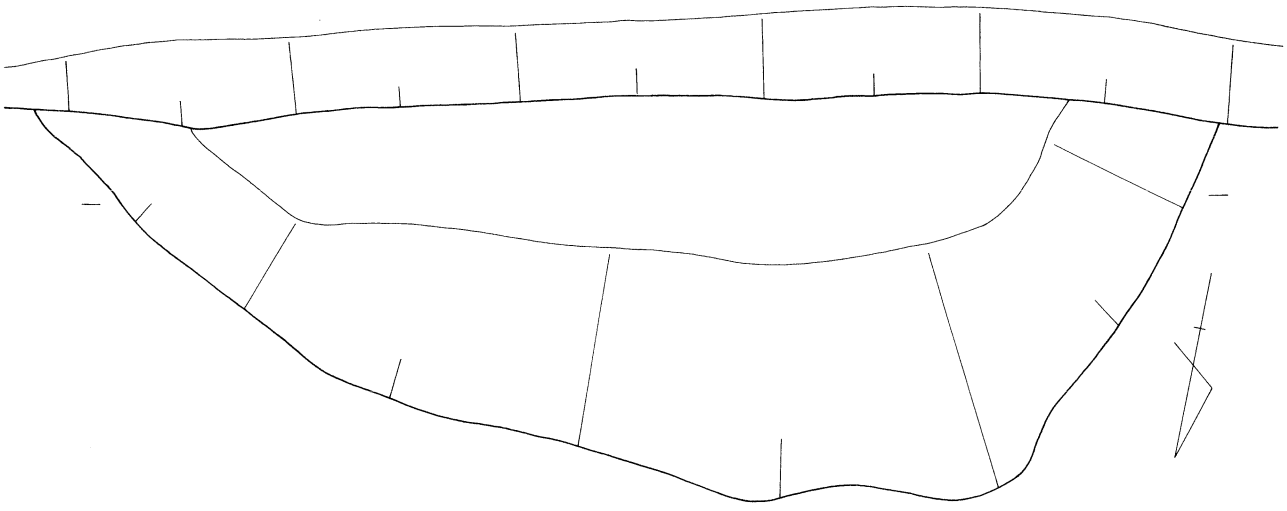


1　10YR　4/1　褐灰　砂混粘質土

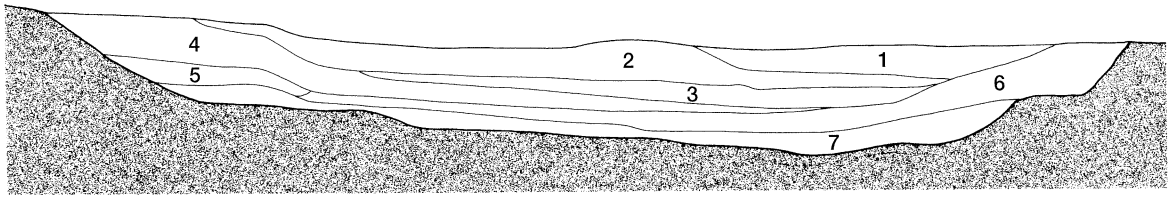
第63図　SK11034平・断面図



第64図　SK21010平・断面図及び出土遺物実測図



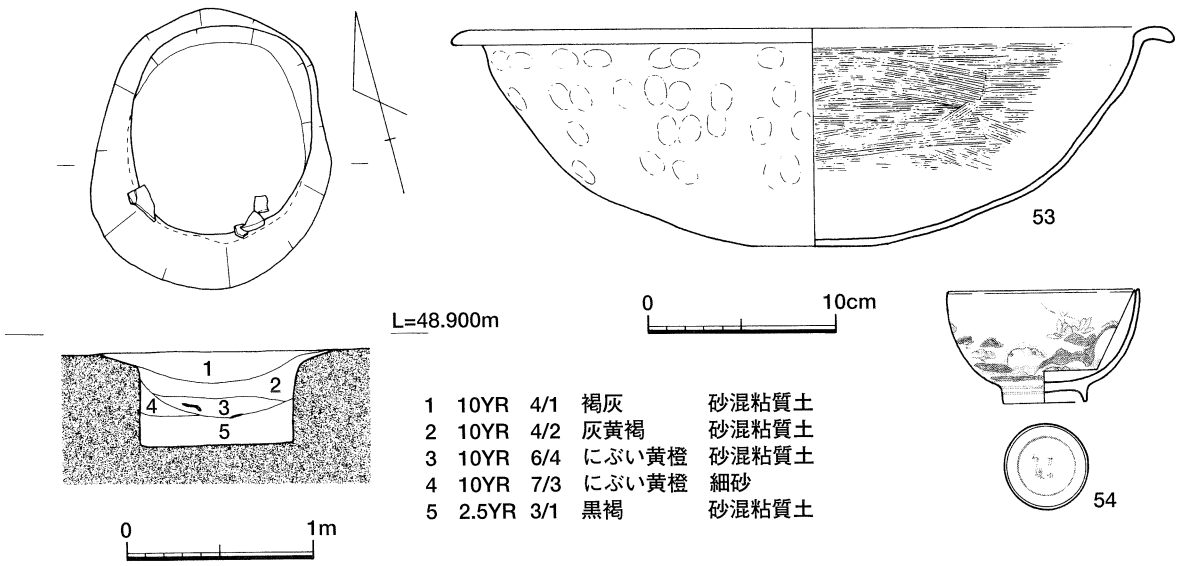
L=48.700m



0　1m

1	7.5YR	3/1	黒褐	粘土	5	2.5Y	5/3	黄褐	細砂
2	10YR	4/1	褐灰	粗砂	6	10YR	6/3	にぶい黄褐	細砂
3	2.5Y	5/2	暗灰黄	粘質シルト	7	10YR	4/1	褐灰	砂混粘質土
4	2.5Y	4/2	暗灰黄	細砂					

第 65 図　SK21017 平・断面図



1	10YR	4/1	褐灰	砂混粘質土
2	10YR	4/2	灰黄褐	砂混粘質土
3	10YR	6/4	にぶい黄橙	砂混粘質土
4	10YR	7/3	にぶい黄橙	細砂
5	2.5YR	3/1	黒褐	砂混粘質土

第 66 図　SK21031 平・断面図及び出土遺物実測図

は肥前系磁器の碗である。外面に草花文と圏線２条が染付けされており，高台内には「太明年製」の銘が見られる。出土遺物から 18 世紀前半頃の遺構と考えられる。

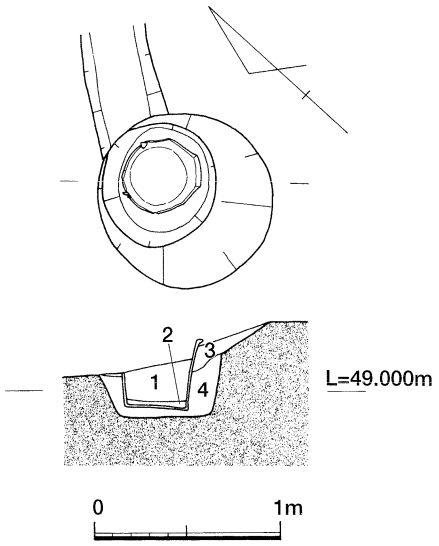
SK21061（第 67 図）

Ⅱ区中央で検出した土坑である。平面形態は円形を呈し，長径 95cm，深さ 50cm を測る。断面形状は逆台形を呈し，埋土は２層に分層できる。上層は暗灰黄色砂混粘質土，下層は黒褐色砂混粘質土である。なお，土坑内には底面から 5cm 浮いた状態で甕が埋められていた。甕の内部についても２層に分層でき，上層は暗青灰色砂混粘質土，下層はオリーブ灰色細砂である。先述したとおり，SD21014 の南西端に位置し，埋甕を伴うことから，集水枡の機能が考えられる。埋甕以外の出土遺物は無いが，SD21014 同様，近世以降の遺構と考えられる。

SK21079（第 68 図）

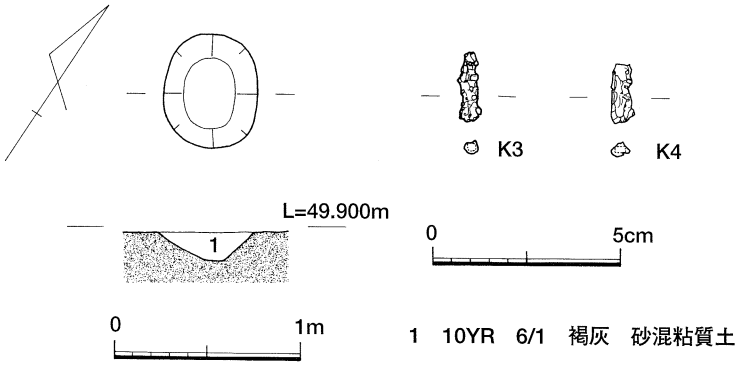
Ⅱ区東端で検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し，長径 60cm，短径 50cm，深さ 15cm を測る。断面形状はＵ字を呈し，埋土褐灰色砂混粘質土の単層である。

出土遺物は第 68 図に掲載した２本の釘のみで，遺構の時期は不明である。



1	5BG	4/1	暗青灰	砂混粘質土
2	5GY	5/1	オリーブ灰	細砂
3	2.5Y	5/2	暗灰黄	砂混粘質土
4	2.5Y	3/1	黒褐	砂混粘質土

第 67 図　SK21061 平・断面図



1　10YR　6/1　褐灰　砂混粘質土

第 68 図　SK21079 平・断面図及び出土遺物実測図

第２節　まとめ

奥の坊奥池西遺跡においては，多数の遺構を検出したが，遺物に関しては全体でコンテナ３箱分の遺物しか出土しておらず，その大半はSD21008出土のものであることから各遺構の時期決定において困難を極めた。わずかな出土遺物と遺構の配列状況や方位によって概ね縄文時代後期，弥生時代後期，中世，近世以降の４時期に大別した。以下に主要遺構の変遷を掲載し，まとめに代えたい。

第１期　縄文時代後期（第69図）

縄文時代の遺構はSK11004，SK11005，SK11011，SK11013の土坑群があげられる。これらの土坑群は１列に並んでおり，ピット状の掘り込みのあるものがあることから，落とし穴の可能性が考えられる。遺跡の南西約500mの小山・南谷遺跡においても落とし穴が検出されており，周辺丘陵部一帯が狩猟域であったことがうかがえる。落とし穴の他では，SK21010からも縄文土器が出土しているが，明確な居住遺構は検出していない。

第２期　弥生時代後期（第70図）

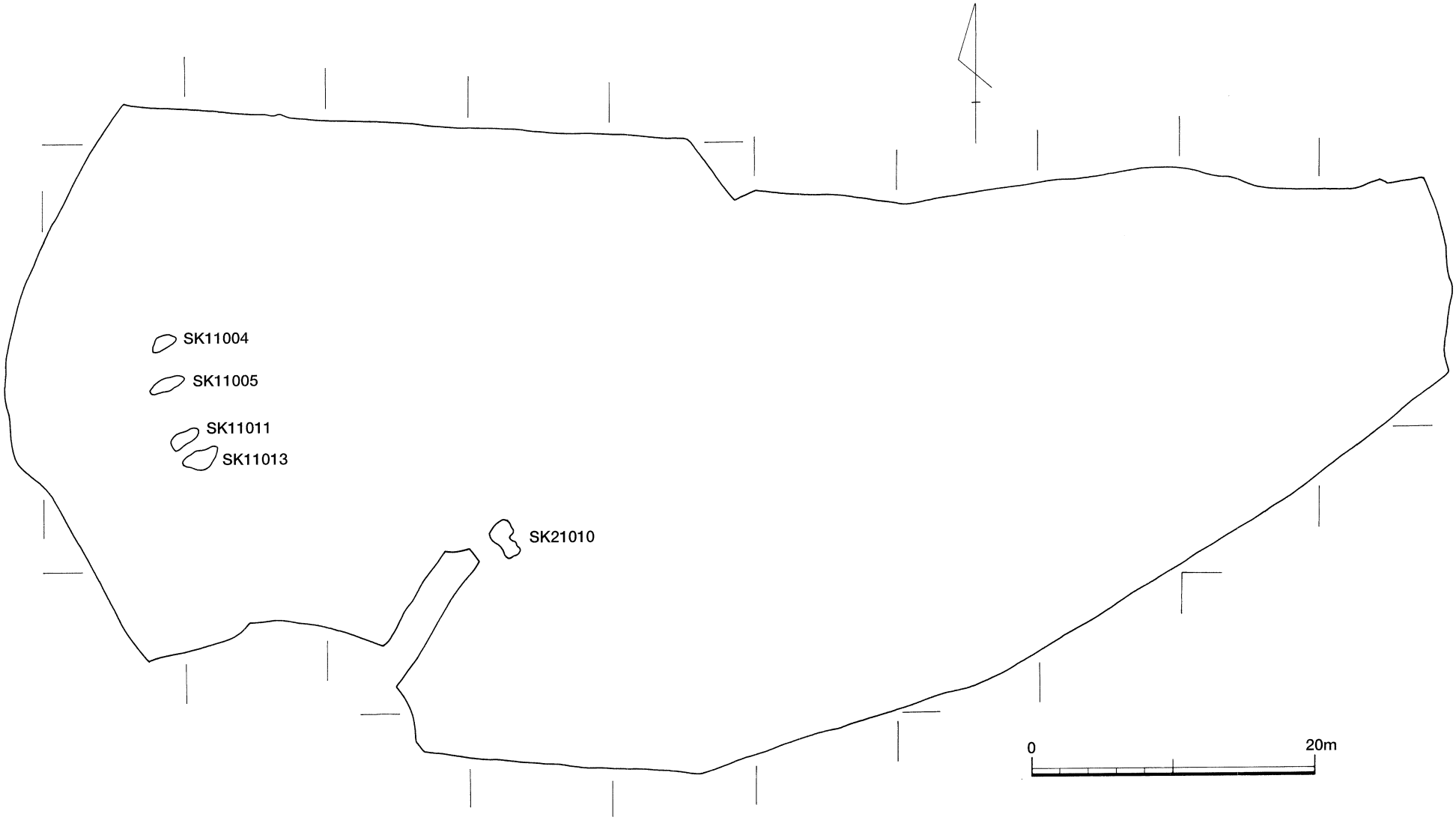
弥生土器が出土した土坑SK11017，SK11022が明確な弥生時代後期の遺構である。また，埋土から考えてⅠ区及びⅡ区西端の土坑やピットの多くは黒褐色砂混粘質土であることから，同時期の遺構の可能性が高いと考えられる。また，竪穴住居SH21001は時期不明であるが，この竪穴住居を掘り込む形で掘削されたSD21001内に弥生土器片が少量含まれていることから，当該期の可能性が考えられる。包含層中や近世以降埋土から一定量の弥生土器が出土しており，近世の棚田形成時に削平を受けたものと考えられる。西方約200mに所在する奥の坊権現前遺跡とほぼ同時期の小集落と考えられる。

第３期　13世紀（第71図）

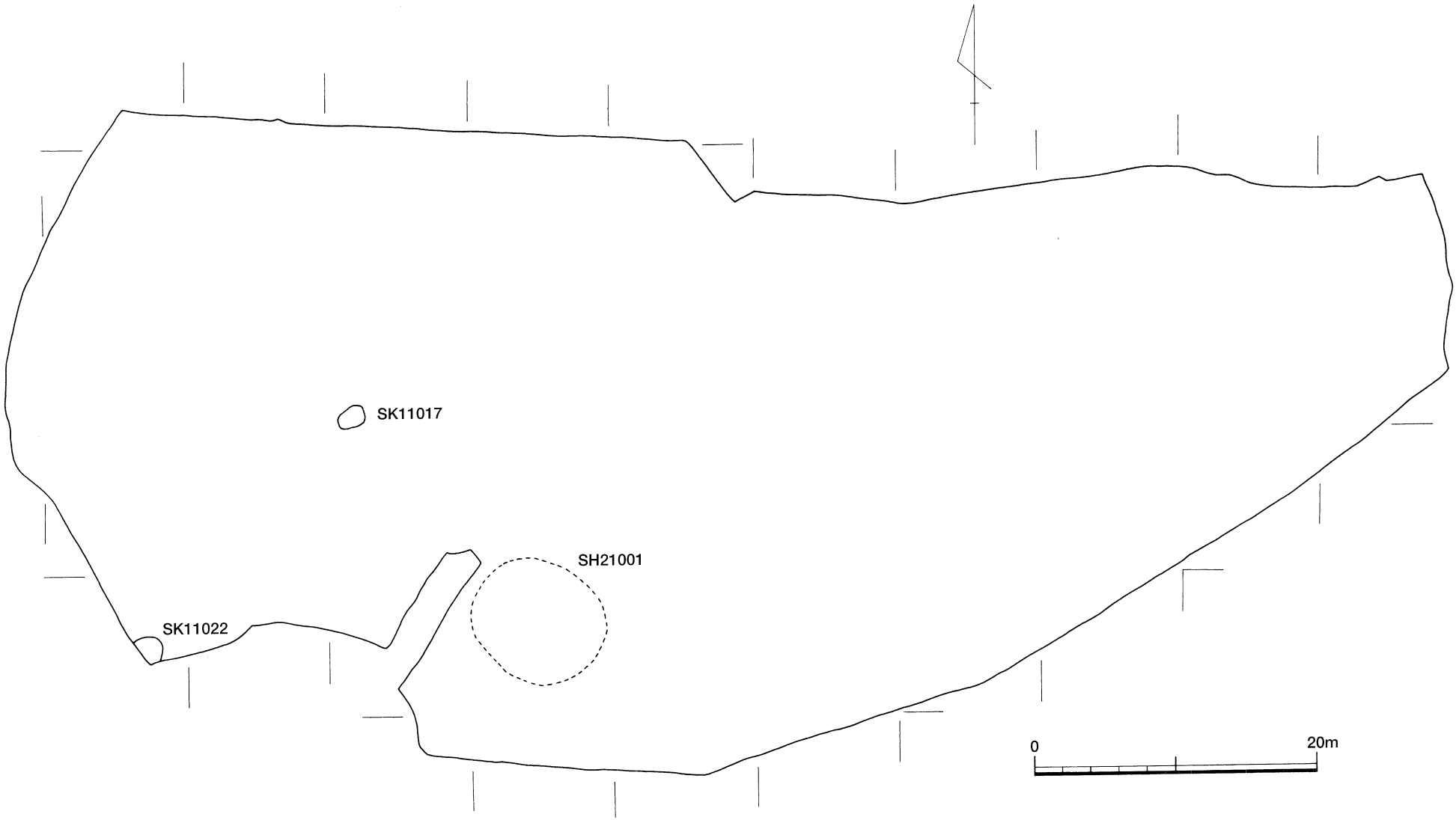
弥生時代以降は中世まで遺構・遺物が見られない。SD21001及びその延長のSD21017が土師器坏・椀，瓦器椀の出土から当該期の遺構と考えられる。なお，出土遺物は無いが，SD21001と同方位のSD11018も当該期と考えられる。溝以外の遺構は見られず，耕作域であったと考えられる。

第４期　近世以降（第72図）

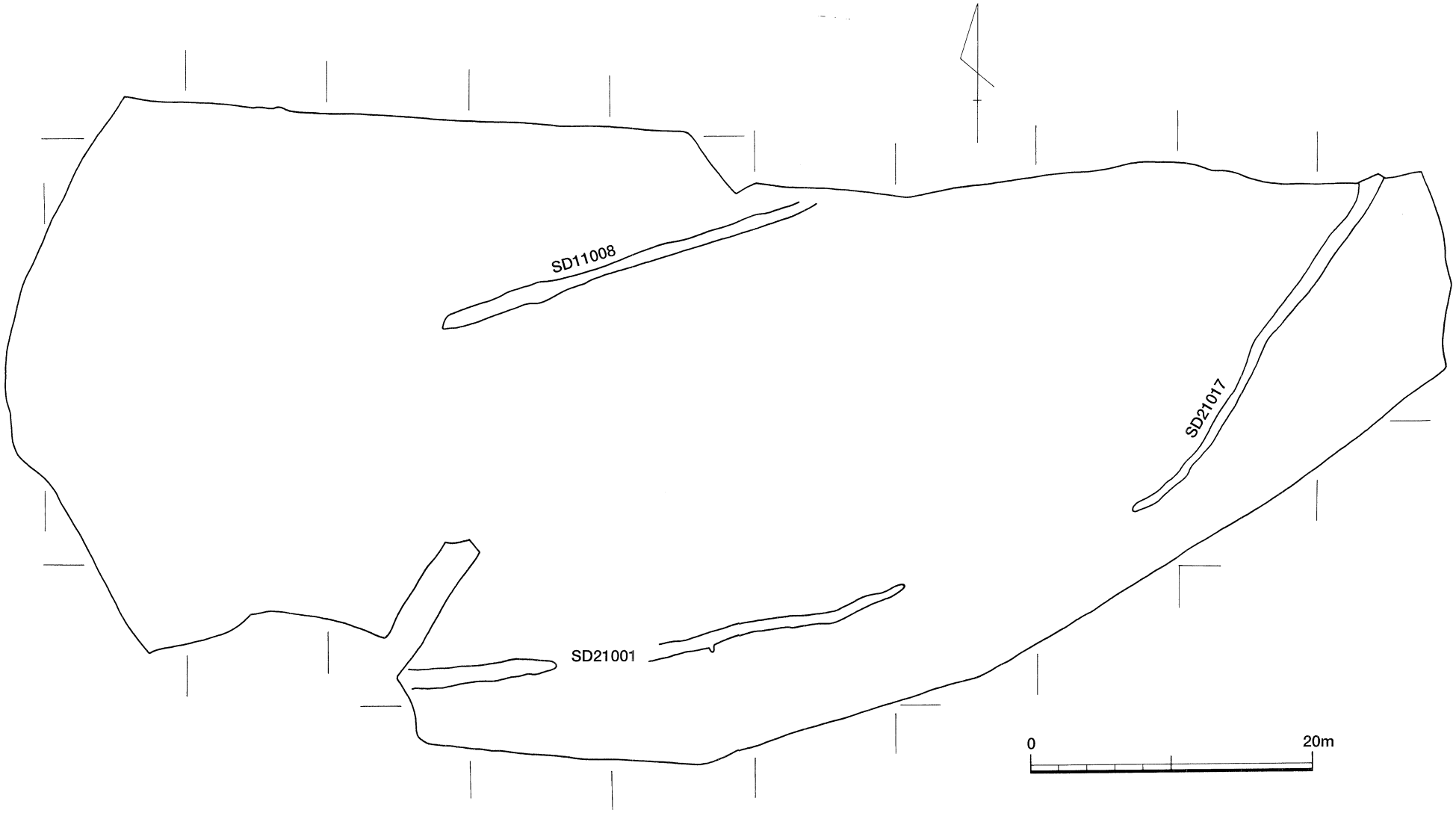
13世紀以降についても近世まで遺構・遺物は見られない。近世以降は遺跡内で最も遺構が多数見られる時期である。特に，同一方位を指向した溝を多数検出しており，中世の溝SD21001，SD21017，SD11018以外の溝は当該期のものと考えられる。また，掘立柱建物SB21001～SB21004，SK21031等の土坑や水溜用の遺構と考えられるSE11001などが見られる。近世以降の遺構については概ね３時期に細分できる。近世以降の遺構の中で最も古い遺構はSK21031で，出土遺物から18世紀前半頃と考えられる。次に，多数検出した同一方位の溝等が見られ，出土遺物から19世紀前半と考えられる。最も新しい遺構は調査区の南で検出したSD21008で，現有水路とほぼ同じ位置を流れ，幕末～明治の遺物を含んでいる。掘立柱建物については，溝との切り合いが無いため不明であるが，埋土や建物規模からSB21001とSB21002～SB21004に大別できる。このうち，SB21002の区画をなすようなSD21014とSD21019は耕作による溝SD21015を切っていることから，19世紀前半以降の遺構と考えられ，SD21008と前後する時期の遺構と考えられる。これに対し，SB21001は18世紀～19世紀の遺構とほぼ同じ埋土であることから，前半の２時期のいずれかの遺構と考えられる。



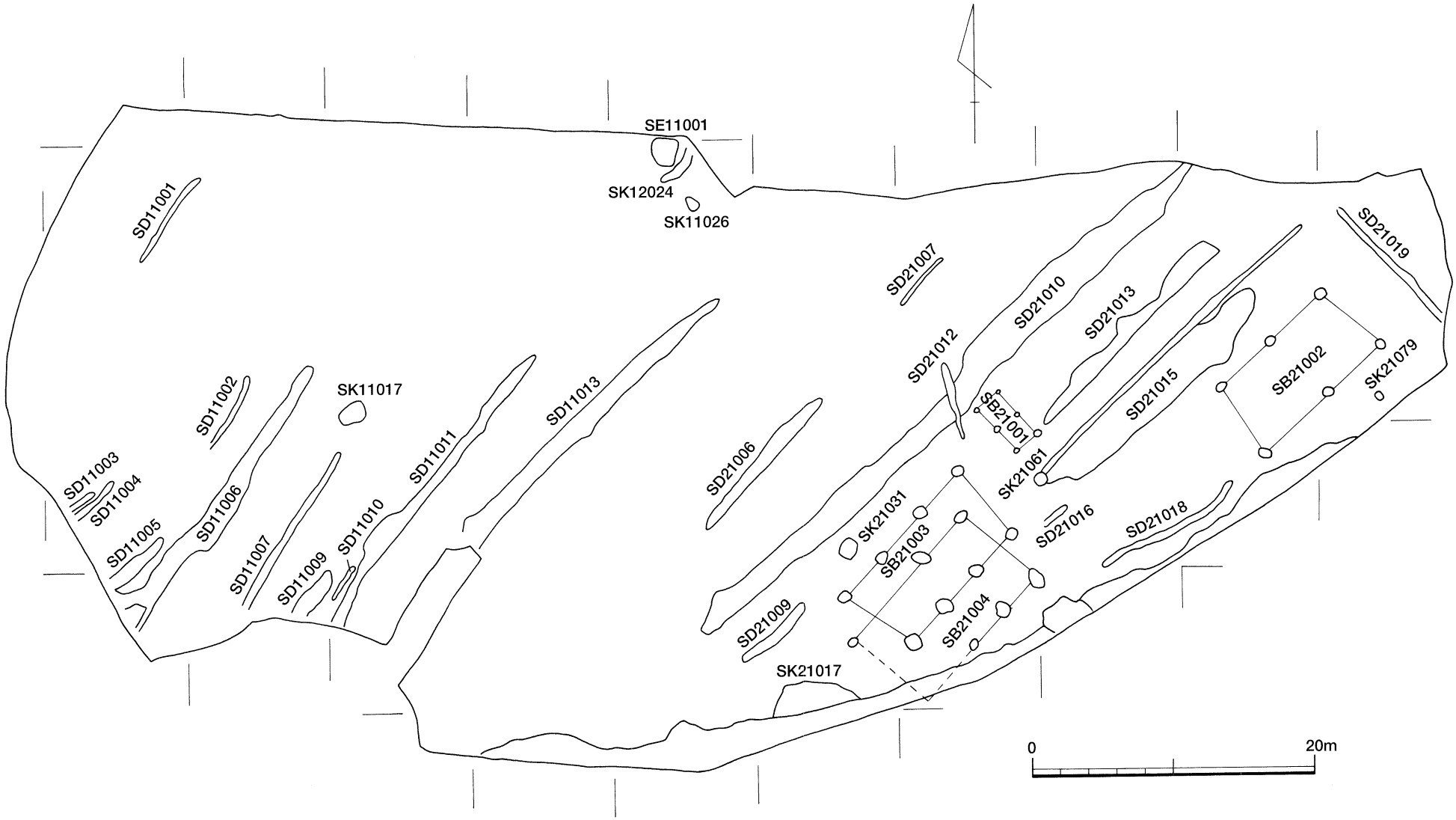
第 69 図　縄文時代後期の主要遺構



第 70 図　弥生時代後期の主要遺構



第 71 図　13 世紀の主要遺構



第 72 図　近世以降の主要遺構

附編　香川大学所蔵大空遺跡出土弥生土器の概要

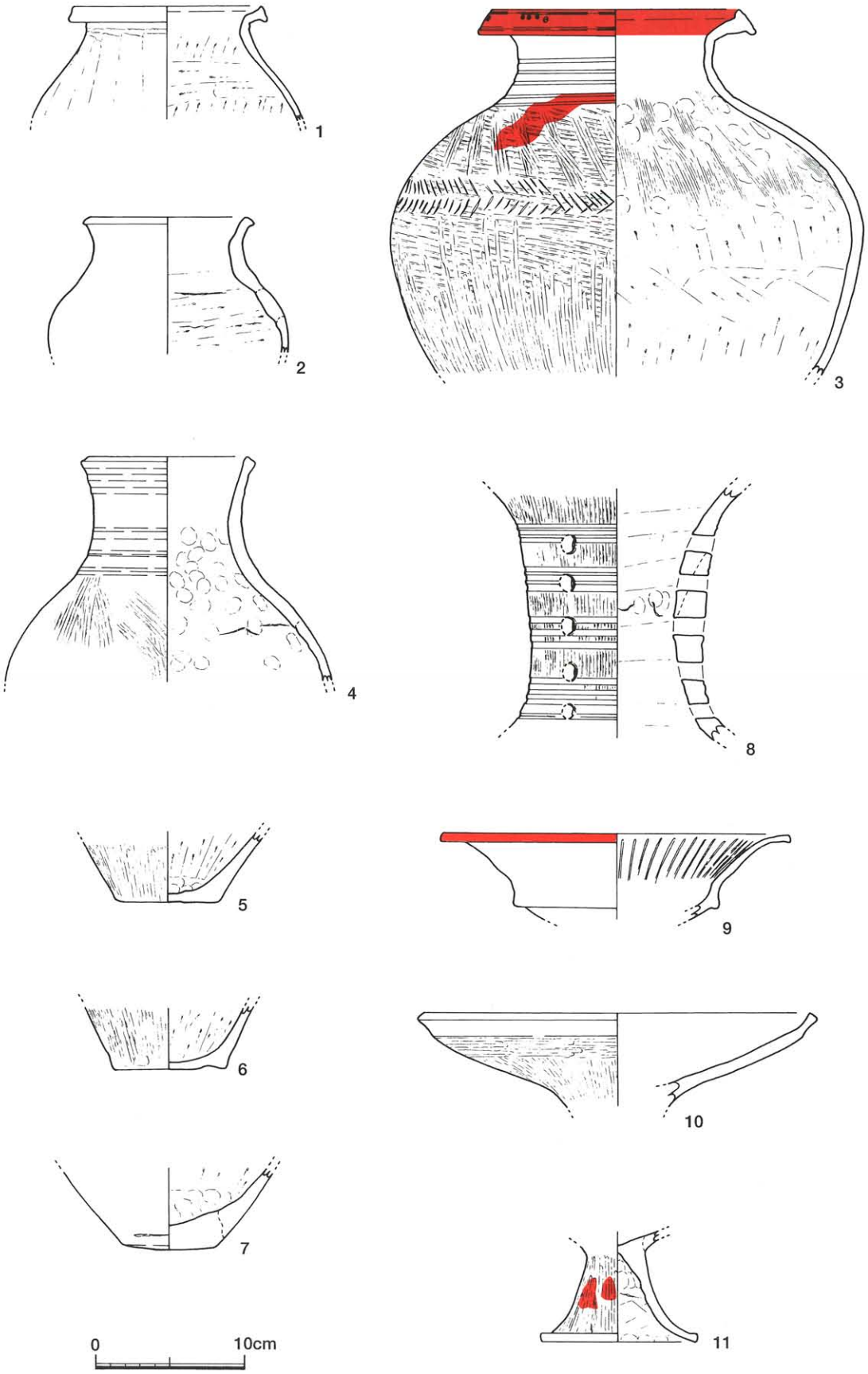
附編　香川大学所蔵大空遺跡出土弥生土器の概要

高松市東部運動公園（仮称）予定地の西南部に位置する大空遺跡は，昭和29年に地元小学生によって発見された遺跡で，その出土遺物は瀬戸内地域における弥生後期前半の標式土器として認知されており，高松市指定文化財になっている。当時の出土状況については，発掘者の小竹一郎氏によって報告（注1）されており，また，再実測図を掲載（注2）しているので，参照されたい。遺跡の現状は，運動公園整備に伴う試掘調査を実施したが，昭和50年代の花崗土採取によって丘陵部は失われ，ほぼ消滅してしまっている（注3）。わずかに，竪穴住居と考えられる遺構が，断面で確認（注4）されているに過ぎない。

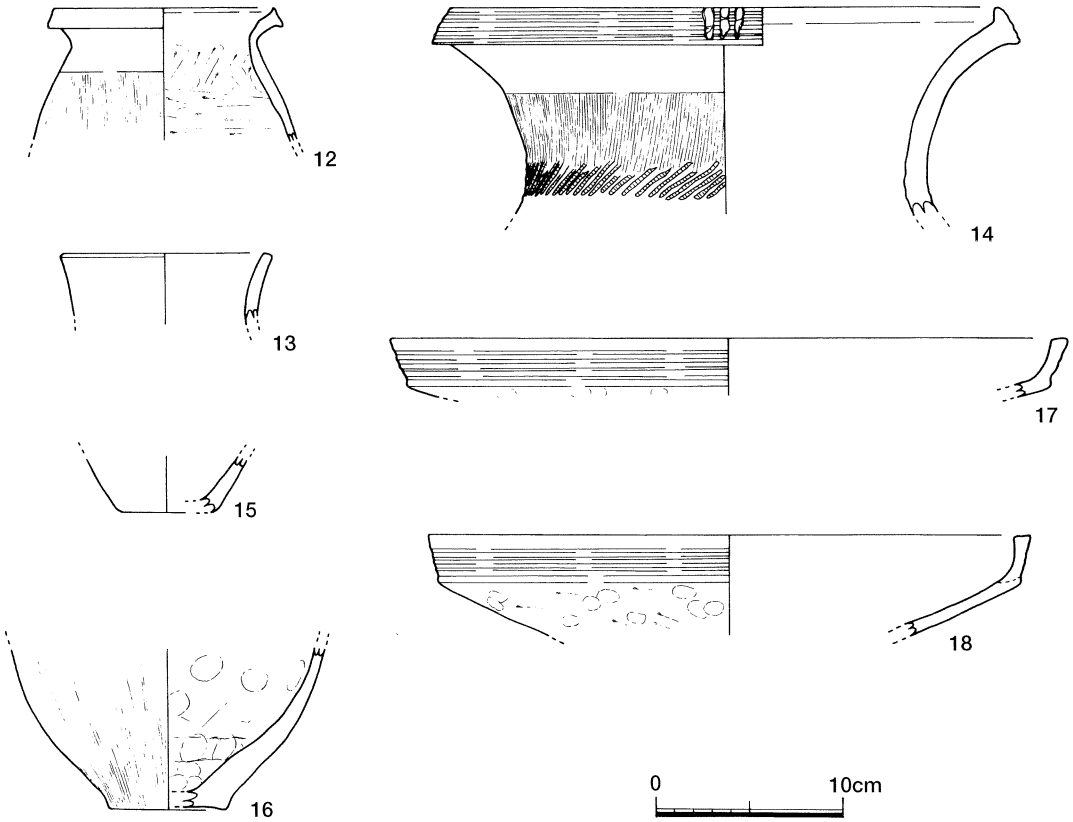
今回掲載した土器は，香川大学所蔵の遺物である。郷土資料室内の木箱の中で，1969（昭和44）年の新聞に包装された状態で保管されていた。なお，木箱の中には大空遺跡の解説文が入っていたことから大空遺跡出土遺物と断定した。土器にはT.S59.5.20とT.S59.5.24と注記されたものがある。「T.S」とは高松・すべり山（＝大空遺跡）の略号と考えられ，1959（昭和34）年5月20日及び24日に出土したものと判明した。なお，日付が異なる土器においても接合関係が多く認められることから，20日と24日の採取位置は離れていないものと考えられる。残念ながら，香川大学教授丹羽佑一氏の着任前から所蔵されていたもので，具体的な出土地や出土状況は不明とのことであった。また，同じ木箱の中に注記の無い弥生後期の土器片，土師質土器土鍋片，縄文土器片，古代の軒丸瓦が見られた。注記の無い弥生土器も注記のある土器と時期的な差が無いことから，大空遺跡出土遺物の可能性が高いと考えた。また，土師質土器土鍋や縄文土器については近接する小山・南谷遺跡（注5）でも出土を見ることから，大空遺跡の可能性が考えられる。しかしながら，古代の軒丸瓦については，小山・南谷遺跡における出土も無く，周辺に瓦窯や古代寺院の存在は知られておらず，大空遺跡出土遺物の包装に使用された新聞と異なる新聞で包装されていたことから，別遺跡のものと考えられる。

今回は，このうち弥生土器のみを掲載した。第73図1～11は注記があるものである。1は甕である。口縁部を上下に拡張させ，端面はナデによりややくぼむ。外面はタテハケ状の板ナデ，内面はタテヘラケズリのちヨコヘラケズリである。2は短頸壺である。丸みを持った体部に短く直立する口縁部がつき，口縁端部は外方へ拡張させている。外面はナデ，内面はヨコヘラケズリである。3は広口壺である。肩が大きく張り出す体部で，短く直立する頸部から口縁部は外方へ開く。口縁端部は上下に拡張させ，凹線3条を巡らせ，その後竹管文を施している。頸部外面には沈線4条，体部最大径部分には列点文が2列施されている。外面はタタキのち上半粗いタテハケ，下半タテヘラミガキである。上半の粗いタテハケはやや間隔を開けて施されており，文様として見せる意図があったと考えられる。内面はタテヘラケズリのち指頭圧で，上半のみさらにタテハケにより器壁が整えられている。口縁部の上面及び外面，頸部下半から体部最大径付近にかけて赤色顔料の痕跡が認められる。4は直口壺である。直立する頸部を持ち，頸部の上部と下部でそれぞれ3条の凹線が施されている。内面は指頭圧，外面は粗いタテハケである。5～7は底部である。5は外面タテヘラミガキ，内面指頭圧のちタテヘラケズリである。6は外面指頭圧のち粗いタテハケ，内面タテヘラケズリである。7は外面ナデ，内面指頭圧である。8は器台である。受部と裾部を欠き，直立した筒部しか残存していない。外面は粗いタテハケ，内面は指頭圧のち板ナデである。外面には3条の沈線が4箇所に施され，残存部の最下段において凹線が1条施されている。また，縦に5個並んだ円形スカシが3方に復元できる。9は高杯である。長い口縁部は外反し，端部はやや垂下気味である。内外面ともナデで，内面には放射状に暗文が施されている。口縁端部には赤色顔料が塗布されている。10は高杯である。浅い皿状の坏部からわずかに屈曲させた口縁部がつく。坏部の中心部は円盤充填技法による接合面で剥離している。外面はタテヘラミガキのち上半ヨコヘラミガキ，内面はマメツである。11は高杯の脚部である。脚高は低く，裾部もあまり広がらない。外面はタテハケのちタテヘラミガキ，内面は指頭圧のち板ナデである。外面にはマメツが著しいが，赤色顔料の痕跡がわずかに残る。

第74図12～18は注記の無いものである。12は甕である。口縁部を上下に拡張させ，端面はナデによりややくぼむ。外面は板ナデ状のタテハケ，内面はタテヘラケズリのちヨコヘラケズリのち指頭圧である。13は直口壺である。口縁部の細片のみで，内外面ともマメツである。14は広口壺である。外反する口縁部は端部を上下に拡張させ，端面に凹線4条を巡らせ，さらに棒状浮文3個1対を施している。また，頸部外面にはハケ原体による刺突文が施されている。外面はタテハケ，内面は指頭圧である。15・16は底部である。15は細片で，内外面ともマメツである。16は外面粗いタテハケ，内面指頭圧のち板ナデである。17・18は高杯である。ほぼ同形態の高杯で，浅い坏部から短く直立する口縁部がつく。両者とも口縁部外面には3条の凹線が施されている。17は外面指頭圧，内面ナデ，18は外面ヨコヘラケズリのち指頭圧，内面ナデである。



第 73 図　香川大学所蔵大空遺跡出土遺物実測図①



第 74 図　香川大学所蔵大空遺跡出土遺物実測図②

昭和 29 年出土土器は，土坑一括資料と考えられ，製塩土器・器台の出土が目立ったが，今回の資料においては器台 1 点，製塩土器 0 点と少なく，器種構成の点で異なっている。しかし，高杯等に見られる赤色顔料の塗布などには共通点も見出せる。時期的には概ね弥生後期初頭に位置づけられると考えられ，これまでの出土土器とほぼ同傾向であるが，9 の高坏は口縁部が長く深いものであり，やや後出するものと考えられる。いずれにせよ遺跡が消滅しており，今後資料増加が望まれない中，重要な資料といえる。

注

1. 小竹一郎 1955『高松市高松町すべり山出土弥生式遺物報告書』
2. 大嶋和則 1996「大空遺跡出土弥生式土器の概要」『高松市歴史資料館収蔵資料目録～考古資料～』高松市歴史資料館
3. 大嶋和則 1999『高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第 1 冊 奥の坊遺跡群 I』高松市教育委員会
4. 大嶋和則 1997「大空遺跡の竪穴住居と表採資料について」『香川考古 第 6 号』香川考古刊行会
5. 片桐孝浩 1997『県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 小山・南谷遺跡 I』(財) 香川県埋蔵文化財調査センター

観　察　表

大空北遺跡出土遺物観察表

土器観察表

番号	器種	図版	遺構名	法量(cm)			外面	内面	色調 (上＝外面，下＝内面)	胎土	焼成
				口径	底径	器高					
1	弥生土器 甕	16	SD12017	13.2		(2.2)	ナデ	ナデ	5YR6/4 にぶい橙 5YR7/3 にぶい橙	やや密 3mm以下の石英・長石含む	良
2	弥生土器 底部	16	SD12017		6.2	(2.4)	ナデ	ナデ	10YR6/2 灰黄褐 10YR6/2 灰黄褐	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良
3	弥生土器 無頸壺	17	SK12002	11.6		(5.3)	タテハケ 櫛描直線文，櫛描波状文	タテヘラミガキ	2.5Y8/2 灰白 10YR7/2 にぶい黄橙	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良好
4	瓦質土器 釜	18	SK11001	16.0		(8.7)	指頭圧 接合痕，煤付着	ヨコハケ	N5/0 灰 7.5Y5/1 灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
5	肥前系磁器 碗	22	SD21001			(2.1)	施釉	施釉 圏線2条	7.5GY8/1 明緑灰 7.5GY8/1 明緑灰	精良	良好

石器観察表

番号	器種	図版	遺構名	法量(cm)			重量(g)	石材	特　　徴
				長	幅	厚			
S1	削器	5	Ⅰ区南壁	5.2	6.7	0.8	37.7	サヌカイト	刃部は片面調整。側縁部・背部は未調整。
S2	削器	17	SK12002	1.9	4.2	0.5	3.3	サヌカイト	刃部は未調整。背部のみ敲打。
S3	削器	17	SK12002	3.3	5.6	1.0	14.0	サヌカイト	背部に自然面を残す。刃部は未調整。
S4	磨石	23	SD21002	5.8	8.0	4.6	231.7	砂岩	上面は平坦面。

奥の坊奥池西遺跡出土遺物観察表

土器観察表

番号	器種	図版	遺構名	法量(cm) 口径	底径	器高	外面	内面	色調 (上＝外面，下＝内面)	胎土	焼成
1	縄文土器 深鉢	30	遺構面直上			(2.9)	縄文	ナデ	10YR5/2 灰黄褐 10YR5/2 灰黄褐	やや粗 1mm以下の石英・長石・角閃石含む	良
2	縄文土器 深鉢	40	SD11006			(3.7)	ナデ 沈線2条	ナデ	7.5YR3/1 黒褐 7.5YR3/1 黒褐	粗 3mm以下の石英・長石含む	良
3	縄文土器 深鉢	40	SD11006			(3.5)	縄文	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙 10YR5/2 灰黄褐	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良好
4	縄文土器 深鉢	40	SD11006			(3.4)	縄文	ナデ	2.5Y8/3 淡黄 2.5Y7/3 浅黄	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良好
5	京信楽系陶器 皿	41	SD11013	14.4		(1.8)	施釉	施釉 圏線1条	10Y8/1 灰白 10Y8/1 灰白	精良	良好
6	瀬戸美濃系磁器 盃	41	SD11013	8.2		(2.0)	施釉 染付	施釉 染付	10Y8/1 灰白 10Y8/1 灰白	精良	良好
7	瓦器	43	SD21001	15.0		(3.1)	マメツ	マメツ	10YR6/2 灰黄褐 2.5Y6/2 灰黄	密 1mm以下の石英・長石含む	良
8	弥生土器 底部	43	SD21001		7.0	(3.3)	マメツ	ヨコヘラケズリ	10YR7/1 灰白 7.5YR6/3 にぶい褐	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良好
9	縄文土器 深鉢	44	SD21002			(3.2)	縄文	ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐 10YR6/4 にぶい黄橙	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良
10	弥生土器 製塩土器	47	SD21008		6.0	(3.5)	タテヘラケズリ	ナデ 接合痕	10YR4/2 灰黄褐 10YR4/2 灰黄褐	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良好
11	須恵器 底部	47	SD21008		7.7	(2.3)	ナデ	回転ナデ	N6/0 灰 N6/0 灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
12	土師器 坏	47	SD21008	14.8	6.6	3.4	マメツ ヘラ切り	マメツ	5YR7/3 にぶい橙 2.5Y8/3 淡黄	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良
13	土師器 坏	47	SD21008		7.0	(1.3)	マメツ	マメツ	10YR8/3 浅黄橙 10YR8/3 浅黄橙	密 1mm以下の石英・長石含む	良
14	土師質土器 甕	47	SD21008		31.7	(3.5)	ナデ	ナデ	10YR5/4 にぶい黄褐 10YR6/6 明赤褐	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
15	土師質土器 甕	47	SD21008		31.4	(6.6)	タテハケ	粗いヨコハケ後板ナデ	10YR5/4 にぶい黄褐 10YR5/3 にぶい黄褐	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母含む	良好
16	土師質土器 擂鉢	47	SD21008		15.8	(4.6)	指頭圧	指頭圧 擂目	7.5YR7/6 橙 7.5YR8/3 浅黄橙	密 3mm以下の石英・長石含む	良好
17	土師質土器 鉢	47	SD21008	19.0		(5.2)	板状工具の圧痕	ナデ	2.5YR5/8 明赤褐 2.5YR5/6 明赤褐	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
18	土師質土器 鉢	47	SD21008	24.7		(8.8)	ナデ	指頭圧	5YR4/8 赤褐 2.5YR5/8 明赤褐	やや粗 3mm以下の石英・長石・角閃石・雲母含む	良好
19	土師質土器 焙烙	47	SD21008	27.5		(2.8)	マメツ	ヨコハケ	10YR4/1 褐灰 10YR5/2 灰黄褐	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
20	土師質土器 焙烙	47	SD21008	32.8		(3.6)	指頭圧	ナデ	2.5Y5/1 黄灰 2.5Y7/2 灰黄	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
21	土師質土器 焙烙	47	SD21008	34.6		(4.5)	ナデ	ナデ	7.5YR3/1 黒褐 7.5YR2/1 黒	密 1mm以下の石英・長石含む	良
22	土師質土器 焙烙	47	SD21008	38.0		(2.0)	指頭圧	ナデ	10YR3/1 黒褐 2.5Y4/1 黄灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
23	土師質土器 焙烙	47	SD21008	46.0		(3.2)	指頭圧	ナデ	10YR4/1 褐灰 10YR4/2 灰黄褐	密 1mm以下の石英・長石含む	良
24	肥前系磁器 碗	48	SD21008	10.0		(4.0)	施釉 二重網目	施釉	7.5GY8/1 明緑灰 7.5GY8/1 明緑灰	精良	良好
25	肥前系陶器 碗	48	SD21008	10.8		(2.3)	施釉 染付	施釉 染付	7.5Y6/1 灰 5Y7/1 灰	精良	良好
26	肥前系磁器 瓶	48	SD21008		4.9	(3.0)	施釉	無釉	7.5GY7/1 明緑灰 2.5GY8/1 灰白	精良	良好
27	京信楽系陶器 灯明皿	48	SD21008	10.0	3.8	1.9	無釉	施釉	7.5YR8/4 浅黄橙 2.5Y7/2 灰黄	精良	良好
28	肥前系陶器 碗	48	SD21008	13.8		(3.9)	施釉	施釉	7.5Y6/2 灰オリーブ 7.5Y6/2 灰オリーブ	精良	良好
29	大谷焼陶器 甕	48	SD21008		8.4	(5.1)	鉄釉	無釉	5YR2/4 極暗赤褐 2.5YR4/6 赤褐	精良	良好
30	肥前系陶器 鉢	48	SD21008		9.2	(4.7)	高台無釉	施釉 刷毛目	7.5GY7/1 明緑灰 2.5GY8/1 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
31	明石焼陶器 擂鉢	48	SD21008	17.8	7.6	5.4	回転ヘラケズリ後ヨコナデ 溶着痕	ナデ 擂目	2.5YR4/8 赤褐 7.5YR3/3 暗褐	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良好
32	備前焼陶器 擂鉢	48	SD21008	21.2		(2.8)	ナデ 重ね焼き痕	ナデ 擂目	5Y6/1 灰 5Y6/2 灰オリーブ	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
33	堺焼陶器 擂鉢	48	SD21008	23.6		(5.3)	回転ヘラケズリ	ナデ 擂目	5YR5/4 にぶい赤褐 7.5YR5/4 にぶい褐	やや密 3mm以下の石英・長石含む	良好
34	堺焼陶器 擂鉢	48	SD21008	24.4		(5.3)	回転ヘラケズリ	ナデ 擂目	5YR4/3 にぶい赤褐 7.5YR5/3 にぶい褐	やや密 3mm以下の石英・長石含む	良好
35	堺焼陶器 擂鉢	48	SD21008	28.2		(4.4)	ナデ	ナデ 擂目	2.5YR5/6 明赤褐 5YR5/4 にぶい赤褐	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
36	堺焼陶器 擂鉢	48	SD21008	34.6		(10.8)	回転ヘラケズリ後ヨコナデ	ナデ	7.5YR4/6 褐 7.5YR5/6 明褐	やや粗 1mm以下の石英・長石含む	良好
37	土師質 平瓦	48	SD21008				指頭圧	板ナデ 波状文，鉄釘	7.5YR5/4 にぶい褐 7.5YR5/4 にぶい褐	粗 5mm以下の石英・長石・角閃石・雲母含む	良好
38	土師質土器 土瓶	49	SD21010			(7.8)	ナデ	ナデ	2.5Y6/3 にぶい黄 2.5Y6/3 にぶい黄	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良
39	肥前系磁器 皿	49	SD21010	13.0		(1.7)	施釉	施釉	5Y8/1 灰白 5Y8/1 灰白	精良	良好
40	縄文土器 底部	49	SD21010		9.6	(1.8)	ナデ 沈線1条	ナデ	10YR5/3 にぶい黄褐 10YR6/3 にぶい黄橙	やや粗 3mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
41	肥前系磁器 鉢	50	SD21013	12.0		(3.0)	青磁釉	無釉	5G7/1 明緑灰 10Y8/1 灰白	精良	良好
42	弥生土器 底部	51	SD21015		6.0	(3.3)	ナデ	ナデ	5YR7/4 にぶい橙 5YR7/4 にぶい橙	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良好

43	弥生土器 底部	51	SD21015		4.2	(3.5)	板状工具の圧痕	板ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙 5YR6/4 にぶい橙	やや密 2mm以下の石英・長石・角閃石・雲母含む	良好
44	黒色土器	52	SD21017	15.8	6.8	5.4	マメツ	マメツ	5Y4/1 灰 5Y4/1 灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良
45	黒色土器	52	SD21017	15.0	5.0	5.0	指頭圧	マメツ	2.5Y7/1 灰白 N6/0 灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良
46	土師器 坏	52	SD21017	17.0		(1.8)	ナデ	ナデ	10YR8/2 灰白 10YR8/2 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
47	土師器 坏	52	SD21017	14.8	8.8	3.4	マメツ	マメツ	7.5YR5/4 にぶい褐 10YR5/3 にぶい黄褐	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良
48	縄文土器 底部	58	SK11013		8.0	(1.9)	ナデ	ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙 10YR7/4 にぶい黄橙	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良
49	弥生土器 甕	59	SK11017	15.0		(3.6)	マメツ	マメツ	2.5Y7/2 灰黄 2.5Y7/2 灰黄	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良好
50	瀬戸美濃系陶器 鉢	61	SK11024			(3.3)	施釉	施釉	2.5Y8/2 灰白 2.5Y8/2 灰白	精良	良好
51	肥前系磁器 碗	62	SK11026			(2.5)	施釉 染付	施釉 圏線2条	10GY8/1 明緑灰 10GY8/1 明緑灰	精良	良好
52	縄文土器 深鉢	64	SK21010			(4.0)	ナデ 沈線2条	ナデ	7.5YR6/3 にぶい褐 2.5Y6/2 灰黄	やや粗 1mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
53	土師質土器 焙烙	66	SK21031	36.6	5.8	11.5	指頭圧	ヨコハケ	10YR4/2 灰黄褐 10YR6/3 にぶい黄橙	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良
54	肥前系磁器 碗	66	SK21031	10.2	4.4	6.0	施釉 草花文，圏線3条，太明年製	施釉	10Y8/1 灰白 10Y8/1 灰白	精良	良好

鉄器観察表

番号	器種	図版	遺構名	法量(cm)			特　　徴
				長	幅	厚	
K1	釘	39	SB21003	3.7	1.4	1.0	断面方形。
K2	釘	39	SB21003	10.0	1.4	1.7	断面方形。
K3	釘	69	SK21079	3.6	1.0	0.7	断面方形。
K4	釘	69	SK21079	3.1	1.0	0.7	断面方形。

石器観察表

番号	器種	図版	遺構名	法量(cm)			重量(g)	石材	特　　徴
				長	幅	厚			
S1	石庖丁	31	遺構面直上	3.6	6.9	0.9	27.1	サヌカイト	側縁部に切断面を残す。刃部は片面調整。
S2	石鏃	42	SD11013	2.0	1.3	0.3	0.8	サヌカイト	平基式。両面より調整。
S3	削器	46	SD21006	3.1	2.8	0.6	7.6	サヌカイト	両側面とも切断面を残す。背部は敲打。
S4	削器	50	SD21010	1.7	2.8	0.6	2.5	サヌカイト	刃部のみ残る。両面より調整。

大空遺跡出土遺物観察表

土器観察表

番号	器種	図版	法量(cm) 口径	底径	器高	外面	内面	色調 (上＝外面，下＝内面)	胎土	焼成
1	弥生土器 甕	73	12.4		(7.5)	板ナデ	タテヘラケズリのちヨコヘラケズリ	5YR6/4 にぶい褐 5YR5/4 にぶい褐	やや蜜 1mm以下の石英・長石・雲母含む	良好
2	弥生土器 短頸壺	73	10.2		(9.2)	ナデ	ヨコヘラケズリ 接合痕	10YR7/4 にぶい黄橙 7.5YR7/4 にぶい橙	やや粗 2mm以下の石英・長石含む	良好
3	弥生土器 広口壺	73	16.3		(24.3)	粗いタテハケ 凹線3条2段	指頭圧 接合痕	7.5YR5/4 にぶい褐 7.5YR5/4 にぶい褐	やや蜜 2mm以下の石英・長石・雲母含む	良好
4	弥生土器 直口壺	73	10.4		(15.0)	タタキのちタテハケ，タテヘラミガキ 凹線2条，竹管文，沈線5条，列点文，赤色塗彩	タテヘラケズリのち指頭圧のちタテハケ	7.5YR5/4 にぶい褐 7.5YR5/4 にぶい褐	やや蜜 2mm以下の石英・長石・雲母・角閃石含む	良好
5	弥生土器 底部	73		6.9	(4.8)	タテヘラミガキ	指頭圧のちタテヘラケズリ	5YR6/4 にぶい褐 10YR7/4 にぶい黄橙	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良好
6	弥生土器 底部	73		7.2	(4.2)	指頭圧のち粗いタテハケ	タテヘラケズリ	7.5YR5/4 にぶい褐 5YR5/4 にぶい赤褐	やや蜜 2mm以下の石英・長石・雲母含む	良好
7	弥生土器 底部	73		6.2	(5.5)	ナデ 接合痕	指頭圧のちタテヘラケズリ	10YR6/4 にぶい黄橙 10YR7/4 にぶい黄橙	やや蜜 2mm以下の石英長石含む	良好
8	弥生土器 器台	73			(16.8)	粗いタテハケ 沈線3条4段，凹線1条，円形スカシ5個3方	指頭圧のち板ナデ 接合痕	2.5YR6/6 橙 2.5YR5/6 明赤褐	やや蜜 3mm以下の石英・長石含む	良好
9	弥生土器 高杯	73	23.0		(5.7)	ナデ 赤色塗彩	ナデ 暗文	10YR6/4 にぶい黄橙 10YR6/4 にぶい黄橙	やや蜜 1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母含む	良好
10	弥生土器 高杯	73	25.8		(6.3)	タテヘラミガキのちヨコヘラミガキ	ナデ	5YR6/6 橙 2.5YR5/6 明赤褐	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良好
11	弥生土器 高杯	73		10.3	(7.4)	タテハケのちタテヘラミガキ 赤色塗彩	タテヘラミガキ，指頭圧のち板ナデ	10YR5/3 にぶい黄褐 5YR5/4 にぶい赤褐	やや蜜 1mm以下の石英・長石含む	良好
12	弥生土器 甕	74	11.7		7.1	タテハケ	タテのちヨコヘラケズリのち指頭圧	7.5YR4/3 にぶい褐 10YR7/3 にぶい黄橙	やや蜜 1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母含む	良好
13	弥生土器 直口壺	74	10.8		(3.9)	マメツ	マメツ	7.5YR5/4 にぶい褐 7.5YR5/4 にぶい褐	やや蜜 1mm以下の石英・長石含む	良好
14	弥生土器 広口壺	74	29.0		(11.0)	タテハケ 凹線4条，棒状浮文，刺突文	ナデ	5YR5/6 明赤褐 10YR6/2 灰黄褐	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良好
15	弥生土器 底部	74		5.0	(3.7)	マメツ	マメツ	10YR7/4 にぶい黄橙 10YR5/4 にぶい黄褐	やや粗 2mm以下の石英・長石含む	良好
16	弥生土器 底部	74		6.2	(8.6)	タテハケ	指頭圧のち板ナデ 接合痕	10YR7/4 にぶい黄橙 10YR7/3 にぶい黄橙	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良好
17	弥生土器 高杯	74	35.8		(3.0)	指頭圧 凹線4条	ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐 7.5YR5/4 にぶい褐	やや粗 2mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
18	弥生土器 高杯	74	31.8		(5.3)	ヨコヘラケズリのち指頭圧 凹線4条	ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐 7.5YR5/4 にぶい褐	やや粗 2mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好

写 真 図 版

写真１　大空北遺跡全景（南から）

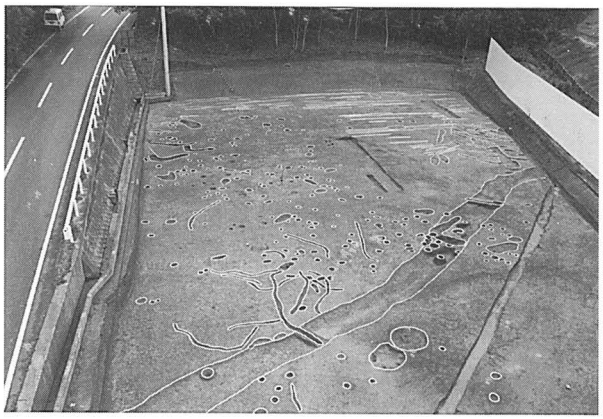


写真２　Ⅰ区完掘状況（西から）

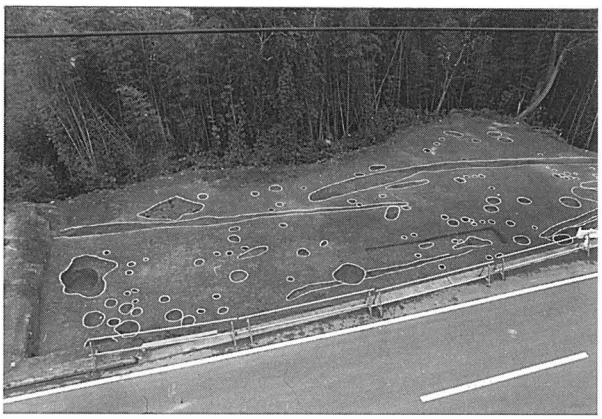


写真３　Ⅱ区完掘状況（南から）

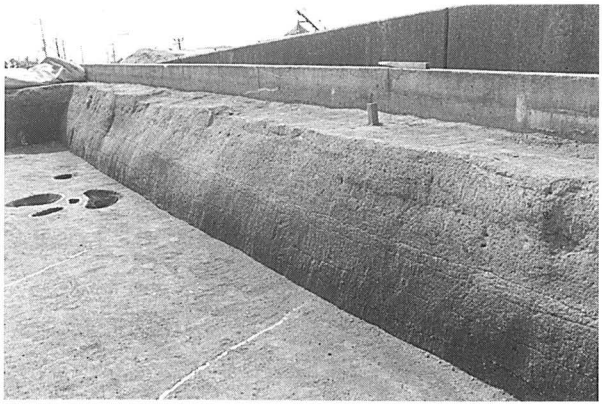


写真４　Ⅰ区北壁土層（南東から）

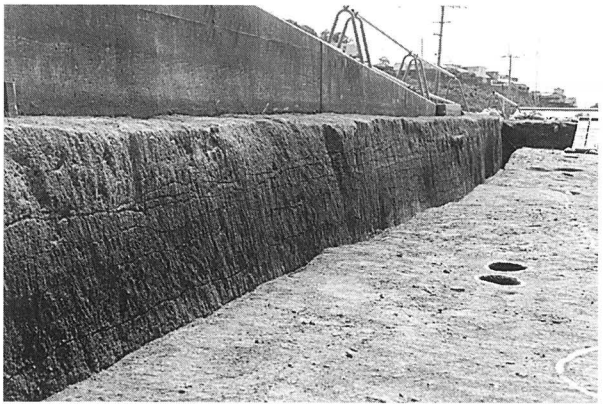


写真５　Ⅱ区南壁土層（北東から）

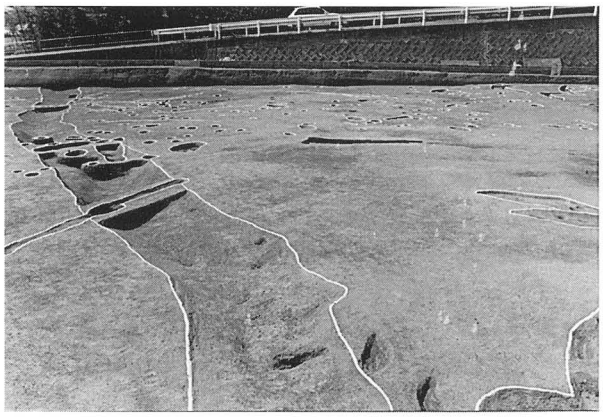


写真 6　SD21017 完掘状況（南東から）

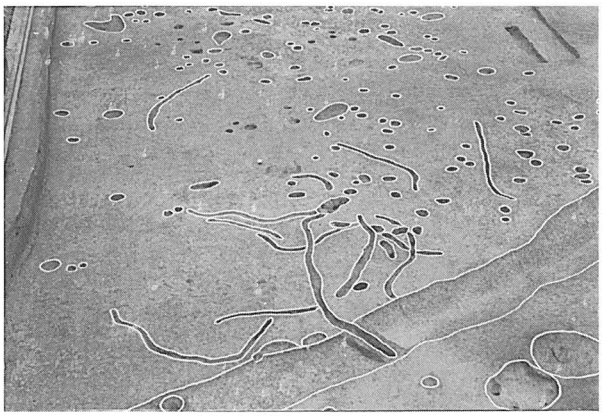


写真 7　竪穴住居群（西から）

写真 8　近世鋤溝群（南東から）

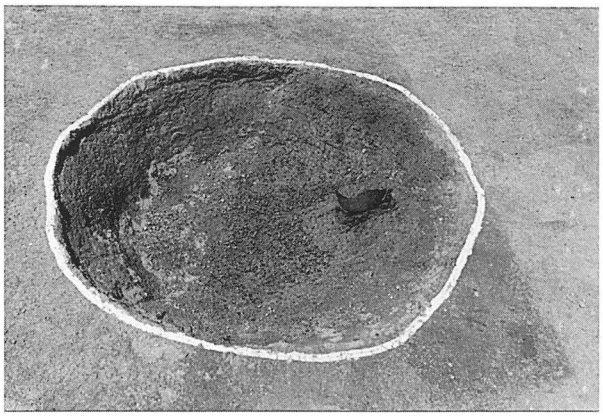


写真 9　SK11001 完掘状況（南から）

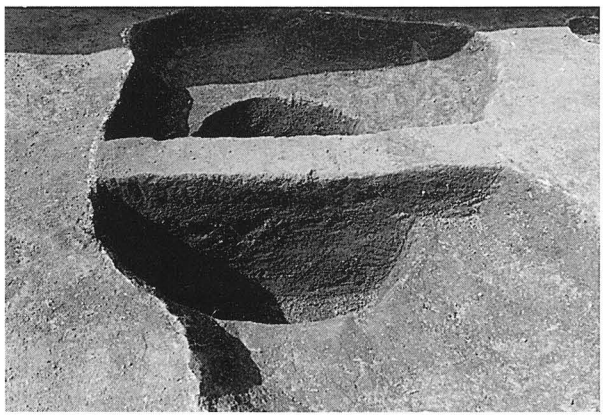


写真 10　SK21001 断面（南から）

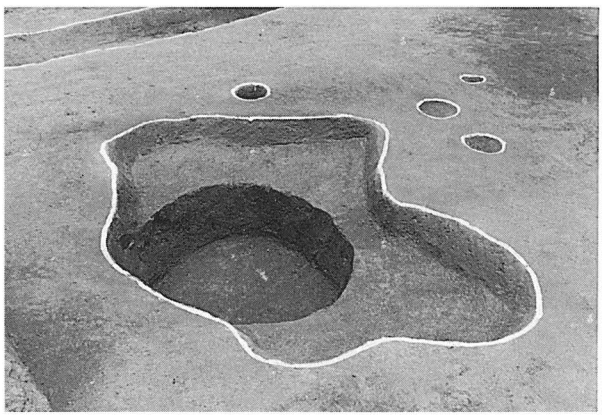
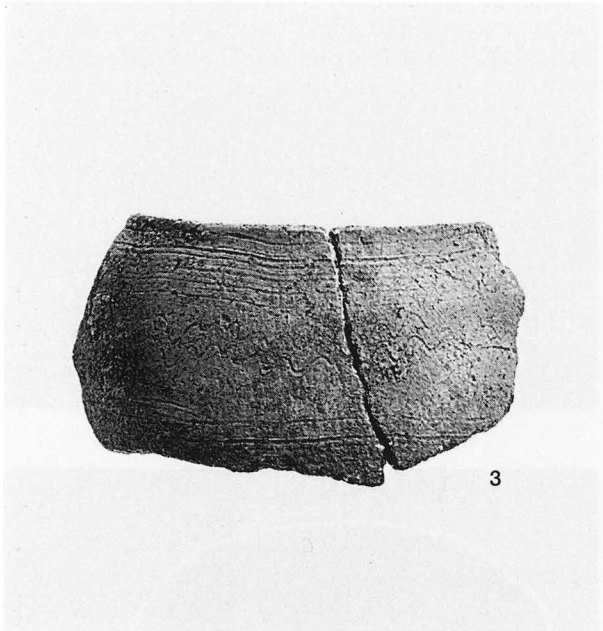
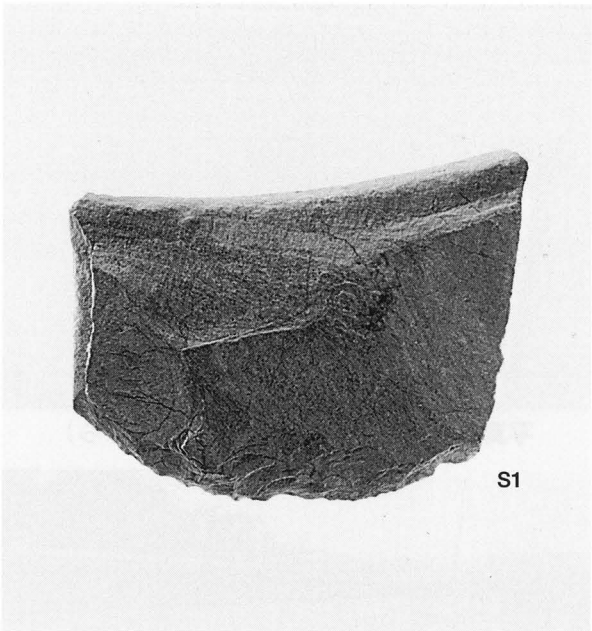


写真 11　SK21001 完掘状況（南から）

写真 12　SD21001 完掘状況（西から）

写真 13　作業風景





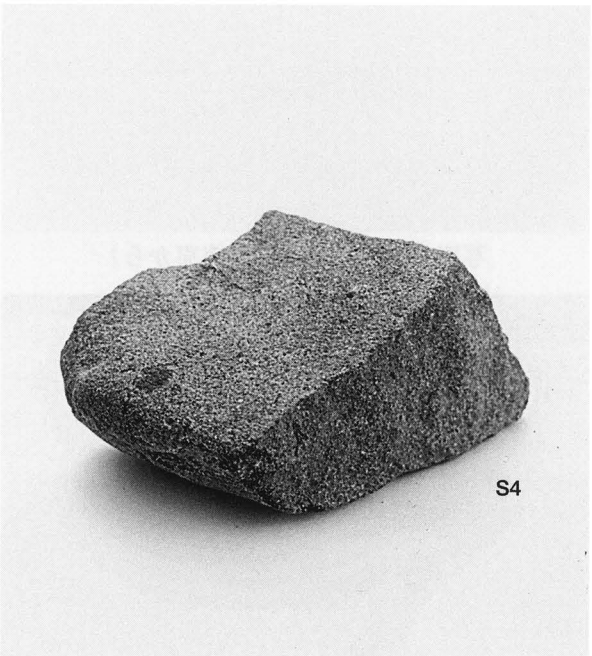


写真 14　大空北遺跡出土遺物

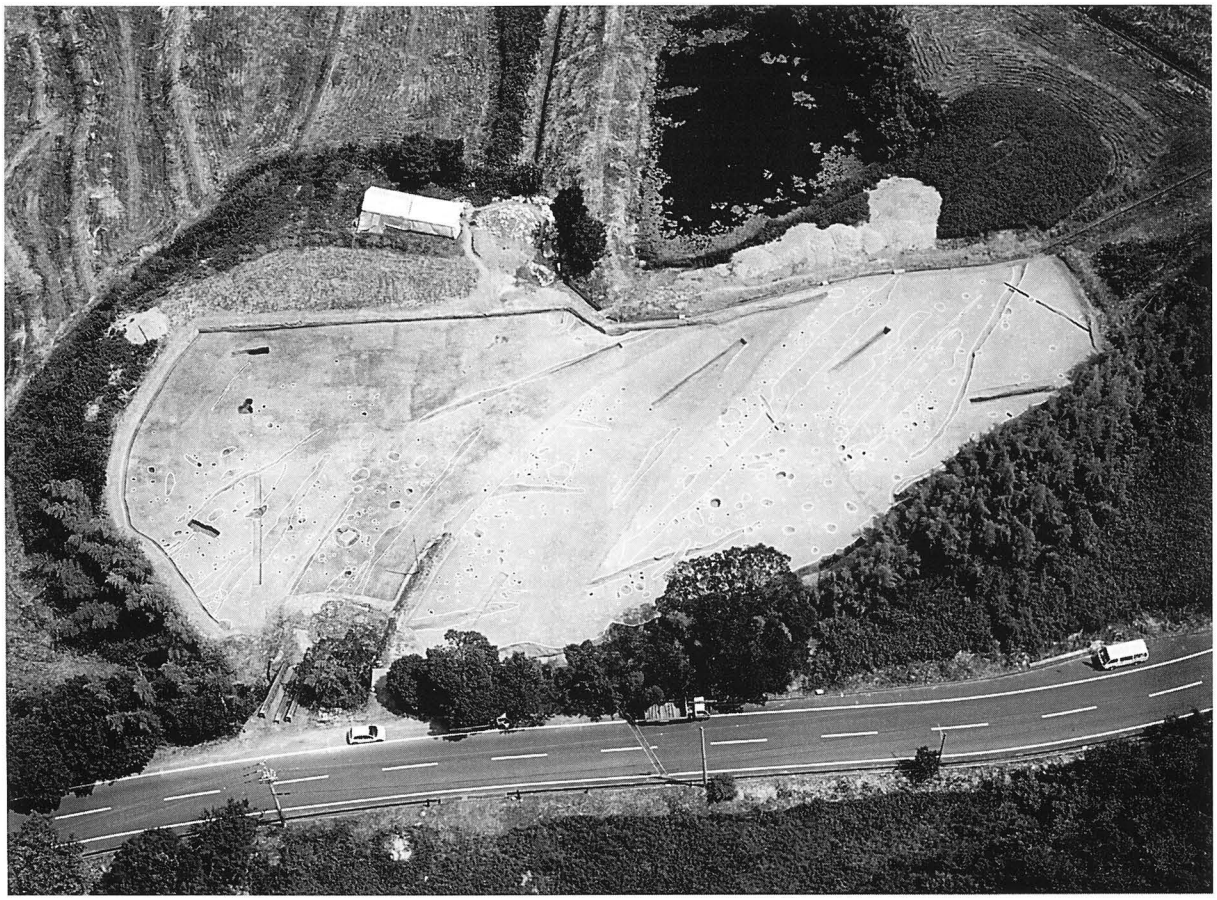


写真 15　奥の坊奥池西遺跡全景（南から）

写真 16　機械掘削状況

写真 17　Ⅰ区遺構検出状況（南から）

写真 18　Ⅱ区遺構検出状況（南西から）

写真 19　遺構検出作業風景

写真 20　遺構掘削作業風景

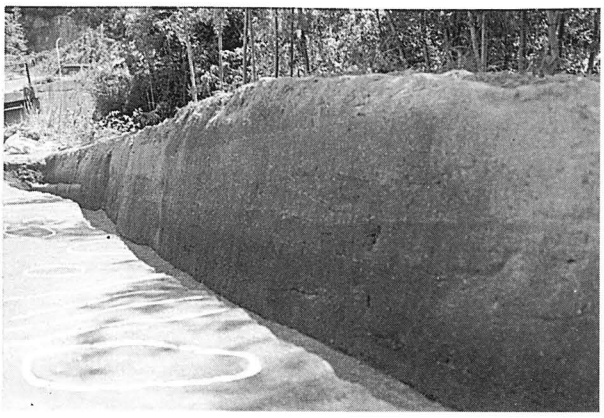


写真 21　Ⅰ区西壁土層（北東から）

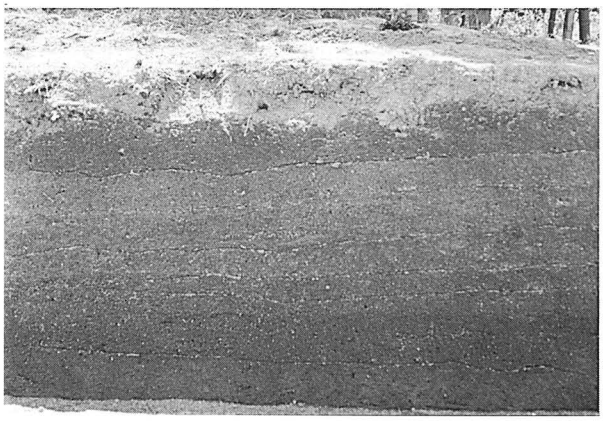


写真 22　Ⅰ区西壁土層（東から）

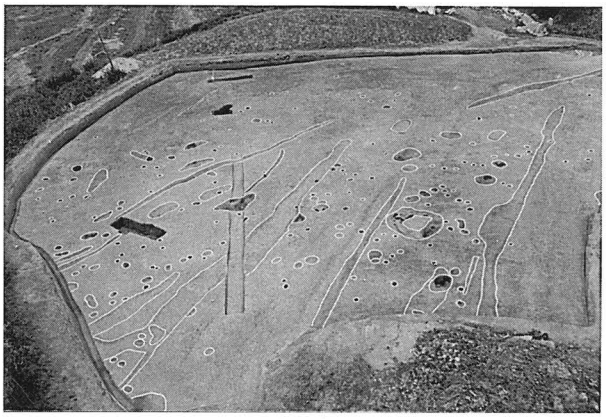


写真 23　Ⅰ区完掘状況（南から）

写真 24　Ⅰ区完掘状況（南東から）

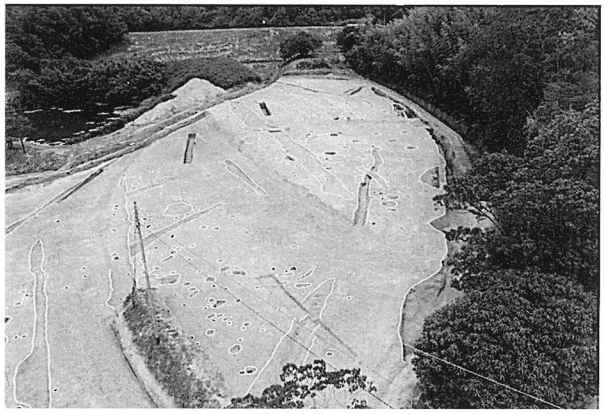


写真 25　Ⅱ区完掘状況（南西から）

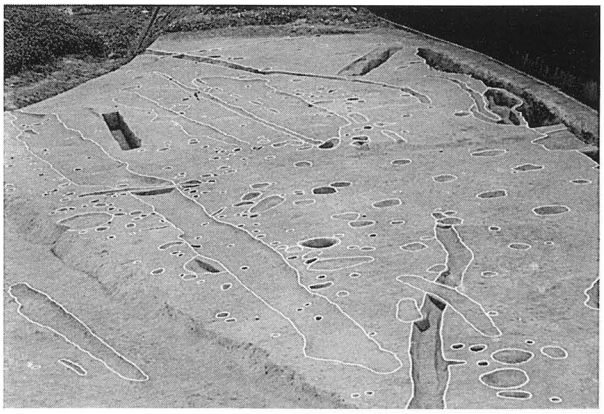


写真 26　Ⅱ区完掘状況（西から）

写真 27　遺跡全景（東から）

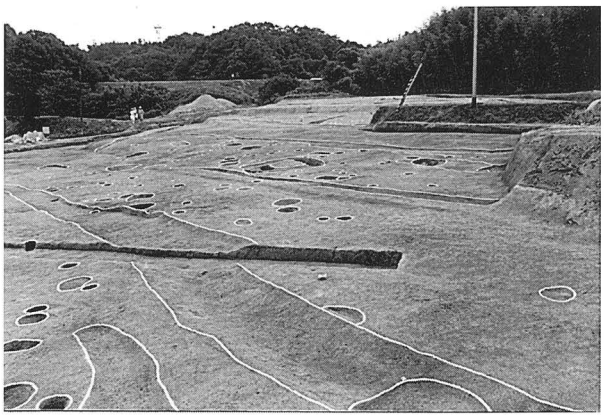


写真 28　遺跡全景（西から）

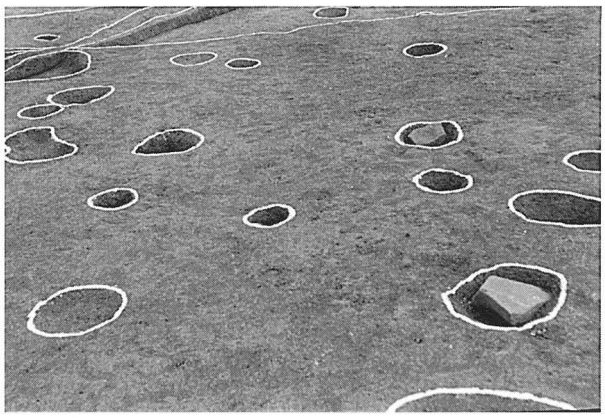


写真 29　SB21001 完掘状況（南から）

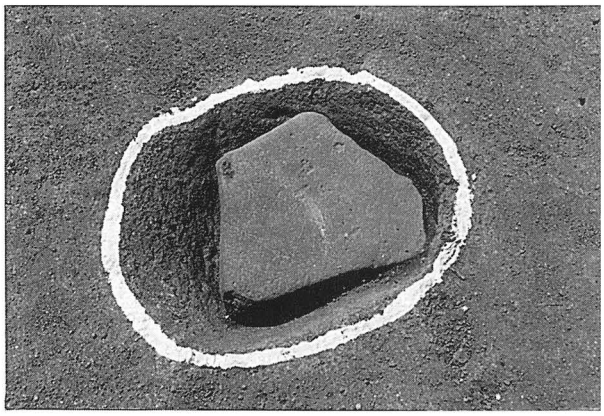


写真 30　SB21001 礎石（東から）

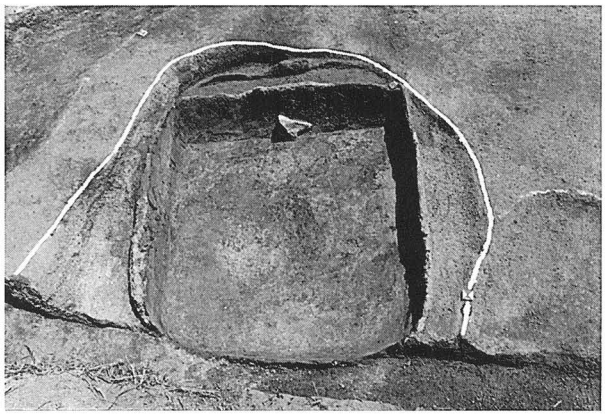


写真 31　SE11001 水溜め検出状況（北から）

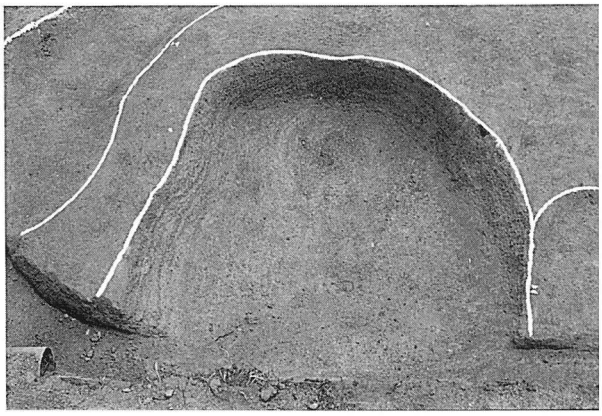


写真 32　SE11001 完掘状況（北から）

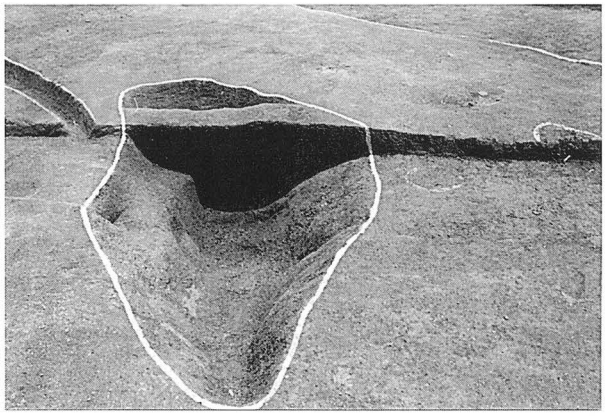


写真 33　SK11013 断面（西から）

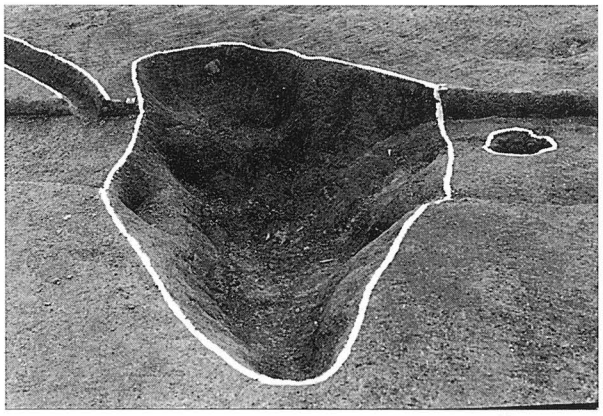


写真 34　SK11013 完掘状況（西から）

写真 35　SK11022 断面（北から）

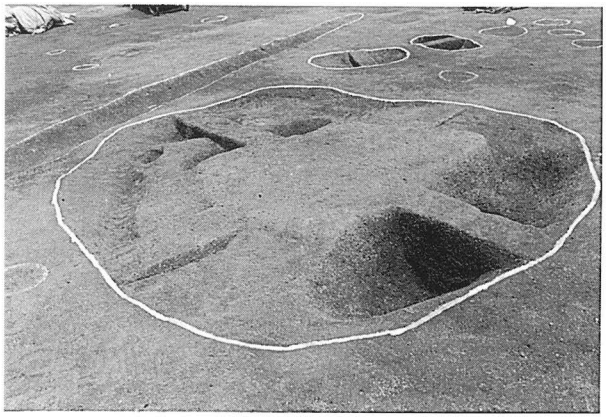


写真 36　SK11034 断面（南東から）

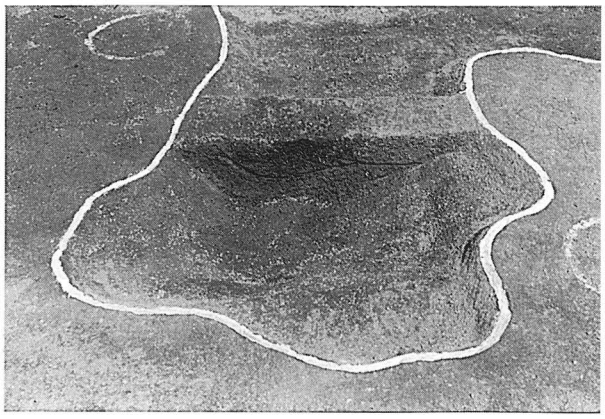


写真 37　SK21010 完掘状況（南から）

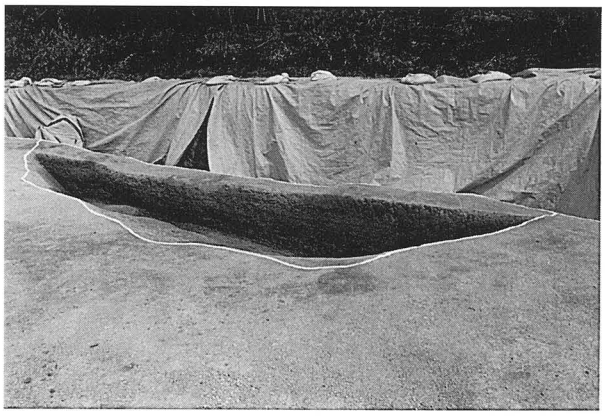


写真 38　SK21017 断面（北から）

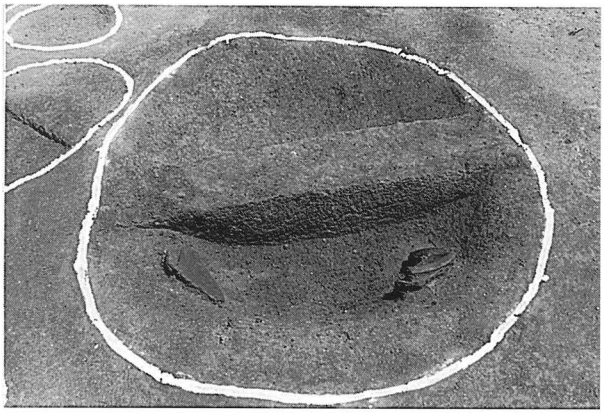


写真 39　SK21031 土器出土状況（南から）

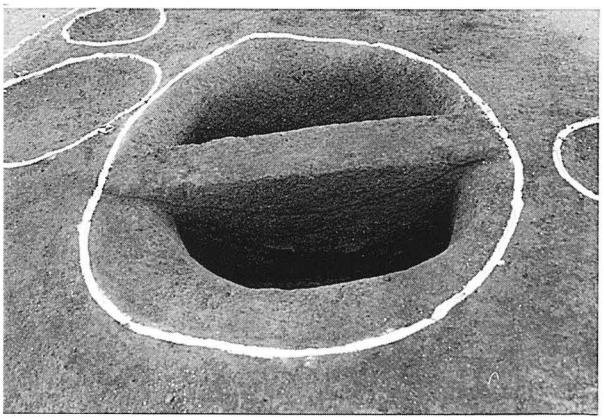


写真 40　SK21031 断面（南から）

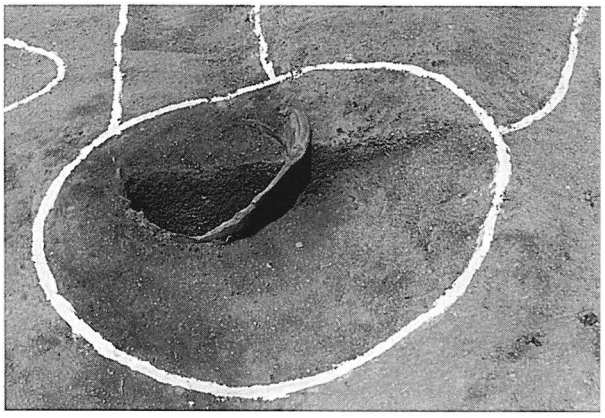


写真 41　SK21061 断面（南西から）

写真 42　SK21061 完掘状況（南から）

写真 43　SD21001 断面（東から）

写真 44　SD21008 断面（東から）

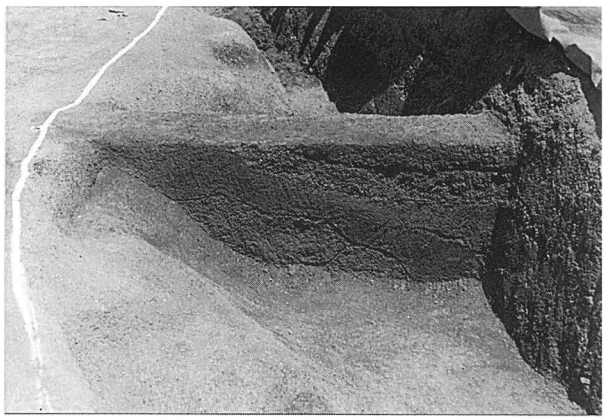


写真 45　SD21008 断面（西から）

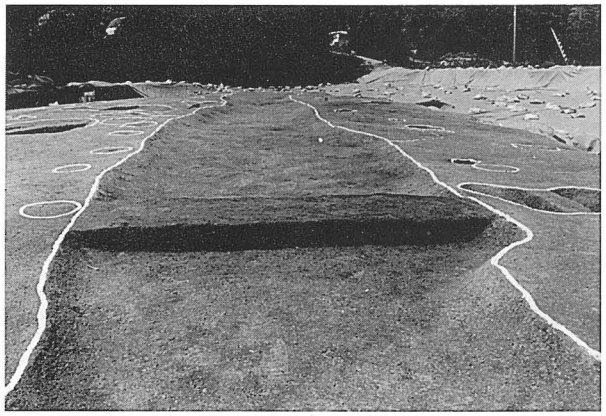


写真 46　SD21010 断面（北東から）

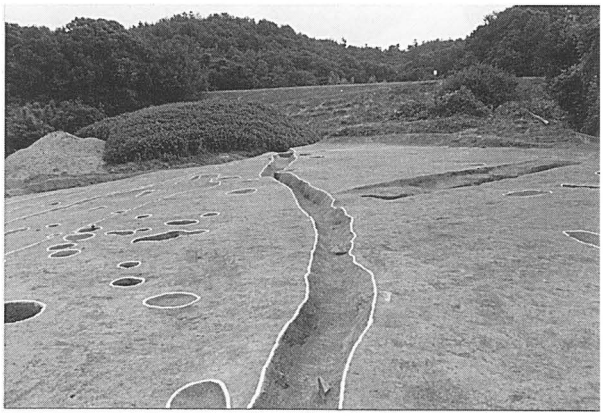


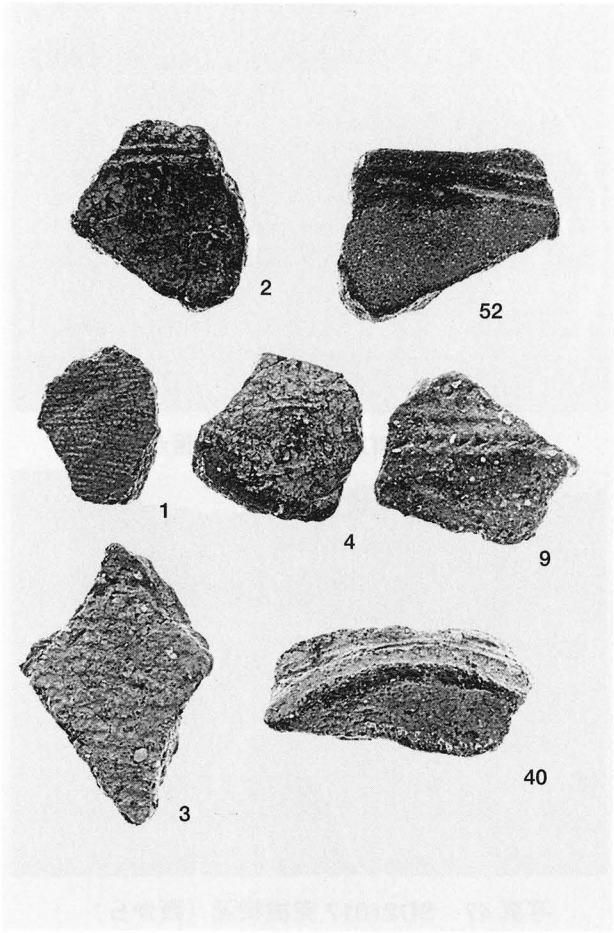
写真 47　SD21017 完掘状況（西から）

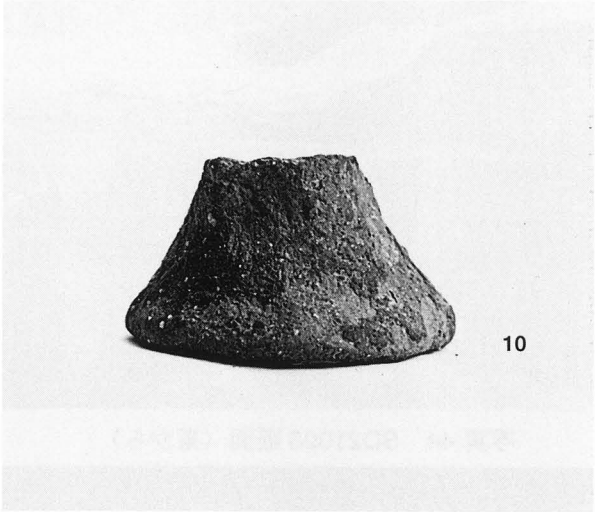
写真 48　職場体験学習風景（遺構掘削）

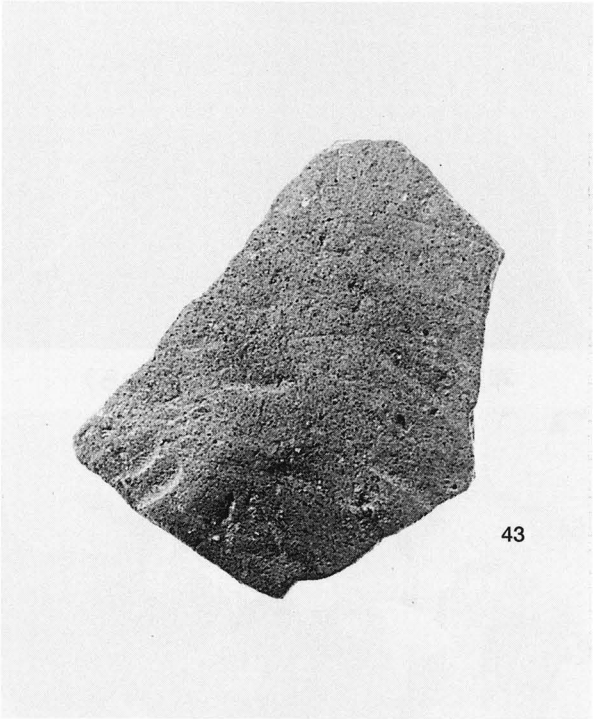
写真 49　職場体験学習（遺構掘削）

写真 50　職場体験学習（接合）

写真 51　職場体験学習（土器洗浄）







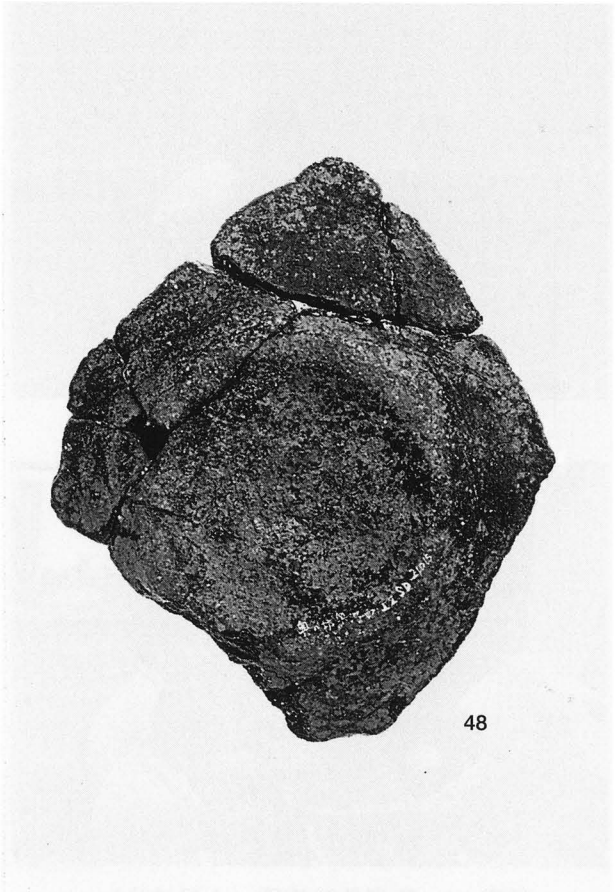
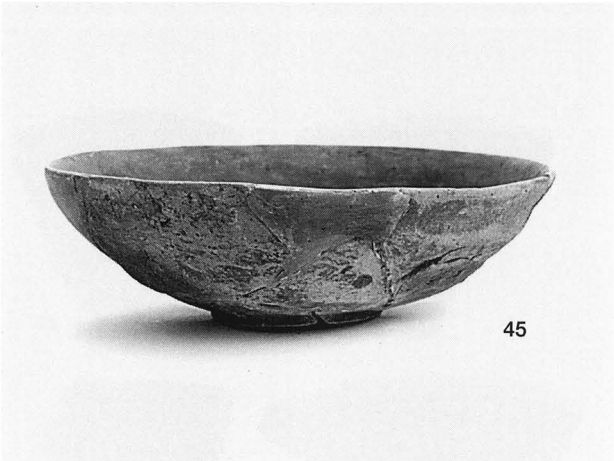
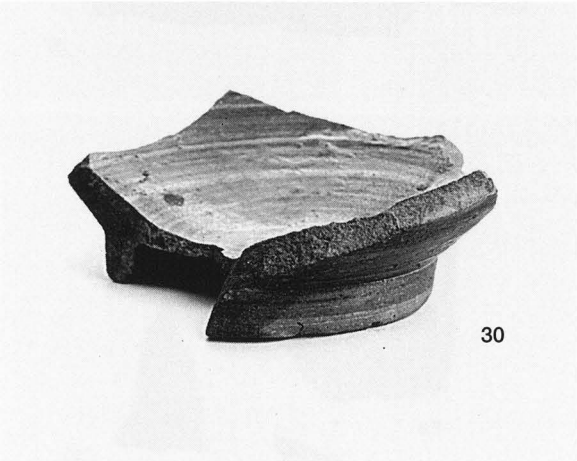


写真 52　奥の坊奥池西遺跡出土遺物①





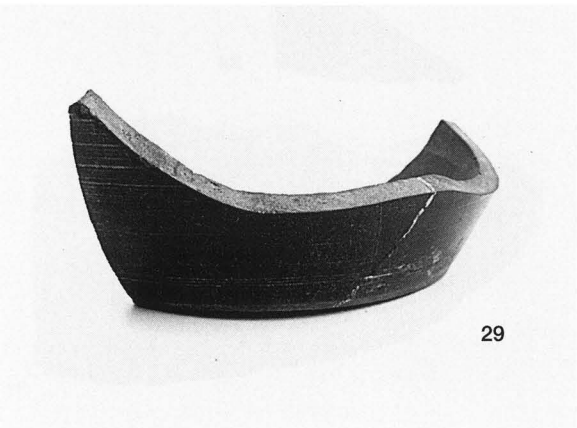
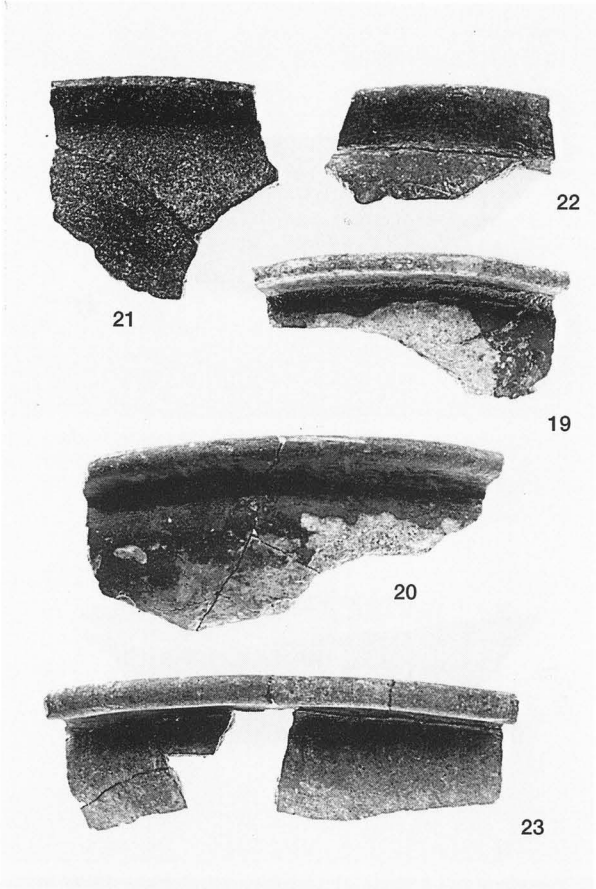
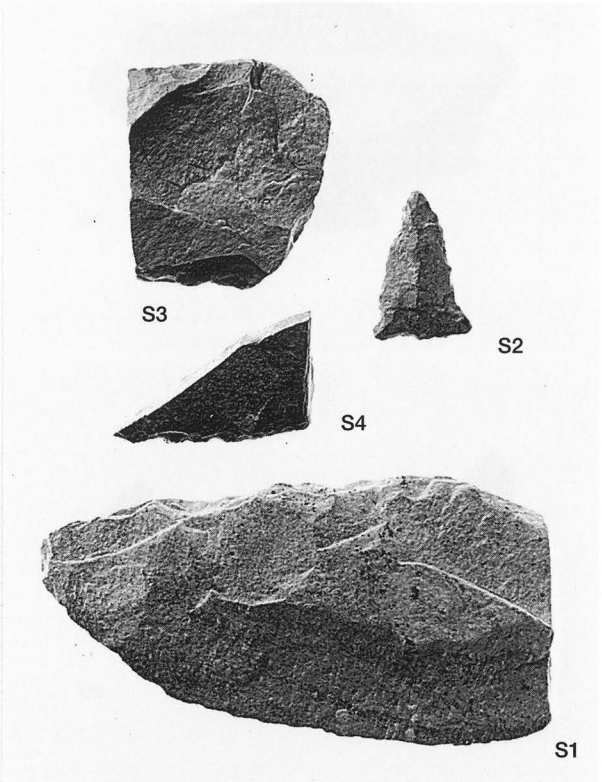


写真 53　奥の坊奥池西遺跡出土遺物②





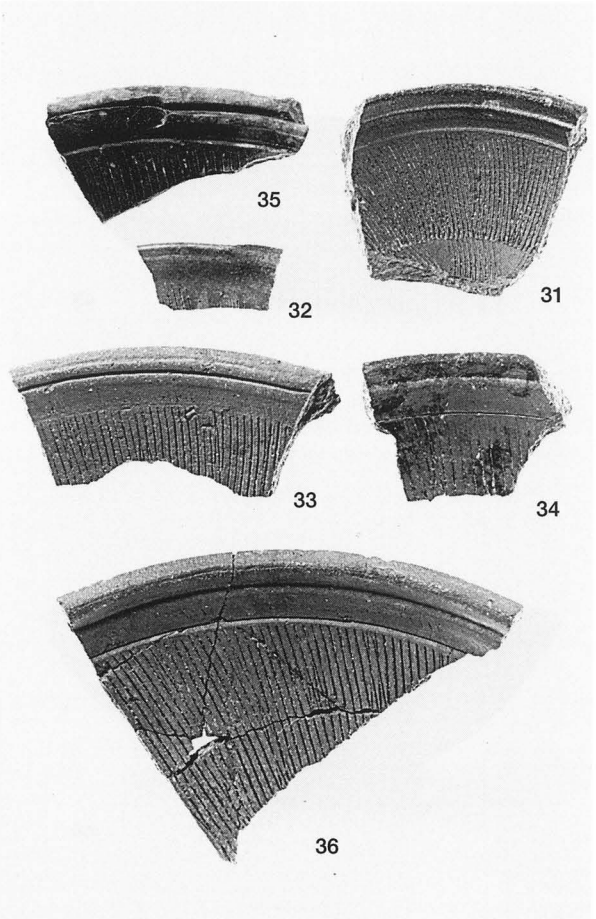


写真 54　奥の坊奥池西遺跡出土遺物③

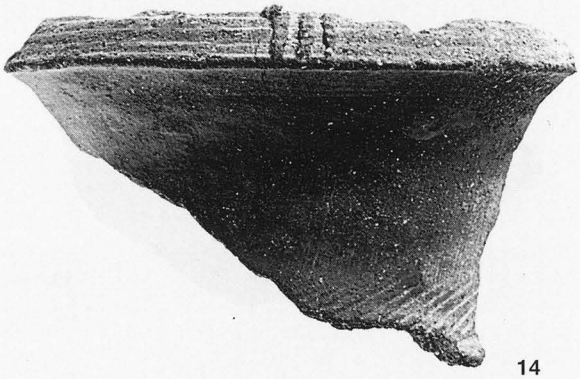


写真 55　香川大学所蔵大空遺跡出土弥生土器①

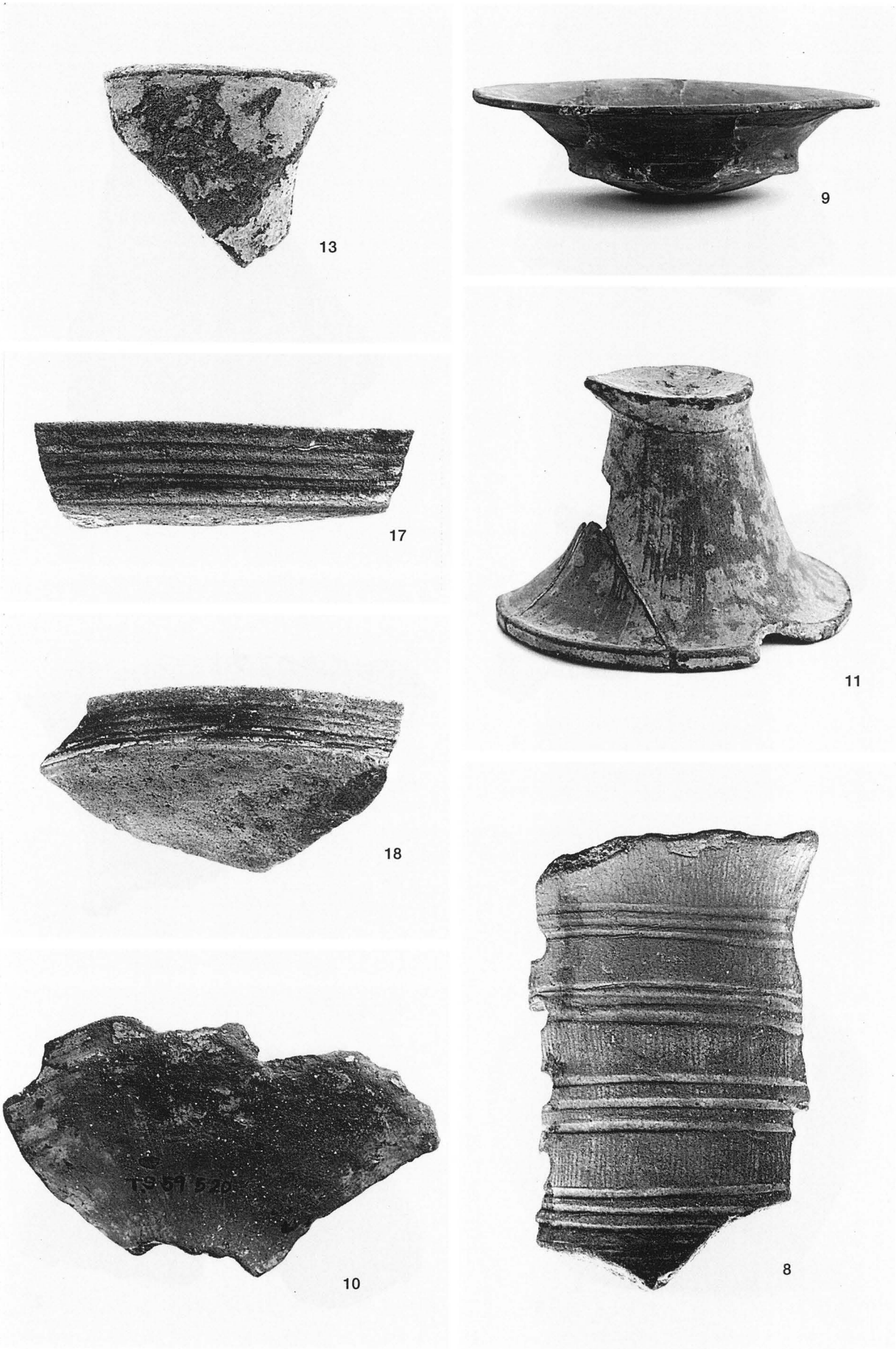


写真 56　香川大学所蔵大空遺跡出土弥生土器②

写真 57　香川大学所蔵大空遺跡出土弥生土器③

報 告 書 抄 録

ふりがな	おくのぼういせきぐんⅢ（おおそらきたいせき・おくのぼうおくいけにしいせき）
書名	奥の坊遺跡群Ⅲ（大空北遺跡・奥の坊奥池西遺跡）
副書名	高松市東部運動公園（仮称）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第３冊
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第 79 集
編著者名	大嶋 和則
編集機関	高松市教育委員会
所在地	〒760－8571　香川県高松市番町一丁目８番 15 号　　TEL087－839－2636
発行年月日	西暦 2004 年 12 月 28 日

ふりがな 所収遺跡名	しょざいち 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
おおそらきたいせき 大空北遺跡	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 たかまつちょう 高松町	37201		34° 19′ 30″	134° 07′ 30″	1999.4.16 ～ 1999.6.4	2,200 ㎡	高松市東部運動公園（仮称）整備事業
おくのぼうおくいけにしいせき 奥の坊奥池西遺跡	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 たかまつちょう 高松町	37201		34° 19′ 30″	134° 07′ 30″	2000.4.17 ～ 2000.7.25	3,600 ㎡	高松市東部運動公園（仮称）整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大空北遺跡	集落	弥生 近世	竪穴住居 溝 土坑 土坑 鋤溝	弥生土器，石器 瓦質土器，陶磁器	
奥の坊奥池西遺跡	集落	縄文 弥生 中世 近世	落とし穴 竪穴住居 土坑 溝 土坑 掘立柱建物 溝 土坑	縄文土器 弥生土器，石器 瓦器，土師器 陶磁器，土師質土器	

高松市東部運動公園（仮称）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
第3冊

奥の坊遺跡群Ⅲ
（大空北遺跡・奥の坊奥池西遺跡）

平成16年12月28日

編　集　高松市教育委員会
　　高松市番町一丁目8番15号
発　行　高松市教育委員会
印　刷　有限会社 中央ファイリング